

---

# 星斗幻想紀

風光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星斗幻想紀

### 【Nコード】

N3709C

### 【作者名】

風光

### 【あらすじ】

『星斗幻想紀』で取り上げている内容は、いずれも遠いようで身近なものばかりです。星辰のように美しいものと、その対極にある《影》と…星夜の町の物語に、どうぞそっと耳を傾けてみてください。

# 1 月曜の光風

私達は、あれらをどう扱ってもいいのよ…

まったく…いつもと変わらないぐらい、綺麗な夕焼けなんだから

…

あたしね、その日、珍しく溜め息なんて吐いていたの。

…だって…だって、仕方ないじゃない…？

中学二年生の夏から、ずっとベッドの上において…足が動かなくな  
ったことなんて、もう気にしてなかったのに…

でも、でもね？ …だからって、「もう、治らないんですね…」

なんて…そんな母さんの呟き、聞きたくもなかったわよ…！

原因も分かんなくて…ね。心の底じゃ、そうかも知れない、って  
考えてたけど…でも、月に二回も検査をしてもらってるし、もしか  
したら…って。

…そう思ったって、いいじゃない。

折角、三年生になったんだし…礼奈と一緒に受験勉強でもして…

でも、でもね…もう、それも無理なのよ。

…だから、あたし…ほんのちよつと、泣いてたの。

勿論、ちよつとだけなんだけどね。

そう、もう避けられない事で悲しむなんて、らしくないんだもん。

「あつ…」

今、金星の輝きが強くなった気がする。

あたしの部屋の窓ね、西に向かって大きく開けてるの。いつも、  
出来るだけ好きな星が見られるようにしてもらってるのよ。前ね、  
そんなあたしの話を聞いて「美星じゃなくて、見星ね…」なんて礼  
奈、くすくす笑ってたけど…うん、ちよつと許せないな。あたし、

結構この名前が気に入ってるんだから。

その星の中でもね、あたしは金星が一番好き。茜色の空を背景にして、あんなに綺麗な黄金色に輝けて…とつても羨ましい気がする。勿論、あたしが見れるのは宵の明星だけなんだけどね。

でも、でもね…？ 今日、何だか、特別に強く光っているみたい。瞬きもしないで、じっと見つめてきてくれる…励ましてくれるのかな？ なんて。

…本当に、あたし…ちょっとときどきしてる。

この日はね、『特別』な事ばかり詰め込まれてたみたい。

あたしがそうやって、暮れていく夕空を黙って見ていると…急に、その窓の外から、若い男の人の声が聞こえてきたのよ。

「やあ、元気になられたようですね」

え？ …えええ！

優しいそうな声だったんだけど…でも、でもね？ 窓から不意に一人の小人が入ってきたら、あたしだって死ぬほど驚くわ。

小人の年齢ってよく分かんないけど、にこにこした丸顔はあたしより五つぐらい年上かな。帽子を軽く被ってて、どっちかって言えば落ち着いた服装なの。

その小人ね、ベッドの上で半身を起こしてるあたしに近付いてくると（空を飛んでるのよ！ でも、何だか別に不思議じゃないみたい）ちよつと痩せたかなって思う指先をとって、にっこり微笑んでくれたの。

「僕は、ヴェストルと言います。どうですか、美星さん。星夜の町に行ってみませんか？」

ヴェストル？ 黒くて短い髪の下に見えるのは、普通の藍色の瞳なんだけど。混血なのかな…あれ？ 小人なんだもんね、別に国籍なんて…

ええくん、あたし、今、とつても混乱してるう。

「さあ、立って下さい」

立って下さいって言われても、あたし……

なんて言おうとした時には、もう、あたし、ベッドから降りてたの。でも、でもね…全然、不思議に思えないのよ。

「そうですよ。僕がお誘いしたんですからね」

そんな、簡単に言わないで！ 大体、どうしてあたしまで、部屋の中に浮かんでるのよ。

「僕と一緒になら、別に何でもありません。さあ、美星さん」

「さあって…」

…あゝあ。あたし、今日一日くらいは『悲しみに耽る女の子』してたかったのに！ どうして、窓の外に飛び出さなくちゃいけないのよ。

そりゃね、ブルーになるなんてらしくないけど、でも、でも今日くらいいゝ

「もつと、高くまで行きましようか」

「え？」

ちよ、ちよつと待ってよ！ わっ、わわわっ！

…これくらい高く昇ると、空も綺麗ね。オリオンがとっても近く見えるし、シリウスなんて相変わらず冷たい感じだけど、金星が妬むくらいの澄んだ光を放ってるじゃない。

「どうですか？」

分かってるわよ、ヴェストル。あたし、こんな星空が見られてとっても満足してるわ。でも、でもね？ こんな高い所まで連れてこなくてもいいじゃない。それに、他の日でもよかったんでしょ？

「美星さん、今日は沈んでましたからね。金星の煌めきを強めたりもしたんですが、どうしても腑甲斐無さを感じて…思わず、自分で飛び出してきてしまったんですよ」

少し照れたように、ヴェストルがそう言ってきたの。

…え？ 金星を、って…

「西方に輝く間は、僕の管轄ですからね。別に不思議ではありません

ん

そう？ とつても奇妙な話だと思っけど…

でも、あたしね、尋ねるのも馬鹿らしく思えてきたのよ。

「…ねえ、そろそろ下りない？」

「そうですね」

あたしの指を引いて、ヴェストルが先に落ちていく。あたし、もう一度だけ、満天に広がる宝石の群れを振り返ったの。

正直に言っただけ、この小人が連れてきてくれたお陰で、足の事なんてすっかり平気になってたのよ。こんな『素敵』な夜空の下では、ちよつと情けないくらい些細に思えるんだもん…

ね。

だんだん、地上の形が見えてくる。マッチ箱くらいにしか見えなかった塊が、ちゃんと高層ビルに変わっていくのよ。あたし、そんなに高くまで昇ってて、全然恐くなかったの…ヴェストルが指を放したら、落ちてたかも知れないのよね。

あれ？ 何か、変な感じがする。…まるで、人が居ないじゃない。

ビルの隙間にね、青くて分厚い闇が流れてるの。でも、でもね。

それ、淡く澄んだ暗闇で…柔らかな毛布みたいかな。霞がかかったみたいに、殆ど何も見えないのよ。

「星夜の町で見えるのは、ほんの僅かな存在なんです」

道のすぐ上をね、あたし達、飛んでたの。本当に、誰も居ないのよ…やっぱり、気味が悪いじゃない？ だから、あたし、小人に文句を言おうとして…

その時、一つの明かりを見つけたの。

急いでヴェストルから指を放して、あたし、道路に飛び降りてた。だって、ね？ 小人より、やっぱり普通の人の方がいいじゃない？

しかも、その窓から漏れる灯りで照らされたのが、友達だったんだもん。

「夕子！」

「……………」

小さな家の門に駆け寄ったあたしに、夕子も気付いて出てきてくれる。半年ぶりで、とつても懐かしくて…あつ！ あたし、でも、本当は足が動かなくて……

「ミホじゃない！ よく『子どもの家』が分かったね」

あれ？ 夕子、足の事なんて全然気付いてないみたい。『子どもの家』…？ そう言えば、夕子、そんな所でアルバイトしてたかな。「なあんだ、デートの途中だったの？」

夕子の言葉に、あたし、とつても驚いてた。だって、あたし、誰とも…

「違いますよ。美星さんとは、つい先程知り合っただばかりですからね」

愉しそうな声に、あたし、慌てて振り返ってた。ちよつと待ってよ！ 小人なんて見たら、夕子、気絶するじゃない！

…そう思ったのに、ヴェストルなんてそこには居なかったの。代わりに立ってたのは…細面で、柔らかな髪をした優しそうな男の人。藍色の瞳がとつても深く、静かで…ちよつと、冷たいくらいかな。でも、でもね？ とつても格好良いのよ！ 思わず真っ赤になつて、どきどきしちゃったくらい。

あれ？ …でも、あたし…この人、前に見た気がする……

それに、さっきの声、ヴェストルの…まさか…

「ねえ、ミホ、中に入ってみる？」

「そうしましょうか、美星さん」

茫然としてるあたしなんて無視して、二人とも仲良く『子どもの家』に入っていくじゃない。あたし、大急ぎでその男の人を捕まえ、囁いてたの。

「ちよつと！ そんなに大きくなれたの？」

「はい。それに、僕が一緒なら足の事も気付かれませんよ」

平気な顔で、当然みたいに話さないでよ！

でも、でもね…うん。この顔じゃ、文句も言い難いのよ。本当

に、格好良すぎるんだもん。

「早く！」

「う、うん」

暫く、ヴェストルとは話をしない方がいいみたい。ちょっと、落ち着いてから…ね。

「ごんまりとした玄関。とっても綺麗に整えられてる。

「あつ、また…」

急に夕子が正面にある掲示板に駆け寄ったの。

見たら『AIDS撲滅！』って書かれたポスターに、太くて赤い線が乱暴に引かれてる。

「…え？ どうして…」

だって、ここ…HIVに感染した子ども達が居るんでしょ？

あたしの不思議そうな視線に気付いて、夕子は恥ずかしげに話してくれたの。

「こんな言葉を使わないでおこう、って人達がいるの。ボランティアをしている人の間でも、意見が分かれてるのよ。AIDSになった人達に、早く死ねって言うてるようだ、って…」

「まさか！ そんなはず、ないじゃない？ ここに居る子ども達にだって分かるわ。気の遣いすぎよ」

あたしの言葉に、夕子も頷いてる。

「でも、日本人って遠回しに言うでしょう？ 曖昧にして…」

「でも、それってきつと、偽った優しさだと思っの。だって、AIDSっていう病気は小さくなくちゃいけないでしょ？ だったら、それははっきり言うべきよ」

「皆が、ミホみたいならいいんだけどね…」

そう呟いた夕子って、何だかとっても疲れてたみたい。

「おや。男の子が、部屋から出てきてますよ」

急に、ヴェストルの声がある。陽気な感じなんだけど…変におかしくなったあたし達を暖かく包み込んでくれる、そんな声。



「駄目じゃない、まあくん！」

そのまあくんは、夕子の姿を見付けて、嬉しそうに近付いてくる。……とつても、痩せてるの。夕子に伸ばしてくる腕なんて、骨にか見えないじゃない……

「この子ね、今日はどうしても調子が良いのよ」

軽々とまあくんを抱き上げて夕子の言葉は、ちよつと信じられなかった。だって、明るく微笑んでるんだけど……こんなに痩せ細つてて、今にも倒れそうなのに……

……調子が良いなんて……

夕子ね、部屋に入ってその子をベッドに戻してる。

「お姉ちゃんも、もう帰るからね。ベッドから出たら駄目よ？」

「いや……帰らないで」

四歳にしかなくてないまあくんが、必死でしがみついている。あの頼りない腕で、出せるだけの力で……

でも、でもね。夕子、少し厳しいくらいにその腕を解いたの。

「又、来るからね」

「……飴、くれる？」

「ええ、いいわよ」

夕子、それ……

……やつぱり、まあくんは飴を放り投げてたの。だって、きつと、帰ってほしくなかったから……何かをねだって引き留めたかったから……ね。

「夕子、あたしが押さえとく？」

部屋を出てしまえば、諦めると思つたのよ……

「お願い、ミホ」

だからね、あたし、まあくんに触ろうとして……

……そう、本当は、少しだけ恐かったの。でも、でもね？ こんな事で感染しないことも知ってたのよ。

真剣に見守る夕子の前で、あたし、すぐにまあくんの腕を取って宥めてた。

「又、今度ね。まあくん」

「やだ！ ……帰らないで！」

「そもいかないのよ。我慢しなさい」

あたし、なんて酷い言い方してるのかな…

まあくんね、目に一杯の涙を浮かべてあたしを睨んでくるの。

あたし、それ以上、何も言えなくて……

その時ね、そつとヴェストルが近付いてきたの。そして、まあくんの額に優しく手を翳してる。

「お休みなさい、まあくん」

ふつ…と瞼が閉じられて、可愛い寝息が聞こえてくる。

……ふうん……

あたし、部屋の外に出ると、待つてくれた夕子に少し気になつて尋ねたの。

「ねえ、まあくんは親はいないの？」

「…ふうん、いるわ」

「なんだ、じゃあ、考えすぎだったのね。あたし、母さんとかがないから、あんなに夕子を慕ってるのかと思つてた」

そんな風にあたしが言つたら、夕子、とつても悲しそうな目をしたの。

「ミホ…まあくんね、両親はすぐ近所に住んでるのよ。でも…あの子が生まれてから、一度も会いに来たことがないの……」

「え？」

「四年間も、まあくん、『親』が何かも知らないで生きてきたのよ。HIVに感染していることが分かってから…

…捨てられたのよ……」

「そんな！」

じゃあ…四年間、母親も父親も知らなくて…家族って何かも分からないで……

…そんな……

「まあくんにはね、きつと、どうして自分にだけ『親』がいなくて…どうして、外にも出られずに、こんな所に居なくちゃいけないのか…全く分かんないはずなのよ。」

…どうして、自分がこんな目に遭わなくちゃいけないのか…って、ね」

「そんな『人間』もいるでしょうね」

ヴェストルが、簡単に言ってる。

あたし、そんな他人事みたいな言葉が許せなくて叫んでた。

「ヴェストル！ そんな言い方ないじゃない。可哀相と思わないの？」

でも、でもね…ヴェストル、冷たい静かな瞳であたしを見てくるのよ。

「美星さん、僕はそう思いません。彼等だって、頑張ってる生きてきているんです。それを可哀相だなんて言うのは、失礼でしょう」

…！ そう、かも知れない…そうかも知れないけど…

「美星さんは、お優しいですからね」

鋭さの消えた視線が、大きな優しさを込めてあたしを見てくれる。でも、でもね…

あたし、目を逸らせたの。何だか、とつても遣瀬無い気がする…

「…ミホ、一緒に帰ろうか」

夕子、あたし達の変な空気を察して、返事も聞かずに仕度をする。

あたしね…正直に言っつて、もうヴェストルとは離れたかったの…

塞いでいた気持ちを慰めて来てくれたのは、とつても感謝してる。

でも…小人だからかな。ちよつと、あたし達とは違うみたい…

「少し、寒いくらいですね。美星さん、大丈夫ですか？」

どうして、こんなに明るく話せるのかな。あんなに冷たい言葉を言ったのに…

…ううん。きつと、ヴェストルにしてみたら、冷たくなんてなか

ったのよ。それが《真実》だから……

でも、でもね？ 《真実》を告げるばかりが、良いことじゃないでしょ？

……これって、あたしが優しいから……？

ううん、違う……

「それじゃ、夕子さんはアルバイトにしてもらえたんですね」

「はい。本当はボランティアでいきたくったんですけど、父親がないから、って……気を遣っていたら、アルバイトで雇ってもらえたんです」

あたしが口をきかないから、二人とも、気にしてくれながらも勝手に話を続けてる。

ううん……ちよつとブルーになってるかな、あたし……

今気付いたら、いつの間にか夕子のマンションまで来てるじゃない。

その時ね、夕子が声を掛けてきてくれたの。

「ねえ、ちよつと寄っていかない？」

「でも、もう遅いわよ」

「大丈夫！」

ちよつと疲れてる気がするし……ここは甘えようかな。

エレベーターに乗り込む頃には、あたし、すっかり元気になった。ヴェストルも、後ろにさがって聞き役になってるし……

それにね、ヴェストルのことで、あたしがそんなに気を揉む必要なんてないじゃない？ あたしは、あたし。考えが違ったって、それは『当然』なんだもん。

「夕子の妹って、何歳になった？」

「やっつと一年生よ」

「そうよね。そろそろ生意気になってくるわよ、きつと」

「まさか。あんなに大人しい子も珍しいのよ」

「だって、夕子もそう言われてたじゃない」

まだ、夕子も大人しい方なだけだね。

あたし、半年ぶりに出歩いていることなんてすっかり忘れて、夕子と笑いあってた。

でも、でもね…こうしていられるのも、ヴェストルのお陰なのよ…  
何だか、とつても複雑な気分。

見えてきた玄関だって、もう二度と歩いては来られないと思ってたんだもん。

「……………」

「あれ？」

夕子の家の中から、悲鳴と鳴き声が微かに漏れてきてる。

あたし、夕子と顔を見合わせて、急いで駆け出した。

どうしたんだろう…

「お母さん？ ……陽子？」

扉を開けて中に飛び込んだ途端、妹の陽子ちゃんが夕子に抱き付いてくる。

…え？ あの、腕の赤い傷は…噛み傷？

夕子、恐怖で震えてる陽子ちゃんを抱きながら、不安そうにあたしを見てくるの。でも、でもね？ あたしだって、これ以上中に入る勇氣なんて…

その時にね、後ろから高い施錠の音がしたの。

「行きましよう、美星さん」

ヴェストル…何だか、さっきみたいに冷たい声をしてる…

でも、そんな事に拘ってる余裕もなかったのよ。

あたし、精一杯の勇氣を出して、靴のままあがると、すぐ目の前にある扉を開けて…

「…小母さん？」

あたし……恐くて、身動き出来なかった…

…だって！

大きくね、立ち塞がってるの。…目をつり上げて…あんなに優しくかった小母さんが…

まるで、まるで…鬼みたいになって。

「お母さん…」

茫然とした声が、後ろから零れてる…

あたしね、その時、さっきの陽子ちゃんの傷を思い出したの。まさか、陽子ちゃんに噛み付いたの…

「丁度良かったわ。夕子、貴女にも…」

にやつと笑って…何も言わないで…

ゆっくり近付いてくるのよ。

…これって…これって、きつと『夢』よね？ …ねえ、ヴェストル、そうよね？

「私だけがなんて…夕子、貴女にも感染させてあげるわ」

「え？」

あたし、その言葉の意味を考えたりも出来ないまま、夕子の前に立ってたの。だって、小母さん…今にも、夕子に掴みかかるうとしてるんだもん。

ヴェストルも、音もなくすぐ傍に来てくれる。ちらつと見上げたその横顔にはね…でも、まるで、表情なんて無かったの…

「陽子はね、私が噛み付いたから、もうきつとHIVに感染してるはずなのよ。夕子だって、これから一人で生きていたくないでしよう？？」

「HIVに？」

「そうよ。私はどうせ死ぬの。」

だから。貴女達も道連れにしてあげるわ」

小母さんね、薄く笑ったままで話してる…

逃げ出したいよ…こんなの、見ていたくない…

「こんなに、苦労してきたのに…私だけが死ぬなんて…

そんなこと、させないわよね？ 夕子、私だけを死なせないわよ

ねえ…」

静かに、呟いてる…まるで、あたし達が聞いてなくてもいいみたい…

「…HIVに感染した腹いせに、この少女に噛み付いたんですか」

その時、ヴェストルが口を開いたの…氷みたいに、掴み所のない  
厳しい声で…

「そうよ。どうせ、私が居なければ生きていけないもの。一緒に死  
んでもらうわ」

「でも…でも、AIDSになるまで、潜伏期間もあって…！」

あたし、必死になって叫んだのに…小母さん、こっちを見て嘲笑  
ってる。

「結局は、死ぬんじゃない。なら、そんなものはどうだっていいの  
よ」

そう言っつて、小母さん、急に思い出したみたいに右手のキッチン  
に飛び込んだの。でも、あたしが動こうとする前に、小母さん、手  
に……

包丁を持って、戻ってきたのよ…

「そうよ。今死んでも同じじゃない。どうせ、私が居なければ生き  
ていけないもの。だから、私は頑張ってきたのよ。」

夕子、もう感染なんて面倒なことはいわね。皆、今ここで、私  
が殺してあげる！」

夕子、そんな言葉を聞かせないように、陽子ちゃんをしつかり抱  
き締めてる。

あたし、もう…どうしたらいいのかわかんなくて……

…泣きたかった。…思い切り、泣きたかった。

でも、でもね…あたしより、夕子の方が…

だから、あたし…必死になって涙をこらえてたのよ……

「今では、その潜伏期間も伸ばすことが出来るんですよ。感染した  
からと言って必ずAIDSを発病するわけでもなく、すぐに死ぬこ  
とはありません」

胸元で腕を組んでね、ヴェストル、見下すように言ったの。

そんな態度に、小母さん、狂ったみたいに叫んでる。

「うるさいわよ！ そこ、どきなさい！」

包丁が振り翳されて…

…でも、でも…あたし、夕子を庇い続けてた。包丁が迫ってきてもね…逃げ出したりしなかったのよ…

だって…ね。あたし、本当は足が動かなくて…もう、外に出ることも出来ないのよ。でも、夕子は違うわ。あのまあくんにとって、夕子はいなくちゃいけない大事な人なの。あたしなんかとは、違うのよ。

包丁を握った手が、すぐ傍まで来てる。…あたし、目を閉じようとして…

…その時ね、ヴェストルが小母さんの腕を掴んでくれたの。

すぐ横から、静かな声が聞こえてくる…

「僕は、貴女が自暴自棄になって誰を殺そうと構いませんが…美星さんを傷付けることは、絶対に許しません」

…ヴェストル…

「放しなさい！」

「分かりました」

ヴェストル、掴んでた腕を軽々と突き放してる。そして、感情なんて少しも見せないで続けてたの。

「貴女にとって、今死ぬことも、何年か後で死ぬことも同じだと言うのでしたら、僕は止めませんよ。」

すぐに、その手にしている包丁で、喉を掻き切ってしまったらどうですか？」

「そんな！」

慌てて見上げたら…ヴェストルね、あたしには優しく笑ってくれてるの。安心してもいいみたい…思わず、そんな気になるのよ。

それにね…こんな時なのに、格好良すぎるんだもん。

……どきどきしてくるのよ。

小母さん、じっと手の中の包丁を見つめてる…

ちよっと恐い静かな時間が流れて…

でも、でもね。やっぱり…小母さん、自分の手で死ぬことは出来



なかったのよ……

ヴェストル、暫くしてからそんな動けない小母さんに向かって言ったの。

「子どもは、貴女の玩具じゃありません。貴女に、夕子さんや陽子さんを殺す権利なんて全く無いんですよ。

ですが、自殺する権利はあります。ですから、そちらの方は好きなようにして下さい」

「私、私……」

「死を与えようとした者が、死を畏れるとは不思議なものですね」  
ヴェストルね、静かにそう言っつて背を向けてるの。

玄関から、外に出ようとしてる。

「ちよ、ちよっと!」

あたし、ヴェストルを慌てて追い掛けたの。夕子も、陽子ちゃんを抱き上げて続いている。

下に降りる階段の近くで、ヴェストル、やっと振り返ってくれた。

「大丈夫ですよ、美星さん。あの人は、もう二度とあんな事はしませんが」

「でも……」

このまま帰るなんて……あたし、出来そうにない……

何が出来るかなんて分かんない。……ううん、何も出来ないと思う。でも、でもね？ あたし……

その時ね、後ろからしつかりとした声が聞こえてきたの。

「……大丈夫。ミホ、後は何とかしてみるわ」

夕子……

とっても真剣で……悲しみなんて、打ち砕いてる……

夕子って、こんなに凄い力があつたんだ。

「夕子さん、陽子さんは感染していませんよ。そして、もう一度、あの人の検査もやり直してみてくださいませんか」

「え?」

「人間は、多くの間違いをするものですからね」  
「…はい」

夕子、力強く頷いてる。

あたし、あたしには…頑張っただけで言えなかった。きっと、夕子は精一杯するはずだもん。

だから…ね。最後は…そっと握手しただけで別れちゃったの…でも、でもね…あたしの気持ち、分かったよね？ きっと……

「ねえ、本当に小母さん、感染してないの？」

随分経ってから、あたし、歩きながら後ろのヴェストルに尋ねたの。そしたら、足下から答えが返ってきたのよ。

「ええ、もう治しておきましたからね」

見たら、また、小人になっただけじゃない。あたし、呆れたように言っただ。

「ねえ、どっちが《本当》のヴェストルなの？ さっきは、少し恐かったけど……」

それに、あんなに格好良かったのに。小人じゃ…ねえ。

「《本当》なんて、ありませんよ。《本当》とは虚無ですし、無限なんですから。それは《唯一の本質》に繋がる、一つの『様相』でしかありません」

「…分かんないわ」

あたし、正直に伝えてた。  
でも…

「ヴェストルは、ヴェストルなんでしょ？」

窓からベッドに飛び込んで、あたし、そう尋ねてた。そしたら、小人の姿のヴェストルが、温かな目で諾ってくれたのよ。

「そうですよ、美星さん」

「じゃあ……」

そう、何だか…今になったら、もっとここに居て欲しい気がする。あんなに、大嫌いなところもあるんだけど…でも、でもね…

ヴェストル、そんなあたしに、そつと笑い掛けてくれたの。

「はい、また来ますよ。綺麗に晴れ上がった夜に」

「うん！」

だんだんと消えてくヴェストルを、あたし、少し寂しく見送った。

「きつとよー！」

しつかりと頷いてくれる。

本当に、もう一度逢えるかな。

…でも、きつと…そう、きつとまた逢いに来てくれる。

あたしには、それが分かってたのよ。

…それから三日してね、礼奈<sup>れいな</sup>がお見舞いに来てくれたの。部屋に入ってきたら、一瞬怪訝そうな顔であたしを見てきたんだけど…

ヴェストルの事なんて、分かるはずないもんね。

その玲奈の話でね…あのね、まあくんが…衰弱して、死んじゃったんだって……

あんなに無邪気な子どもが…明るくて、愉しげで…懸命に生きていたのに…ね……

結局、家族なんて知らずに逝ってしまったのよ…

…報告はね、もう一つ。夕子の小母さん、やっぱり誤診だったんだって。

ううん、本当はヴェストルが治したんだけどね。

早く、来てくれないかな…どうして、そんなに逢いたいのか、あたし自身にもよく分かんないんだけど。

…自由に出歩けるから…きつと、そんなのじゃないと思う。

ううん、苛々しちゃう。ヴェストル、早く来てよ！

朧に霞む 天穹の許

灰色の大地に育まれ

一つの大樹が 腕を伸ばす・・・

## 2 火曜の暗恨

皆、所詮は被害者じゃないのよ……

もう！ ヴェストル、今日は来ないのかな。こんなに素敵に晴れ上がったの、一週間ぶりなのよ？

ヴェストルね、あれから雲一つ無い夜が来る度に、きちんと迎えに来てくれるの。

でも、どうしたのかな。今日に限って、薄明が終わっても逢いに来てくれないのよ。とっくに大好きな金星も沈んじゃったし、今見えてるのは冬の星座達ばかり。

ほら、リゲルまで見えなくなっちゃったじゃない！

ヴェストルの事を知って、もう一月になるけど……こんな事、初めてだわ……そう思った瞬間ね、あたし、そんなヴェストルが何処から来てくれるのか、全く知らない自分に気付いて驚いてた。

そう……ヴェストル、あたしを勝手に連れ出して……星夜の町に出掛けてたの。だから……ヴェストルがこの散歩に飽きてしまったら……

……もう、来ないの……？

まさか、って……そう思うけど……でも、でもね？ 否定する事だつて出来無いじゃない！ あたし、ヴェストルの事、何も知らないし……小人なんだもん、連絡なんて出来ないでしょ？

ヴェストルにその気が無くなったら、星夜の町への散歩も終わる

……

それが……それが……

……今日かも知れないのよ……

らしくないけど、ね。やっぱり、ブルーになるの。その考え方や口調は時々大嫌いになるけど……でも、でもね？ ヴェストルとは逢

いたかったし、ずっと、一緒に出掛ける事をやめてほしくないのよ。ううん。…出掛けなくてもいい。一緒に居て、話をして欲しい…そう思うの。もうね、小人だって事にも不思議さなんて感じないし…逆に、居なくなる方が不自然なのよ。

「今日は、来ないみたいね…」

あたし、シリウスまで消えてくのを見て、溜め息吐いてた。星は大好きなんだけど…夜空を見たら、ヴェストルを想い出すもんね。だから、窓をそっと閉めようとして…

「遅くなって済みません、美星さん」

ひよいつて、丸い顔が覗いてる。

あたしね、さっきまでの気持ちなんて何処かに放り出して、思わずそんなヴェストルに怒ってた。

「もう！今日は来ないのかと思ったじゃない！」

「済みません。アウストルを手伝っていたものですから」

あたし、とつても怒ってるんだけど…でも、でもね？ 優しく微笑んでそう言われたら、何も言えないじゃない？ 本当に困ってるのも、分かるしね。

「…もう、いいわよ。本当は、来てくれて嬉しいんだもん」

小さな声であたしがそう言ったら、ヴェストル、きょとんとしてるの。

「僕が来るのは『当然』ですよ。最初に、僕がお誘いしたんですからね」

あたしの指先を取って、笑ってくれる。そうよね、ヴェストルにしてみれば『当然』なのよね……

…あたし、心の何処かで《本当》にほっとしてた……

「ねえ、ヴェストル？」

「はい、何でしょうか」

そんなに優しく微笑まれたら、あたし、質問なんて出来ないわ。

ヴェストルね、今は格好良い若者の姿になって、横を歩いているの。

あたし、まだどきどきするのよ。本当に、素敵なんだもん…

「美星さん？」

ぼおーって見惚れてたら、少し照れた顔でヴェストルが言ってきたの。

あたし、どうしようもないくらい慌てちゃって…

急いで、視線を逸らしてた。

「あ、あのね…ヴェストルって、いつも何処から来るの？」

「それは…今は、秘密にしておきます。いずれ、『その時』が来れば、美星さんにもお分かりになるでしょうから…」

真剣な声で応えてるの。少し厳しくて、冷たいくらいに抑揚の無い声…

時々ね、こんな顔のヴェストルが嫌いになるの。何だか、あたしなんかとは全く違うんだな、って…

小人なんだし、『他人』なんだから違って当然かも知れないんだけど…ね。

「おや？ あの子はどうしたんでしようか」

俯き加減で歩いてたら、急にヴェストルがそう言ったの。あたし、それ以上は何も考えないで、視線を前に向けてた。

青い薄闇に囲まれた一軒家の前で、一人の男の子が膝を抱えてる。青白い顔をしてて、ちよつと痩せてるんだけど…

あれ？ あの子、何処かで見た事が…

「あつ！ ルミの弟じゃない」

「お友達の弟さんですか？」

「そうよ。でも、もっと元気そうな子だったんだけど…」  
どうかしたのかな？

座ったままで動こうとしないその子に近付きかけたら、ヴェストルがそつと引き留めたの。

「ですが、美星さん。彼は既に死んでいますよ」

「え？」

「冗談じゃないわよ！ 夜遅くにこんな所で座ってるなんて、確か

に変かも知れないけど…でも、でもね？　ちゃんと、あたしには見えてるのよ？

「美星さん、ここは星夜の町なんです。その中では、死者も見えることがあるんですよ」

そんな…！　じゃ、じゃあ…あの子は…

…もう、…死んでる、の…

ヴェストルの目、とつても真剣なのよ。でも、でもね？　そんな事、簡単に信じられないじゃない？　あたし、幽霊なんて今迄見た事無いし…それに、ルミの弟が死んだなんて、そんな話…

「…あつ！」

あたし、嫌な出来事だったから…

忘れようとしてた事、全部思い出してた…

…礼奈がね、教えてくれたの。ルミの家に強盗が押し入って…犯人は見つかって、裁判に…

じゃ、じゃあ…やつぱり、あの子…

「どうかしたんですか？　こんな所にまだ居るなんて」

…ヴェストル…その子は…

ただ…ただ、お金が欲しかったから、って…見ず知らずのルミの家に入り込んだ男に…たまたま、留守番をしてただけなのに…

何度も…ナイフで刺されたのよ…

ヴェストルの静かな言葉に、八歳の男の子がむっとした表情で咳いている…

「あいつ、許せないんだ。だから、ここで帰ってくるのを待ってるんだよ」

「復讐ですか」

そんな、平気な顔で言わないで…！　きっと…きっと、あたしが考える以上の苦しみや痛みを感じて…それで、その子は復讐をしようとしてるんだから！

「そうだよ。でも、もう、お姉ちゃんが成功しそうだからね」

ずっと遠くの方を見て…え？　ルミが何をしてるの！



…まさか。ルミが復讐なんて…

ううん！ そんな事、有り得ない。だって…刑も確定して、犯人、  
刑務所の中なんだもん。復讐しようにも、出来ないじゃない。

それに…ルミは、そんな事を考える子じゃないわ！

「美星さん。ですが、今はそのお友達も『そんな事を考える子』に  
なっているのかも知れませんよ」

そんな…

でも…でも、ね…あんなに弟の事、可愛がってて…兄さんと一  
緒にこの町に残ることにして…

…ううん！ そんな事、無いよ…きつと…

あたし、あたしね…混乱してた。

…ううん、混乱してる振りをしてたの…

ヴェストル、そんなあたしをそつと見守ってくれてる…

「ヴェストル、あたし…ルミの所に行かなくちゃいけないの。

本当は、分かってるんだもん…」

そう…ヴェストルが言わなくても、ね。

「あたし、でも…止めさせたいのよ」

あたし、必死になって藍色の優しい瞳を見上げてた。静かな、温  
かな視線がにっこりと微笑んでくれる。

「分かりました。行きましょう」

「…ありがとう」

あたしの手を握って、ふわっと空に舞い上がってる。

…本当はね、きつとヴェストル、ルミの所になんて行くつもり無  
かったんだと思う。誰が誰に復讐をしようとして、僕には関係ありませ  
んからね…そう思ってるんだもん、きつと。それが、ヴェストルの  
嫌いな所なんだけど…

ヴェストル、あたしの為なら自分の考えなんて抑えるんだもん…

…だからね、《本当》に思ってるのよ。

ありがとう……って…

一週間振りに、綺麗に澄み渡った星空。大きな北斗七星からスピカまで、白く浮き上がった雲一つ無いのよ…円い月も中天に掛かってて、レグルスの後を追い掛けている。

あたしの気持ちも…こんなに爽やかだったらいいのにな…

「ここですか？」

…うん、あそこに見えるマンションよ。

静かに、音も無く降りてく。あたし、前に出て懐かしい扉の方にヴェストルを導いてた。

「ソバタソバタ、ソバカ」

「…？」

中から、押し殺した掠れ声が漏れ出てくるの。ルミ…なのかな。でも、あんなに低い声じゃなかったし、独り言するような子でも…でも、でもね、他には兄さんしか住んでないはずなのよ。

「どうやら、一万編の真言も終わるようですね」

「真言？」

真言って、あのお寺とかの？ でも、どうして…

扉の前で戸惑ってるあたしを、ヴェストル、静かに見てくるの。

「呪文ですよ、美星さん。相手を調伏、つまり呪い殺す為のものです」

「…！」

そんな…そんな…

…鋭い藍色の瞳は、真剣で…重くて…でも、でもね？ ルミ、そんな宗教みたいなの知らないはずだし…そんな…

呪い、なんて…

その時ね、急に中の声が途切れたの。

「入りますか？ 美星さん」

「…うん」

あたしが頷いたから、ヴェストル、鍵なんて気にもしないで簡単にノブを回してた。

「誰！」

扉が開いた途端、冷たく沈んだ声が聞こえてくる。あたし、思わず身震いして…

…？ 何、これ…香の薫りかな。でも…微かな臭いも混じってる

…

「誰なの！」

「ルミ…？」

あたし、立ち上がった人影に、そっと尋ねてた。でもね、その人影が答える前に、ヴェストル、勝手に入っていくのよ。

「威徳明王の法ですね」

仕方無いから、あたしも腕を組んで佇んでるヴェストルの傍まで行って、脇から顔を覗かせてた。

入ってすぐの部屋にね…壇がしつらえてあるの…その向こうに、気味の悪い仏像が見えてるのよ…！ 何かに跨って…幾つもの顔が、牙を剥き出しにして…

…その不気味な像の前にね…髪を乱して睨んでくる、かつてのルミじゃないルミが居るの…

やだ、もう、…やだ…

ルミの足下に、黒い人形が転がってるのが分かる。淡い蝋燭の光の中でね…何かの骨で作った杭が、肩や胸に突き立てられているのが見えてるのよ…！

とっつても気持ち悪くて…禍々しくて…

…胸の所まで、何かが込み上げてくる…

「誰なのよ！ あなたには関係無い…ん？」

…そこに居るの、美星？」

「ルミ…」

絶対に、駄目…おかしいよ、こんなの…

…でも、でも…何も、言えないの…

あたし…ルミが恐くて…震えてた…あんなに、…仲が良かったのに…

「フンッ！ 呪いを止めるつもりだったの？ どうして気付いたか

知らないけど、でも、もう遅いわ。今頃、あいつは血を吐いて死んでるはずだもの」

あんなに優しくかったルミが…平気で、人の死を嘲笑するなんて…  
「…そうですね。随分と粗暴な発音と抑揚にも関わらず、明王はあなたの願いを叶えてくれましたからね」

…え？ ヴェストル、じゃあ、もう…犯人、死んだって言うの？  
「そうなの。じゃあ、成功したのね」

にやっと笑うのよ…あたし、そんなルミに、微かな声で…必死になつて話そうとしてた。

「ルミ、どうして、こんな…」

そしたらね、ルミ…きつと目を攣り上げて叫んできたの。

「どうして？ 《当然》じゃない！ あいつ…あいつは、たった何万かのお金が欲しかつただけなのに…なのに、何の関係も無い私達の家に入り込んできたのよ？ 信也、可哀相に…ただ、留守番をしてただけで…ただ、それだけで殺されたんだから！ …体中、何度も何度もナイフを突き立てられて…死んでもまだ、抉るように顔を傷付けられて…あの子が、どんなに苦しんだか！」

分かるわよ！ あたしにだって、それぐらい、分かるわよ！

「美星さん…」

涙をぼろぼろ流してるあたしをね、ヴェストル、優しくそつと抱いてくれた…

「そんな奴、私が復讐しても当然じゃない！」

ルミ……

「…で、でも…犯人、捕まって……」

ヴェストルにしがみつきながら、しゃくりあげて押し出したあたしの言葉を…ルミ、鼻で笑ったの。

「法律が何をしてくれたって言うのよ！ せいぜい、何十年か刑務所に入るだけじゃない！ それだけでも、馬鹿な市民団体や弁護士なんかは文句を言ってるのよ？ 始めは死刑だったのに…世界の潮流に逆らってるって……」

…皆、所詮は被害者じゃないのよ！ 死刑がどうしていけないの？ 後退することが、どうしていけないのよ！ 進んでいく事が、全て正しいはずなんてないじゃない！ …更生するチャンスを与えろって？ 例えあいつが更生したってね、死んだ信也は生き返ったりしないんだから！」

…あたし、あたし……

何もね、言えなかった……

人を罰するんじゃないで、罪を罰するんだって……でも、でもね？ そんな事……ルミに言えないじゃない？ だって、ルミの言葉……

……《真実》なんだもん……

あたしだって……あたし……う、うつん……あれは《夢》よ……

「ねえ、美星。あんただって、そうよ。美星だって、被害者じゃないのよ。」

分かる？ お母さん達は先に引越したけど……お兄ちゃんが残るし、私達も学校の友達と離れたくなかったから……だから、だから……大好きな信也と一緒にここに残ったのに……全部、そうよ……全部消えたわ！

お兄ちゃん、ショックで少しおかしくなって……仕事、辞めさせられたのよ？ どうして……どうして？ 世の中って、どうしてあんな奴にばかり有利に出来るの？ そんな文明国なんて、犯人にしか好かれやしないわよ！」

「……」

「……だからね、美星。私、決めたの。」

あんな奴だけが、ありもしない『人権』で守られるんなら……私は、法律なんかであいつを殺したりしない。世間があいつを守るんなら、世間には知られてない『呪い』であいつに復讐してやる……そう決めたのよ。

きつと、信也だって復讐してもらいたがってるんだから」

あたし、強く目を瞑って……しがみついている指先に、力を込めてたの……

だって…だって、さっきあの子は…

「…ううん！ そんな事、思っでないわよ！」

…嘘だって、分かってる…抱いてくれてるヴェストルの視線が、あたしを貫いてるの…

冷たいよ、ヴェストル…

「だって、呪いなんかしたら…ルミが無事なはずないじゃない！

信也君だって、きっとルミに傷付いて欲しくないわよ！」

「そんな事、どうでもいいのよ。私なんてどうなったって、これ以上失うものなんて無いんだから！」

ルミがそう叫んだ時ね、ヴェストルが少し動いたの。

「いいえ、ありますよ」

静かに…全く感情なんて含まないで、ヴェストルが言ってる。

「あるわけないじゃない！ 私の一番大事な存在が、殺されたのよ？」

「では、どうして呪詛返しの手を用意しているんですか？」

「……！」

ヴェストル、あたしの体を励ますようにそっと叩いて離れてく…そしてね、ルミが隠そうとした、何か奇妙な文字の描かれてる符を取り上げて、冷たい声で話してたの。

「しかも、間違ってますね。何を見たのかは知りませんが、呪文や印も無かったんですか？ あなたは、随分と明王の『力』を軽んじてるんですね」

「いいじゃない！」

ルミが取り返しても、ヴェストル、まるで表情を変えないのよ…「知らない事とは言え、明王を自分の怒りだけで召喚したんですから。不十分な祈りの代償として、あなたはそれに見合うだけの犠牲を払う事になります。」

呪詛を行う者は、だからこそ真摯に行をおこなうんですよ。無知が引き起こした『力』ほど、恐ろしいものは無いんです」

「それがどうしたのよ！ 私なんて、もう死んでもいいんだから」

ヴェストルが、傍に戻ってきてくれたの。温かな腕で、泣いてるあたしを包み込んでくれる…

「あなたが自ら呼び起こした呪いで死ぬのは構いませんが、美星さんを傷付けるわけにはいきません」

……ヴェストル…

「今すぐ、美星と逃げればいいじゃない」

嘲笑うルミに、ヴェストルは重い言葉を紡いでた。

「だから、あなたは『力』を軽んじると言っただんです。先程の呪いで、刑務所の大半は潰されているんですよ？」

え？

「今ここに向かってる、あなたの『業』に因る力の波も、恐らくはこの辺り一帯を綺麗にしてくれるでしょう」

そんな…！

「それに、僕が美星さんを連れ出して力から逃れたとしても、結局は同じ事です。美星さんの心は、あなたの死に由って傷付けられますからね」

ルミね、変わり果てた姿で激しく舌打ちしてる…背中を向けて、何かを始めてるの。

「恐くありませんか？ 美星さん」

「…大丈夫」

にっこり微笑んできてくれるのよ…

あたし…

「美星さん、『時間』が来ましたね」

え…？

ヴェストル、あたしから離れて南の壁に歩み寄ってる。その背中が、ちよつと気になって…声をかけようとした瞬間…

あたしね、物凄い爆風に、玄関まで吹き飛ばされた。

「威徳明王、西天を支える存在を傷付けるつもりですか？」

深い声が聞こえてきて…そしたらね、不意に風が止んだの。あたし、急いで顔を上げてヴェストルを探してた。

ヴェストル、壁の前に立って…あれ？ 風が入ってきたのに、壁、少しも壊れてないじゃない…

「……………」

痛い…！

ヴェストルの前で、小さな炎が揺れてる。空中に浮かんで…でも、でもね？ その小ささからは想像出来ないくらい、強い『力』があたしとルミに迫ってくるのよ……

あたし、床に押しつけられて…必死になって、悲鳴を上げないよ  
うに頑張ってた…

「神々に等しい御方が、何故この第三紀に？」

炎の中から、力強い声が流れて…え？ ……神々、って……？

「あなたには関係無い事ですよ。それより、今回の法を変更しませんか」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！」

ルミ、床の上で腹這いになりながら叫んでる。でも、でもね…ヴェストル、構おうとしないの…

……………《当然》かも、ね…だって……………『神様』なんでしょ…？

……………どうしよう…あたし、あたし……………

体が震えてる…

「僕が、あなたを召喚した事にしましょう」

「そこまでされるのですか？」

落ちていた表情で、ヴェストル、頷いてる…炎はね、それを見てふつと消えちゃったの。一緒に圧迫感も無くなって…

……………でも、でもね…あたし、動けなかった……………

「もう、呪詛には手を出さないことですな」

ヴェストル、振り向いてルミを見下ろしてる。

「復讐の為に、あなたの未来まで失う必要は無いでしょう。そこには必ず、あなたが計る事など出来ない『何か』が秘められているんですから」

ルミ…何も言わないで…



「美星さん……行きましようか……」

あたし……

ヴェストル、黙ってあたしの指先を取って……ルミの家から飛び出してた……

「美星さん」

家のすぐ裏手にある公園で、ヴェストル……あたしをベンチに座らせてくれたの。

「……この天空の四方には、それぞれの方位を支える『力』ある存在が駆け巡っているんです。僕が司るのは西天<sup>マル</sup>で……」

「止めて！」

あたし……哭きながら、叫んでた……

……胸が苦しいから……何も、もう……言わないで……

……どうして……どうして、あたし、こんなにショックを受けてるの……

？ ……小人だったんだもん……『神様』だって……同じ、じゃない……

……ううん、小人だったら……まだ、近くに思えるじゃない……でも、

でもね……『神様』なんて……

……どうして……どうして、ヴェストルが『神様』なの……？ ……こんなにも苦しいのに……こんなにも悲しいのに……

……どうして……！

「美星さん……」

お願い……泣かせて……！ ……お願い……

……痛い……体中が、痛いよ……

ヴェストル……

「……落ち着かれましたか？」

……うん……

「済みません。……僕にも、美星さんのように優しく嘘が吐ければいいのですが」

それは、嫌……

あたし……あたし……ね……

……駄目、又……涙が溢れてくる……

もう……前みたいに話せないじゃない？　もう……気安く呼べないの

よ……

あたし……こんなに苦しい儘……

……辛いのよ！　悲しいの……よく分かんないけど……でも……

胸が痛い……寂しいのよ……

……ヴェストル……

「美星さん……」

何度も何度も、優しく呼んでくれる……

あたし、ね……？　ヴェストル……あたし……

でも……

「前に、美星さんは言っていましたね。僕は、僕なんだって……今でも、そうなんですよ」

優しい、声……

あたし……あたしね、その言葉に縋りたかった……

「《本当》に……」

「……はい」

「ヴェストル……！」

そつと、温かな腕で抱いてくれる……

……あたしも、力一杯、抱き着いてた……

「そうよね……ヴェストルは、ヴェストルなのよね……」

しゃくりあげて、あたし……

「はい。僕は、僕の儘ですよ」

「……ありがとう」

嬉しかった……《本当》に嬉しかった……

「じゃあ……今迄通り……？」

「はい」

「嬉しい……」

あたし、涙で濡れてたけど……でも、でもね。にっこりヴェストル

に笑えたのよ…

…そう。ヴェストルは何も変わってないの。だから、『神様』だ  
って何だって…あたしは…

きつと…ね…？

もう、夜明けなんだ。

「…あつ！」

今ね、東の空で流れ星が飛んだの。青白く澄んだ、綺麗な流星…  
水瓶座 流星群なんだ…地平線のね、ほんのすぐ上を流れてる。

「気に入ってもらえましたか？」

「え？」

まさか…

ヴェストル、あたしの顔を見て嬉しそうに頷いてる。

「来るのが遅れたのは、この準備をしていたんですよ」

そう言っつて、少し照れたように笑うヴェストルつて…なんて素敵  
なのかな。

…やだ。…ときどきが止まらないじゃない。

「ありがとう、とつても素敵よ」

ヴェストルも…ね！

「美星さんに喜んでもらえて、僕も嬉しいです」

あたし、微笑んでそんなヴェストルを見上げてた…

幾つも幾つも、流れ星が現れては消えてく。あたしね、それを見  
ながらそつと囁いてたの。

「ヴェストル…」

「はい」

「…あたしは人間だから、嘘も吐くけど…ね。でも、でもね？…  
ヴェストルには、嘘を吐いて欲しくないの。…いつも、今迄通りに  
…《真実》だけをあたしに話して…」

今でもね、あたし、《真実》だけを話す時のヴェストルなんて嫌  
いだけど…でも、でもね。ヴェストルは、無理に変わらない方がい

いと思うの。だって、『神様』なんだもん。あたしとは違って、それが《当然》なんだから…ね。

あたしが、この儘のヴェストルを知らなくちゃいけない…そう思うのよ。

「…分かりました」

差し出したあたしの手を取って、静かに空に舞い上がる。

二階の部屋に入る前にね、あたし、もう一度だけ、長く尾を引くヴェストルの贈り物に目を向けてた。

儂いんだけど…《本当》に綺麗なの…

「ありがとう、ヴェストル」

ベッドに横になって、あたし、そう言って笑い掛けてた。

もう…来ないなんて、不安になったりしないわ。

「お休みなさい、美星さん」

小人の姿になって、ヴェストルが窓の外で薄れてく。

きっと、又、来てくれる…あたし、信じてるんだもん。

「またね！」

心から笑って、あたし、そう言えたのよ…

## 2 火曜の暗恨 おわり

静寂漂う その樹幹には

『時間』にも褪せぬ《銀》が流れ

光に躍る その枝葉には

《真》を示す《黄金》が宿る…

### 3 金曜の恋風

人も神もね、《本質》は一つなの…

うっん、…痛い…痛いよ…

まるで、錐か何かで…頭を突き刺されてるみたい…

「くっ…！」

ちよつと、冗談じゃ…ないわ、よ！ 折角、昨日は…血や尿を採  
って…うわっ！ ……注射もして…

駄目…あたし、泣きそう…

…胸の下から、…嫌なものが込み上げてくる…誰か、誰か何とか  
してよ！

ヴェストル…こんな時に、来てくれたって…いいの、に…

あつ、少し…楽になったかな…

あたしね、慌てて上半身を起こして、天井に向かって大きく口を  
開けてた。

沢山の空気を吸い込んでみる。 ……ふう〜

……何とか、頑張れそうかな。

やだ、物凄い汗じゃない。あたし、窓際に畳んであった、一番お  
気に入りの淡い黄色のパジャマを手を取ったの。

大急ぎで、着替え始める。こんな土砂降りの日なんだもん。少し  
は明るい色が欲しいじゃない？

そう…今日も雨。ヴェストル、もう一週間以上も来てくれてない  
のよ。本当に、退屈…星だっけ見えないしね。

あたしね、別に雨は嫌いじゃないの。でも、でもね？ 一週間も  
降り続いたら、好きなものも嫌いになっちゃうわ。

雨が降る直前なんて、本当に好き。ほら、そんな時って、今迄風いでたのに、急に生暖かい風が吹き始めるじゃない？ 窓から見える木々の緑が、大きく、ゆっくりと揺れ動くのよ。ちよつと、どきどきするような動き方なだけどね。でも、でもね。そんな仕草で、風が教えてくれてるのよ。それを見てたら、あたしも『自然』の中に居るんだな、って…あたしが見てるだけじゃない、風や樹だってあたし達を見てくれてるんだな…って。とっても嬉しくなるのよ。……あゝあ。でも、そろそろ止んで欲しいな。こんなに激しく降ったら、あのコゲラだって苦しんでると思うわ。

そうなの！ あのね、これ、礼奈にも話してないんだけど…あたしの部屋から見えてる公園にね、コゲラが巣を作ったの。公園にはプラタナスやケヤキが沢山並んでるんだけど、小さなコゲラが選んだのはイチヨウの木だったわ。

あれ、二ヶ月くらい前になるのかな。丁度、あたしが初めてヴェストルと逢った頃だったと思う。朝、目が覚めた時にね、窓の外でキーツ、キツキツって変な鳥の啼き声が聞こえたのよ。そんな声、今迄に聞いた事も無かったから、あたし、不思議に思っただけで目を向けてた。そしたらね、何かの小さな影がイチヨウの梢にとまったの。

スズメくらいの大きさかな。尾が短くて、黒褐色の翼には白い横斑が見えてる。そのとつても可愛い小さい体でね、イチヨウの幹に平行にとまってコツコツって健気に穴を開けようとしてるんだもん。すつかり、あたしのお気に入りになっちゃった。

それから二、三日するとね、南向きの所にちっちゃな穴が出来たの。巣を作ってたのよ！ あたし、もう嬉しくって…

まだ完成はしてないみたいで、時々穴の中からコゲラが出てきては、何処かに飛んでくの。その飛び方がちよつと不器用で…そこがまた可愛いだよ。キーツって啼きながら、グイッグイッって下に凸な短い波形を描くんだけど…何だかね、鳥なのに飛び慣れてない

んだな、って感じがする。ヒヨドリみたいな飛び方なんだけど、まだまだスムーズさは及ばないかな。だって、今にもポテツと落ちちゃいそうなんだもん。

本当に可愛い。大好き！

巣穴からひよいつて顔だけ出して、きよときよと瞳を動かしてる時とか…素敵な所がね、一杯ある。目の下の黒い筋にだって、愛嬌があるのよ。

でも…今は、葉が繁り過ぎてて、全然巢も見えてないの。でも、でもね？ コゲラにしてみれば、きつとその方がいいんだもんね。

……コゲラが巣穴から顔を覗かせて…その下の公園で、ちつちやな子供達が沢山遊んでてね。空は雲一つ無い、素晴らしい夕焼け空で…金星が、瞬きもしないであたしを見つめてくれるの…そして、隣には礼奈が居てくれたら……

あたし、もう、こんな幸せな事は無いわ！

あっ……！

…もう一つ……すぐ傍に、ヴェストルが居てくれたら…ね。

そう、…あたし、きつと……ヴェストルの事が……

「うっ……？」

駄目…又、頭が……痛い！ 痛いよ…くうっ…

……？ ……誰か、ドア、を…

「入ってもいい…？ ……ミホ！」

…礼、奈……

力一杯、頭を押さえて身悶えてるあたしの額に…柔らかな指先がそつと触れるの。

…いつも、そう。礼奈がそうやって触れただけで、あたし、気分が良くなってくる…頭の痛みや吐き気なんて、あっさり消えてしまふのよ。

「大丈夫…？」

うん、…まだ、焦点がぼんやりしてるけどね…

すぐ目の前で、明るい栗色の髪の毛が揺れてる。心配そうに覗き

込んでくれる、少し青の入った黒い瞳……

「……ありがとう、礼奈」

あたし、ほっと溜め息を吐いて……礼奈を見上げて笑おうとしたのでも、でもね……やっぱり、ちよつと陰が入っちゃったみたい。

「ミホ……前よりも、随分酷くなってない？」

静かだけど優しい声が、《本当》にあたしの事を心配してくれる。「そうかも知れないけど……でも、でもね、大丈夫よ。昨日も、病院に行っただし」

あたしがそう言ってもう一度笑ったら、今度は礼奈も微笑み返してくれた。

「ねえ、ミホ……自分で気付いてる？」

「え？」

急に、尋ねてくるんだもん。あたし、礼奈が何を言ってるのか分かんなくて、きよとんとした。そんなあたしの顔を見て、礼奈、くすくす笑いながら言ってきたのよ。

「前、来た時に比べてね……ミホ、とっても落ち着いてきてるの。綺麗になったと思うし……」

「まさか！」

あたしが冗談だと思って笑ったら、礼奈、珍しく悪戯っぽく続けたの。

「きつと……時々この部屋に来る、あの人のせいでしょう？」

「えええ〜！」

やだ、どうしよう……あたし、自分が胸元まで赤くしてるのが分かるんだもん……どうしよう……あ〜ん、どきどきが止まらないよお。

……でも、でもね……あの人は……

そう……無理、なんだもん……ね……

「やっぱり、そうなのね……」

礼奈ったら、いつもの椅子に腰掛けて喜んでる。

「ど、どうして……」

え〜ん、あたし、まだ混乱してるう。



「二ヶ月前、部屋に入ったら何か違う雰囲気があったの。それから暫くして、どんどんミホが変わっていくから…勿論、良い方向にね」  
そうなんだ…ちょっと、嬉しいかな。

「…話してくれる？」

「う、うん…」

どもらないで！ 礼奈だもん、大丈夫よ…

「あたしね、その人が…きつと…《本当》にきつと、その…

…ヴェストルの事が…『好き』なんだと思う…」

そう、きつと…そうなの…

礼奈ね、自分の事みたい喜んでくれてる…

…でも…

「でも、ね…礼奈。その人…『神様』なの…」

あれから、沢山の事を教えてもらってる。

本当は、ヴェストル、神様に等しい『力』を持つてるだけで、『

神様そのもの』じゃないんだって。神様が誕生する時に、一緒に生まれたらしいんだけど…でも、でもね。全然タイプが違うそうなの。

一体、どれくらい前の事なのかな…

「そうなのね…」

え…？ そうなのね、つて…礼奈、ちゃんと聞いている？

そんなあたしの顔を見てね、礼奈、くすくす笑ってた。

「ミホ…神も人間も、《本当》は同じものなの…違うのは、その全体としての様相に於ける…位階だけ…」

「え？」

あたしが…ヴェストルと『同じ』…？

…じゃあ…

あたし…ちょっと期待してる…若しかしたら…？

「そう…別に、ミホがヴェストルさんを『好き』になっても構わな  
いの…それが《真》のものなら、ね」

礼奈…

あたしね、一気に話し出してた。

「礼奈、あたし…あのね、あたし、本当は諦めてたの。…初めてその事を知った時…ヴェストルが神様だって知った時…」とつてもシヨックで…

でも、でもね…後になって、あたし、考えてたの。…その人が、その人の儘でいてくれるんなら…神様だって何だって…あたしは、その人の事を『好き』な儘でいてもいいかな、つて。…ヴェストルがあたしの事、何とも思っただけでも…叶える事が不可能だって分かってても…

…あたしは想い続けるんだ、つて…」

「ミホ…」

真つ赤になつてるあたしにね、礼奈、とつても優しい目をしてくれる。

「不可能な事なんてないわ…きつと」

「ありがとう」

礼奈つて、だから好きなの。変な事を言つても、何も驚いたりしない…どんな事でも、信じてくれる。

あたしの事、本気で心配してくれるんだもん。

《本当》に、素敵な友達なのよ！

「ミホ…ヴェストルさんつて、どんな人なの…？」

「あのね…」

あたし、教えてもらった事、全部礼奈に話してた。こんな事、信じてもらえるなんて思っただけ…やっぱり、礼奈だもんね。蒼く見える天蓋はね、大きく四つの『方位』に分けられてるんだつて。その区切られた一つ一つの範囲を、『力』ある存在がそれぞれ司つて、宙を自由に駆け巡つてるそうなの。

「僕は、美星さんから見れば、西の空を支えているんですよ」

ヴェストル、そう言つてた。でも、この『方位』つて、あたし達の意味してる事とは違つてみたい。よく分かんなかったんだけど…

他にもね、東天グニルならアウストルがいるし、北にはノルドル、南に

はスードルって言う名前の人がいるそうなの。

この人達もね、皆、ヴェストルみたいに小人なんだって。でも、でもね？ ヴェストルが《本当》に小人かどうかなんて、分かんないじゃない？ あれは、きつとヴェストルの…何だろ…『体』、かな。その一つでしかないのよ。

「…ミホ。ヴェストルさんは『一人』なの…ただ、ミホの目に映る時の『様相』が違うだけなのよ…」

「うん…分かってる。ヴェストルは、ヴェストルなのよ」

礼奈、温かな微笑みで頷いてくれる…

ヴェストルの話だとね、夜空に煌いてる星達って、神様が『言葉』を発して創り上げたんだって。でも、でもね、その時に勝手に彷徨うようになっちゃった星達も沢山あるそうなの。ヴェストル、時々それらを手にして投げたりするって言うってたわ。それが、流星としてあたし達には見えるんだ、って。

「でも…わたし達が見る星は、『星』の《全て》ではないわ」

うん、ヴェストルもそんな事を言ってた。でも、でもね、あたしには難しかったのよ。

日食や月食もね、ヴェストル達が起こすみたい。星の代わりにね、今度は暗闇を投げるそうよ。その暗闇、とつても大きいから、流星みたいにすぐ流れたりしないで、ゆっくりと光を消していくの。

遊星なんて、ヴェストル、クリケットみたいにして打つんだ、って言うってた。別の小人に打たれたら、又打ち返して…あたし、もつと不思議なものだと思ってたのに！

でも、でもね？ きつと、あたしには分かんないような、深いものがあると思うの。宇宙って、一つじゃないし…ヴェストル、その全部を支えてるんだと思う。

「それに…『時間』や、他の幾つもの『軸』を超越して存在しているのよ」

うん…あまり、考えたくないんだけどね。だって…ヴェストルはヴェストルなんだ、って…そう思えなくなりそうで、恐いんだもん。

「ミホ…大丈夫。神も人間も、その《本質》は同じだもの…」  
…ありがとう、礼奈。

「この世界が、第三期第三紀に当たる事は聞いている…?」  
ヴェストル、そんな事も言ってたかな。

「第三期の存在は…ううん、極論すれば、他の『期』の存在もそう  
なんだけど…それらは全て《唯一の本質》<sup>ヘルジュトリア</sup>から生じたの。それは同  
時に、わたし達は皆、そのヘルジュトリアと《本質》に於いて等し  
い事になるのよ…」

「…難しいのね」

あたし、正直にそう言ったの。でも、でもね。礼奈は笑ったりし  
ないわ。

「そうね…でも、知らないといけないと思うの。ミホ…わたしは、  
ヘルジュトリアのとても僅かな部分を写している『鏡』なの…ミホ  
も、《唯一の本質》の一部を顕現しているのよ。神も、そう…ただ、  
その『様相』が異なっているだけなの…」

こんな風に言ってもいいのか分からないけど…ヴェストルさんは  
ね、わたし達よりもヘルジュトリアの多くを示現しているの…だか  
ら、『神』と呼ばれるんだと思うわ。それはね、多分…上下関係で  
はなくて…ただの位階の違い…その階層が違っただけなのよ…

だからね…人間を好きになるように、神を『好き』になっても構  
わないの…それが《真》のものなら、きっとヴェストルさんは応え  
てくれるわ」

「…ありがとう」

あたし、思わず礼奈に抱き着いてた。でも、でもね…礼奈。あた  
し、多分…まだヴェストルには何も言わないと思うの。今は、まだ  
…ね。

「あたし、ね。…まだ…気持ちを持って余してる…」

「ミホ…」

「礼奈、不思議だと思わない? あたしね…時々、ヴェストルの事  
が大嫌いになるの。人間は《真実》だけじゃ生きていけないのに…」

《嘘》を望む事もあるのに…ヴェストル、そんな事、ちつとも考えないんだもん。

でも、でもね…そんな時は嫌いになるのに……やっぱり『好き』なのよ。…どうしても、『好き』になっちゃうの。

…ときどきしてくるのよ。

そんな時、思うの。やっぱり、あたしとヴェストルって違うんだ、って…

…でも、そんな違う人でもね…あたしは『好き』なのよ。だから…今の儘のヴェストルを理解するようにしよう……って。きつと…あたしがどれだけ努力しても、ヴェストルは『他人』の儘だと思っけど…」

だって…神様なんだもん、ね…

「でも…でもね？ それでもいいのよ。『他人』のヴェストルを想い続けるからこそ…だからこそ、あたし、きつと……どんどん、ヴェストルを『好き』になっけていけるんだもん…」

「…そうね」

礼奈、呟いてるあたしを、しっかりと抱き返してくれる。

「…あたし、まだ《本当》には、この気持ちか《真》かどうかなんて分かってないのかも知れない。でも…でもね。これだけは言えるわ。

あたし…同じ『好き』なんかじゃなくて…ヴェストルの事、どんな新しく『好き』になってるのよ……」

「素敵な想いね…羨ましいわ」

につこりと優しく微笑んでくれる礼奈にね、あたしも真っ赤になっけて笑い掛けてた。

でも、話せて良かったと思うの。あたし一人だったら……きつと、心の整理なんて出来ないもんね。

「礼奈…本当に、ありがとう。」

…でも、礼奈にも『好き』な人はいるんでしょ？」

あたしがまだ中学校に通ってた頃から、何か、そんな雰囲気があったもんね。

「わたしは……」

礼奈、恥ずかしそうに頬を上気させてる。…あたしから見ても、そんな礼奈ってとっても綺麗なのよ。

「わたしが『好き』なのは……人間かどうかも分からないの……」

「え？」

「…ミホ。わたしね、小さい頃から…寂しい事や悲しい事があった時に……一つの『森』に行く事が…帰る事があるのよ……」

森……？

「ええ…蹲って泣きそうになった時、いつも、急に突風がわたしを包み込んでくれて…気が付いたら、いつもその『郷夢の森』の中に座って居たわ……」

そこには、灰色に霞んだ大木が立ち並んでいて…初めて迷い込んだ時にはね、何だか嬉しくて…楽しそうに、はしゃいで駆け回っていたの。……三歳くらいだったと思うわ」

あたし、思わず想像しちゃった。きつとね、今の礼奈からは考えられないくらいこころしてて、とっても大きな目を輝かせながらとことこ走り回ってたのよ。

「だけど…突然、今、自分が何処に居るんだろう、って…そう思ったら、急に周りの木々が恐くなってきたの。何も変わっていないのに……わたし、しゃがみこんで泣き出してしまっ……」

迷子になっちゃった…そう思って、わたしが泣いていると…ね……」

礼奈、少し深呼吸してから、ゆっくりと吐き出したの。

「…すぐ目の前に、…一本の『樹』が現れてくれたの……」

現れてくれた、って……？

「そう…灰色の森の中でね、…その『樹』だけが鮮やかな緑葉を繁らせていたの…わたし、泣く事なんて忘れて、…じつとその『樹』を見つめていたわ……」

恥じらいながらね、礼奈、俯けた視線を泳がせてる。

「森の中でも一番大きくて、梢なんて見えていないのに…温かくて…威圧感なんて、全く無かったの…」

…何か、わたし、この『樹』を知ってる…嬉しくて…わたし、その大きな幹に抱き着いて笑い出していたのよ…」

その光景、見える気がするの。小さな礼奈が、青の入った円らな瞳でじつと緑の『樹』を見上げてて…きつとね、丸い人差し指の先を下唇に当てて、ちよこつと首を傾げてたのよ。

不思議そうに…瞬きもしないで暫く見つめた後でね。急に可愛くにつこり笑って、太い幹に抱き着いてたんだわ。

「その『樹』も…ね。わたしをそつと…でも、しっかりと…抱き返してくれた気がして…わたし、それまでの事なんて忘れて…安心してその根元ではしゃいでいたの。」

ずつと…いつでも優しく見守ってくれるのよ…そして、声にはならないんだけど、いつも『言葉』で色々な事を教えてくれたわ…宇宙の事、神々の事。不思議な『言葉』や、…そして《歴史》の事を…」

礼奈、とつても綺麗な笑顔を向けてくる。とつても素敵な微笑み…  
「その『樹』は…ね。ミホ…わたし自身…なの…わたしの《源》…でも、わたしだけではなくて…もう一つ、…別の存在もいるのよ…」

うつん。…本当は、その別の存在の方が多くを占めているの。その存在が、わたしをいつも見守ってくれていて…寂しくなった時には、呼んでくれるの…優しく抱いて、励ましてくれるのよ…

ミホ…わたしね、その『樹』の傍に居ると、とても安心するの。その『樹』の御蔭で辛い事も受け入れる事が出来たら…いつも、その根元でぐっすりと眠ってしまうの…夢も見ないで…丸くなって…

…暫くして、木漏れ日が静かに起こしてくれたら…わたしね、…いつも、もう一度『樹』を抱き締めるの。わたしには、他に想いを伝える事なんて出来ないから…

そして、歩き出すのよ。森の中を…見えないけれど、出口に向か  
って……

ミホ…わたし、その『樹』の……もう一つの存在を、きつと……  
『好き』なの……」

「礼奈……」

「わたしには、分かるの。…今迄の、わたしとその存在の《歴史》  
が…過去も未来も全て……一つになって、その『樹』へと繋がって  
いるんだ、って……」

『もう一つのわたし』が、何なのか分からないし…今、この《時  
間》で出逢えるのかどうか分からないけれど……

でも……」

「『好き』なのね……」

静かに…真剣に頷いてる。そんな礼奈って、とつても大きく思え  
る。凄いな、って思うのよ。

…あたしなんて、例え神様でも…逢いに来ってくれるんだもんね。  
まだ、礼奈よりは幸せなのかな……

「でも、でもね…？ 礼奈……若し、その『何か』と出逢えなかつ  
たら……」

礼奈…耐えられる、の？

「それでも…わたしは『好き』でいるわ…きつと……」

あの山の石のように…ね……」

礼奈が窓の外を見てる。

あたしも、その伝説なら知ってたの。

昔ね、一人の女の人が、何処か遠くに旅立ってしまふ愛する人を、  
ここから少し離れた所にある山の上で見送ったの…そして……ずつ  
と、ずっと待ち続けて…

そのまま、石になってしまったのよ…

綺麗な人の姿をした石を、深い緑色をした苔が覆い尽くしていて  
…その表面で煌く露は、石になった女の人の涙……永遠に涸れる事  
の無い、泪なんだ、って……



あたしにも…礼奈みたいにしつかりと言えるかな。…ヴェストルを待つて、…永遠に待ち続けるなんて…

…でも、でもね…きつと、やっぱり…あたし、待つてるかも知れない。神様でも何でも…ヴェストルはヴェストルなのよ。あたし、やっぱり好きなんだもん。ずっと『好き』な儘で…きつと、応えが返つてくるのを待つてるわ。

その前に…告白しなくちゃいけないんだけどね。それは、まだ……  
…らしくないけどね。…まだ、したくないのよ。『何か』が恐いのかな…自分でも、よく分かんない。

「…ミホ、焦る必要なんて無いわ…きつと『時間』が教えてくれるもの…」

《時》が…

でも、でもね？ あたし…やっぱり、自分の意思で告白したいのよ。

そう言ったら、礼奈、楽しそうにくすくす笑い出してる。うん、あたしの言葉、混乱してるみたい。

…でも、…仕方無いじゃない？

「…少し、雨も弱まったみたいだから…」

礼奈がね、そう言っ立ち上がるうとしてる。あたし、自分でも分からない間に、もう一度礼奈に抱き着いてた。

「礼奈、ありがとう…全部、話せて良かったわ…」

「わたしも嬉しかったわ、ミホ…また、頭が痛むようなら電話をして…何があつても、すぐに来るから…」

「大丈夫よ！ もう、すっかり忘れてるんだから」

あたしの返事に、礼奈、少し安心して笑ってくれる。礼奈が来る前までの苦しみなんで何処かに捨てて、あたしも心の底から笑い出してた。

だから、礼奈って大好き！

うっん、でも、今日はヴェストルは来ないわね。小雨にはなったけど、まだあんなに雲が厚いんだもん。

あたし、ベッドの脇から空を見上げて…ずっと、ヴェストルの事ばかり考えてた。

…何だか、胸の奥が熱くて…微かに、体が震えてる……

泣きそうなくらい、嬉しいの…あたし、《本当》にヴェストルの事が『好き』なんだ、って……

…体中に、『何か』が染み渡っていくのよ……

ヴェストル…いつか、きっと…そう、きっと言えるからね！

### 3 金曜の恋風 おわり

曾て 二つにありしもの

今は 共に唇齒と為る…

#### 4 計都の感溺

何故、人は自らの上に「神」を創り上げるのでしょうか……

あっ……

……うくん、まだ四時過ぎじゃない。どうして、こんなに早くから起きなくちゃいけないのよ！

……  
やっぱり、そうなの……あたしね、一度目を覚ましたら眠れなくなるのよ。気分は悪くないんだけど……

……本当はね、こんな落ち着いた気分の日にもっとよく寝ておいた方がいいの……分かってる。でも、でもね？ こればかりは仕方無いじゃない？

それにしても……こんな時間って、何も音がしないのね。透明で、安らかな感じがする……とつても素敵な雰囲気。

あたし、もう眠る事なんて止めて、上半身を起こしてた。

窓から外を見てみるとね、まだ空には霞が掛かって……少し青の入った灰色をしてるの。でも、でもね、今日は一日、綺麗に晴れそうだわ。

ヴェストル、早く来てくれないかな……

……無理だつて分かってる……でも、でもね？ ……そう想ってもいいのよね？

……キヨツキヨ、キヨ、キヨキヨキヨ……

あれ？ あの啼き声、ホトトギスじゃない。……そうね「特許許可局」って聞こえなくもないわね。

あたしがね、そのホトトギスの歌声に耳を澄ましてたら……今度は、急にスズメの小さな囀りが一斉に沸き起こってきたのよ。ほら、冬

なんて、早朝の川面から霧がどんどん立ち昇ってくるでしょ？ 感覚的には、丁度あんな具合かな。それから、ザァーッ、って…漣みたいに啼き声が押し寄せてくるのよ。何だか、あたし、嬉しくって…とつてもわくわくしちゃう。

そんな事を考えてたら、すぐにその「波」が引いてしまつて…今度はね、虫達が小鳥に負けなくらい、大きな声で歌い始めたのよ。その精一杯な感じが可愛くって…

「あつ…」

いつのまにか、公園の木々が一斉に黄金色に染まつてる…

…… 本当に綺麗。…全部、金紅色に塗り潰されてく…こんなに、周りの家や景色って素敵だったんだ…

ジィーッって続いている虫達のコーラスを背にして、あたし、ずっと辺りの風景を見つめてた。…もう…絶対に歩いては見られない風景…

…… やっぱり、覚えていたいもんね。

時々、ホトトギスが虫達に混じって歌ってる。ううん、…他にもヒヨドリやウグイスまでもが声を張り上げて啼いているの…

本当に素敵な朝…身体中の苦しみなんで、すっかり忘れてる。

…《本当》に、ありがとう…

あれ？ 雨なんて降ってなかったのに、虹が架かっているじゃない。夕方、もう少しでヴェストルが来てくれる時間になるかな、つてくらいに、あたし、空を見上げて小首を傾げてた。だって、西向きに広がってるこの窓からは、全然雨雲なんて見えてないんだもん。なのに、虹なんて…何処か、遠くの方で夕立でもあつたのかな？

まだ明るい夕空の中、虹の隣りで金星が精一杯輝いてくれる。あたしの一番大好きな金色の星…

あたしね、いつも思うんだけど…あれだけ明るく煌いてくれるのに…一体、どれだけの人か、あの星を見付けてるんだらう？ やっぱり気付いてないのかな…空を見上げる事って、皆、殆どしな

いもんね。

でも、でもね？ 気付かないなんて、勿体無い気がするのよ。折角、あんなに綺麗に輝いてくれてるのに…無視するなんて、失礼だわ。

「美星さんらしいですね」

え？

急に声がるんだもん、あたし、慌てちゃって…

そんなあたしを見てね、小人のヴェストル、きよとんとしてる。

「ど、どうして…早かったのね」

「いけなかったでしょうか」

ううん！ 絶対、そんな事無いんだから。

「ちよつと、びっくりしたから…来てくれて嬉しいわ」

「僕も、美星さんに喜んでもらえて嬉しいですよ」

あたしの指先を取って、ヴェストル、恥ずかしそうにそう言ってくれる。姿は小人でも…やっぱり、ヴェストルなんだもんね。どうしても、どきどきしちゃう…

「…ありがとう」

「では、行きましょうか」

につこり微笑んで、青白く天が覆う世界へと連れ出してくれる。

いつも不思議なの。星夜の町にこうして出掛ける時や、ヴェストルの事を考えてる時って…あたしね、最近酷くなってきた「嫌な気分」を何処かに置いてきてしまうのよ。

「美星さん、そんなに苦しいんですか」

急に、心配そうにヴェストル、振り返ってくれる。いつもの格好良い若者になって…

やだ…どきどきが止まらないよ……

「だ、大丈夫よ…ヴェストルが来てくれるんだもん。すぐ、忘れてしまっわ」

「有難う御座います」

でも…まだ《本当》に心配してくれてる。その顔を見てたらね、

どんなに苦しくても頑張ろうって思うのよ。

いつも、《本当》にありがとう、ヴェストル……

…あたし、負けないんだから！

東の空に、ベガが昇り始めてる。北斗七星も、そろそろ主役を譲らなくちゃね。

一度、この素敵な星空を礼奈にも見せてあげたいな。いつも、あたしの事を気にして、心配してくれてるのに…あたし、何もしてあげられないんだもん……

ちよつと、自分の力の無さが情けなくなる…

「そんな事はありません。きつと、そのお友達も美星さんに助けられているはずですから」

ヴェストル…

「少し、降りてみましょうか」

あたし、何も言えずに頷いてた。何かを口にしたら…泣きそうだったんだもん。…それくらい、ヴェストルの言葉、嬉しかった……

とつても掴み所の無い、ぼんやりとした薄闇が流れてる。そう言えば……

…近頃ね、この辺りで嫌な事件が起こってるの。…幼稚園や小学生の子供達が、次々といなくなつて…死体で、ね……何人か見付かったのよ……

惨たらしい死屍には…ね。…獣で喰いちぎられたような痕が残つてたそうなの……

どうして…そんな事件、起こってしまうのかな…

この近くには、野犬もいないから…獣に見せかけた変質者の仕業じゃないか、つて…でも、でもね？ あたし…そんな意見を平気で述べる人も気味が悪くて……

……そんな…ね。酷くて悔しい事が、この下で起こってるかも知れないの…星夜の町では見えない「何か」がするんだらうけど……

何だか、この静かな暗闇が穢されてるみたい…

…あれ？ あそこを走ってるの、未夏じゃない。あんなに大人しい子が、何を急いでるのかな。

「お友達ですか？」

「うくん、友達って言う程じゃないけど…去年、同じクラスだったのよ」

そう、あんまり話すのが得意じゃない子だったもんね。

「未夏！」

地面に下りてあたしが声を掛けたら、未夏、びくつと体を震わせて振り返ってる。…？ ちょっと、変…前より、感情が見えない気がする…

「美星さん…」

あたしだって分かったら、ほっとしてる。でも…でもね。未夏、ヴェストルを見たら急に警戒するような目付きになったの。あんな目付き、前はしなかったのに…

「…そんなに急いで何処に行くの？」

見たら、未夏、大事そうに白い器を胸に抱いている。

「あつ、霊水が濁ったから…」

「霊水？」

真面目に答えてくるんだもん。あたし、何の事が分かんなくて、思わず聞き返してた。別に、何かの宗教に入ったって話も聞いてないんだけど…

「そう、霊水が白くなっちゃったの。美星さんも、気を付けた方がいいわ」

「気を付けるって…何を？」

あたし、ちょっと不安になってヴェストルを見上げたら…

…腕を組んだヴェストルが、冷たく鋭い瞳で未夏を見下ろしてた

…

「さつき、裏鬼門の方角に虹が立ったでしょう？」

「裏…鬼門？」

確か、鬼門って北東だったから…裏鬼門って、南西よね。でも…虹が出たから、どうしたの？

「知らないの？ 虹が大事な方角に立つと、災いが起こるの。その直前にもね、私、サギに似ている知らない大きな鳥が、鬼門の方角にある木に集まっているのを見つけたの。その瞬間、晴れていたのに雷鳴まで聞こえてきたのよ…」

恐そうに、未夏、震えてるんだけど…あたし、どうしてそんなに怖がってるのか分かんなかった。虹なんて、何処にでも架かるんじゃない？ それに、あたし、雷鳴なんて聞いてないのよ。

「分からない？ これ全部、災異なの。不吉な事が起こる、前兆なのよ」

「そう…なの？」

「うん。本に書いてあった事ばかりだもの。昨日は、家の前で死んだ蛇を見付けたし…そのすぐ後にね、変な風が起こって小さな虫の大群に囲まれてしまったの。家の傍にある倉庫で聞こえた、奇妙な鳴動だって、そう。」

世の中が乱れて、天の神々に背くような生活を皆がおくっているから、こんな前兆ばかりが続いているのよ。

神々の警告なのよ」

あたし…きつと、とっても変な顔してたと思う。それに『神々』って…

当惑したまま、ちらつと盗み見たら…ヴェストル、視線に気付いて優しく微笑んでくれたの…

「今に、必ず酷い災厄が起こるわ」

一生懸命、心配してるのは分かるんだけど…でも、でもね？ そんな危険な事が起ころうとしてるのに、ヴェストルが教えてくれないなんて…そんな事、絶対に無いもん。平気な顔で微笑んでくるなんて、そんな事、有り得ない。

「皆、神々に罰せられるのよ」

「でも…どんな事が起こるの？」



どんな宗教を信じてるのはか分からないけど…いきなり反対する事も出来ないじゃない？ 未夏は、それが《真実》だって思ってるんだし…

…きつと、ヴェストルならね、こんな尋ね方しないと思う。でも、でもね？ あたしは、あたしなんだもん…

…ね。

「あのね…」

少し声を抑えて、未夏、あたしに教えてくれた。

「それを、今、天の神に尋ねているの。なかなか教えてくれないけれど…でも、簡単な質問には、きちんと答えてくれたわ」

「え？」

まさか…神様と話が出るの？

「そうよ。契印で、依代に神を召喚したんだもの」

…何、それ…

「まず、五つの印を結んで護身法を行うの。これで、私自身を清めて邪気から身を守らなくてはいけないのよ。」

それから、今度は神を喚ぶ為の場を清めるの。つまり、二つの印で聖域を創り出すのよ。そして、その聖域を道場として整える為に、莊嚴道場法を行って…そうしてから、漸く私が召喚したかった明王を勧請法で依代に招いたの。

その後も、道場の結界を強める為に法を行って供養したりするんだけど…全てが私にもきちんとして出来たみたいで、問い掛けたら答えが返ってきたのよ」

…うん、…ねえ、あたし、何の事が全く分からないんだけど…「それでね、色々な事を教えてもらったの。若しかすると、私一人でも災いを防げるかも知れないそうだし…頑張って祈禱していると…ころなのよ」

「じゃあ、霊水って…？」

嬉しそうに話してくれるんだけど…あたしね、正直言って、それ以上聞きたくなかったから…最初の質問に戻してた。

「今迄使っていた霊泉が、災異の前兆で黒く汚れてしまったの。だから、神の御言葉に従って、新しい泉に霊水を取りに行くのよ」

「とっても真剣に、これは重大なんだって顔して言うんだもん。思わず、釣られて頷いちゃった。」

「あたし、本当は宗教なんて信じないんだけどね。…なのに、すぐに隣に神様と同じくらい凄い人がいるなんて…ちよつと、複雑だわ。」

「でも、でもね…いつも傍に居て欲しいの。『神様』としてでなく、『ヴェストル』として…ただの、『個』として…いつだって居て欲しいのよ。」

「ねえ、美星さん…」

「もつと何かを言いたそうだったけど…その時ね、急に未夏、体を激しく震わせたの。」

「神が催促しているんだわ…じゃあ、美星さん。本当に、気を付けてね」

「う、うん…ありがとう」

「急いで駆けてく未夏を見送って…あたし、どうしたらいいのか分かんなかった。反対しても、きつと信じてくれないと思う。…でも、でもね…やっぱり、何かを口にして言うべきだったのかな…」

「ねえ、ヴェストル。あんな事があるの？ 本当に、神様と会話なんて出来るの？」

「あたし、困惑した顔でヴェストルに尋ねてた。…ヴェストルね、今迄ずっと…冷めた目をした儘、一言も口にしてなかったのよ…」

「出来ますよ、美星さん」

「やっと、その藍色の瞳に優しさが戻ってくれる。でも…何処か重い…」

「やだ…何か…あるの…？ あたしには分かるんだから…ヴェストル…」

「真摯な祈りや、特別な『言葉』を知る存在に対しては、神々が依代を媒体にして語る事もあります」

「そうなんだ…」

「ですが…あのお友達は違いますよ」

「え？」

とつても静かな口調なのよ…あたし、不安で一杯になりながら、ヴェストルを見つめてた。

「本来、明王に神々程の『格』はありません。明王が自ら『神』を名乗り、警告の意味を解する事など、有り得ないんですよ」

「じゃあ…じゃあ、未夏と対話したのは誰なの？」

…嫌な予感がする…胸が苦しいよ…

「それは…」

ヴェストル、言い難そうに視線を逸らしてる。いつも、あたしに對してはとつても気を配ってくれるから…でも、でもね。あたし、やっぱり知りたかったのよ。

ヴェストルだって、あたしの気持ちは分かってくれる。時々、黄金色にも煌く深い双眸が、じつとあたしを見つめて…頷いてくれたの。

ヴェストルが、そつと口を開きかけた時…

「いやあああ……………」

何？

未夏が走っていった方向から、鋭い悲鳴が迸ってくる。…ううん、すぐに途切れて…やだ…まるで…ホースから空気が抜けてくみたい…

「美星さん」

尋ねてくるの…あたし……微かに頷いてた。

あたしがいなかったら、きっとヴェストル、気にもしなかったと思う。あたしが望んだから…ヴェストル、悲鳴のした方に向かって導いてくれたのよ…

本当は、見たくない…どうしても、最近起こってる事件が思い浮かんでくる…

でも、でもね…助けにもいかないなんて…きつと、あたしはそんな自分を許せないもん…

悲鳴は一度しただけ…まさか、もう…

…考えるだけでも嫌だった。そんな事、無い方がいい…間違いであって欲しい…

あっ…

何か、見えてきた。青白い幕の向こうに、人影が浮かび上がって…

「……………！ ……う、嘘よ……………」

どうして…どうして！ ……どうして、未夏の右手が…小さな、女の子の…首、を…引き千切ってるのよ…！ ……どうして…真っ赤に染まった…その子の腕を…

未夏…どうして、食べ、て…

逃げてく…鬼…みたい、な…

あたし…あたし……………

……………

(…ほし、さん…)

嫌…信じたくない…

……あれは…夢よ…幻……そうよ、きっと…

「美星さん…」

優しい声がする…温かい…

ヴェストル……そう…あたし…

でも…でもね……信じたくない事も、忘れたい事も…『人間』にはあるのよ…

「…忘れてもいいものでしょうか、美星さん」

ヴェストル…

…あたし…必死になって目を開けてた。…ヴェストル、そっと心配そうに覗き込んでくれる…

でも、でもね…あたし、目を逸らせて…ヴェストルの膝から、頭を起こしてた。

家の傍の、公園まで戻ってる…

あつ…駄目…又、あの『夢』が…

「…美星さん。悲しければ、泣いてもいいんです。力一杯、泣いてもいいんです…全ての涙が、恥じるべきものではありません」

「…大丈夫」

掠れた声で、あたし、応えてた。

…そう、あれは『現実』…自分で分かってるよ、ヴェストル…

「…泣き出す前に、知りたいの…どうして…どうして、あんな事に…なった、の？」

声が…体が、震えるのよ…！ あたし…あたし、全身の力を込めて耐えようとしてた。必死で…必死で耐えよう…

「美星さん…」

ヴェストル、あたしの肩をそつと抱いてくれる…温かいの…《本当》に温かいのよ…！

「『人間』は…何故、『神』を自らの上位に得たいのでしょうか。何故、畏怖すべき存在を自らの手で創り出すのでしょうか。」

美星さん、それが《弱さ》として、悪鬼を心に招き入れてしまうんですよ。『何か』を待ち望んでいる心に入り込むなど、妖鬼にしてみればいとも簡単な事なのですから」

「……」

「修行もせず召喚を行った者に、神を観る事など出来ません。…神の替わりにあのお友達の許へと入ったのは、恐らく鬼絞おにしめでしょう。自ら神の名を騙り、お友達に憑依したのです」

「……」

あたし…振り返って、ヴェストルに縋り付いてた。もう、我慢出来なくて…

…声も出さしないで、あたし…泣き出してた……

「美星さん…神々は、災異を起こして人間に警告を送る事などしません…いいえ、正確には出来ないんです。第四期第一紀に身を置きながら…『時間』の鎖を断ち切りながらも、この第三紀への『扉』

となる地が存在していないのですから……」

静かな声…優しく、そっと包み込んでくれる。あたしを傷付けな  
いように…そっと……

「…何故、人間はそれ程まで自らの存在を卑下するのでしょうか。神  
々に支配されたいとも言うのでしょうか…《本質》の等しい、た  
だ『様相』が異なるだけの存在に……」

「……分かんない…でも…『何か』の《原因》を、知りたいのよ…  
…嬉しい事、悲しい事…全部、『何か』の『力』で起きたんだ、っ  
て…それが『人間』なのよ……」

しゃくりあげながら…あたし、呟いてた…

「不思議なものです…神々が、その様な事では動くはずもないのに」  
「でも、でもね…ヴェストル…あたし達には『そんな事』じゃない  
のよ……」

弱いから…甘えたいから…

でも、でもね…だから『人間』なのよ…  
「もっと…もっと大きな《次元》がある、って…分かってる…で  
も……」

あたし、真剣に見守ってくれてるヴェストルに向かって、濡れた  
瞳を上げてた…

「でもね…だからこそ、間違うのよ……」

分かって欲しいなんて、思わない…でも…

……分かるうとはして欲しい…

「……美星さん。間違うのは、神々も同じなんですよ」

「え……？」

「だからこそ…第三期第一紀で《光》と《闇》は争ったんです…」  
ヴェストル、とっても遠い目をしてる…やだ、そんな目をしない  
で……何処かに消えてしまっそうで……

あたし、恐くなって…思わず、確かめるように縋った腕に力を込  
めてた。

「美星さん……」

すぐに、安心させるように微笑んできてくれる。  
…絶対に消えたりしないよね…あたし、信じてるんだからね…？  
あたし、涙を拭いて…何とか笑い返せたのよ…

少し、静かな沈黙が広がる。あたし、呼吸を調べて身を起こして  
た。

「美星さん…」

その時ね、急にヴェストルが心配そうな顔をしてきたの。

「星が動いています」

「え？」

意味が分かんなくて、あたし、首を傾げてた。

「あのお友達が…」

言葉が止まる。あたし、恐くて…でも、でもね…

「…はい」

あたしの視線に、ヴェストル…頷いてくれたの。

「あのお友達は、もう助けられないんですよ…」

「そんな…！」

「鬼絞に体を奪われると言う事は、同時に魂魄の消滅も意味して  
います。…今から、《星》の命ずる儘にお友達は解放されます」

「解放つて…」

「…はい」

ヴェストル、辛そうに…

じゃあ、未夏は…

「どうにか出来ないの？ ねえ、ヴェストル…」

でも、でもね…ヴェストル、ただ頷くだけなのよ…

そんな…未夏が死ぬなんて…！！

「お願い、連れて行って。お願い…！」

「美星さん…《星》の運命は変えられないんですよ」

そうかも知れない…そうかも知れないけど…

でも、でもね…鬼になっても…未夏は、未夏なのよ。

…ヴェストル、無理だつて本当は分かつてる。でも……

「…分かりました」

静かに抱き上げてくれる。

…ありがとう。でも…でもね……

あたし、しようともしないで絶望なんてしたくないのよ……

すぐに、未夏の姿が見えてくる。髪を振り乱して…鬼に心を奪われた未夏が…

あたし、血にまみれてても…それでも、未夏に声を掛けようとした。精一杯の力で口を開いて、声を出そうと……

その瞬間ね、未夏のすぐ前の脇道から、一人の男の子が飛び出してきたの。少し茶色い短髪をした、あたしくらいの年頃の子で…

「…！ 未夏、止めて！」

未夏、その男の子に襲いかかって……

ヴェストルも動いてくれようとした時ね…凄<sup>ひ</sup>い悲鳴が響き渡ったの……

思わず立ち止まったあたし達の前で……引き裂こうとしてた未夏の右腕が…闇の中に消えてく……

あの男の子、栗色の瞳を鋭く細めて…手にした短剣で、未夏を…  
「止めてえ！」

それ以上…それ以上、傷付けないで！ 例え意は無くなつても…  
体は未夏の儘なんだから！

その子…あたしの悲鳴に動きを止めてくれたの。でも、でもね、その瞬間…未夏の体から、辺りの薄闇よりも、もっとずっと黒い霧が流れ出してた。

「危険ですね」

落ち着いて、ヴェストル、あたしを抱いて宙に浮かび上がってる。若しかして…あたしのせいで、あの男の子まで……

…でも…でもね？ じゃあ、あたし…どうすればよかったの？  
倒れて動かなくなつた未夏の前で、その子、霧に向かってすぐに



両手を組んでる。人差し指を立ててから、小指も続けて…

「祈神印です。口中の咒言も正確なものですよ」

何の事か分かんなかったけど…でも、でもね、霧は何かの目に見えない壁で阻まれてるみたい。霧と男の子の狭間から、物凄く強い風が吹き上げてくる。

霧が、少し退がってる。その間に、又、男の子は変な形に手を組んで…

「除魔印です」

ヴェストルがそう教えてくれた時…突然、黒い霧が見えなくなっただの。

…やだ……冷たい咆哮が耳を貫いてくる…

怖いよ……

「大丈夫です」

そつと、ヴェストルが腕に力を込めてくれる…

「鬼絞は、この世界から消失してしまいましたよ」

「……未夏……未夏は？」

見上げるあたしに、ヴェストル…黙って首を横に振ってる…

「そんな…」

どうして…どうして、未夏が死ななくちゃいけなかったの……？

「戻りましょうか…」

あの不思議な男の子が、未夏の体を整えてくれてる…

…あたし、やっぱり……何も出来なかった……

「美星さん…」

部屋に戻ってくると、ヴェストル、そつとあたしに言ってきたの。「定まったものは変えられません。…美星さんが何も出来なかったように、僕にも何も出来なかったんですよ…」

「ヴェストル……！」

そつなの…『何か』が出来るなら、きっと……そう、きっとヴェストル、あたしの為にしてくれたはずだもん……

「ごめんね…ごめんね、ヴェストル…」  
そんなに、辛そうにしないで…

「ごめんね…ごめんね………」

あたし…何度も何度も呟いてた。あたし…ヴェストルまで傷付けて……

「自分を責めないで下さい。…僕が、力不足だったんですから」

そんな事無いわ！ ヴェストル、いつも一生懸命してくれるんだもん…

「ごめんね…ありがとう、…大丈夫、もう…泣かないわ…」

きつと…これ以上にはならなかったの……『運命』の一言で諦めたくないけど…でも、でもね……あたし、もうヴェストルを苦しめたくない…

だから、あたし…何とか笑おうとしてた…

「美星さん…有難う御座います」

ううん、…あたしの方こそ…

……ありがとう…

温かな腕が、ゆっくりと離れてく…

あたし、横になってずっと…ヴェストルが消えた窓を見つめて考えてた…

そう……ずっと考えてたのよ…

4 計都の惑溺 おわり

さ緑の葉は 互いを重ね

揺らめく軌跡を 晶に描く

楚々たる枝柯は 優美に絡み  
一途の旅路を 虚空に辿る…

## 5 水曜の不天

私が『生』を求める事…それは…誰かの『死』を望む事…

…あのね、…あたし…

昨日は…ね。あたしの十五回目の誕生日で…礼奈だって来てくれたし、とつても楽しかったのよ…？

…今日だって、いつもみたいに酷い頭痛も無くて…吐き気だって殆ど感じてなかったの。なのに…なのに、どうして…

……どうして…赤い、血なんて吐くのよ…！

ちよつと…喉の奥に何か引つ掛かったかな、って…あたし、ただそう思ったから…だから…手で、口許を押さえて咳込んだの。

別に、苦しかった訳でもないのに…手が真っ赤になって…

…あたし、あたしね…もう、びっくりして…

…

…母さんね、すぐにお医者さんをお呼びしてくれた…

いつも通りに診察してくれた後で、お医者さん、注射をしながらあたしに言ったの。

「これからは、診察の時にいつもこの注射をしましょう」  
って…

でも、…でもね？ …これだって、吐血を抑えるだけなんですよ？  
あたしの病気が治るんじゃないのよね…

…あたしね、生まれて初めて吐血して…とつてもショックだったの。恐くて…思わずあたし、礼奈に電話しようとしてた。でも、でもね…礼奈、もう受験生なんだもん。夏期講習に行つて一生懸命勉強

強してるのに…呼び出すなんて…

分かってる…礼奈なら、すぐに飛んで来てくれる…分かってるのよ。でも、でもね…だからって、それに甘えてちゃいけないのよね…そう、もう…夏期講習が始まっているの…

この夏で…足が動かなくなっているから…一年になるのよね…

…始めは…ね？　ただ、足が痛いだけだったから…あたし、てっきり捻挫か肉離れくらいにしか思っただけだったの。ただ、骨折してたらいけないからって…すぐ近くの大きな病院で、念の為に検査してもらったのよ。

レントゲンで診ても、何も無かったから…安心して、痛み止めの注射だけで、あたし…その日は帰ってた…

…その時の痛みはね、すぐに無くなったの。でも、でもね…注射の効力が切れたからかな…又、痛みが酷くなってきたの。その度に病院に行って、その度に注射してもらって…

どんどん、足は重くなってた…

ちよっと歩くだけでも疲れるようになって…おかしいな？　って真剣に思い始めた時には…あたし、もうベッドから動けなくなっていたの…

…お医者さんはね、とつても頑張ってくれて…今は、もう足の痛みなんて、すっかり無くなってる。でも、でもね…精一杯調べてくれてるんだけど、あたしの病気、何なのか分からないみたいで…とつても大きな病院だから、本当に分からないんだろうな、って…それでも、お医者さん、頑張って治療してくれているのよ。だから…ね…あたしだって、負けないくらい頑張ろうって…そう、思っていたのに…

…だって…だって、そうでしょ？　…足が動かさないだけなのかな、って……………

……………どうして？　どうして、こんなに毎日頭痛がするの…？　どうして…こんなにいつも、胸元が苦しいの…？　………どうして…どうして、赤黒い血なんて吐くのよ…！

……あたし、もう…歩けないだけじゃなくて…  
このまま…ずっと苦しんで…

……

……もう…誕生日なんて来ない気がするの…  
あたし…明日になったら、『死んでる』…かも…  
…恐いのよ！…あたし、…嫌、絶対に死にたくない…  
…でも…お医者さんも治せなくて…、ううん、…お医者さんだ  
って頑張ってくれてるのに…

……でも、…でもね…  
…怖いのが震えてくるのよ…！

……

…入院だって、考えてた。でも…だからって、病気が治る訳じゃ  
ないのよ…気分的にも、きつと自分の部屋の方が楽し…それに…  
ヴェストルとも逢えなくなりそうで…

…あたし、自分がもうすぐ死ぬかも知れないなんて…そんな事、  
考えた事も無かった。だって…そうでしょ？ あたし、まだ中学生  
だし…本当なら、もっと長い間生きていけるのに…

……『死』なんて、遠い問題だと思ってたんだもん…  
でも…でもね…もう、すぐそこに…すぐそこにあるかも知れ  
ないのよ！

…やだ、…震えが止まらないよ…  
嫌…まだ、死にたくない…

あたし…あたし…

(…美星さん)

……え…？

急に…体が『何か』に包まれて…

とつても温かい…

…そつと、抱いてくれてる……そつと…優しく…

ヴェストル…

あたし…

…あたし、泣きながら…眠りに就いてた…

「美星さん…」

「うっ…ん…」

とつても心地好い声……え？ …えええ？

あたし、びっくりして跳ね起きてた。どうして、こんな時に限ってヴェストル、格好良い姿になってるのよ！ …えくん、あたしの髪の毛、こんなに乱れてるう。

「気分はどうですか？」

今は酷くないわよ。でも、でもね？ どうして、こんなに早く…

あたしね、その時になって初めて、窓の外が暗くなってるのに気付いてた。あんな所に、もう『熊アルクトゥルスの番人』が見えてるじゃない。あたし、どうして…

「あっ！」

「美星さん、今日はとても心を乱していましたから…昼間でしたが、『力』を使っただんです」

そんな風に、ちよつと照れてるヴェストルって…なんて素敵なんだろう！ …そうよね、あたし…死ぬかも知れない、なんて思ってたのよね…

「…ありがとう、ヴェストル。…あたし、一人で混乱して…まだ、死ぬなんて決まってるのにね」

そうよ。まだ決まってもないのに、不安になるなんて…らしくないわ。

あたしがにつこり笑って見上げたら…急に、ヴェストル、抱き寄せてくれたの。もう、あたし、びっくりして…

「ヴェ、ヴェストル…？」

やだ、あたし…胸元まで赤くなってる…

「美星さん…苦しいんでしょうね。…辛いんでしょうね……」  
ヴェストル……

「僕には、美星さんの痛みが…きつと、ほんの僅かしか分からなくて……何も出来なくて……済みません……」

「ううん、謝ったりしないです！…あたし、ヴェストルが来てくれただけで嬉しくて…苦しい事なんて、全部忘れるのよ。

…それにね、きつとヴェストル…あたしの事、全部分かってくれてるんだもん…もう、謝ったりしないで…ね」

「…有難う御座います」

そつと、温かな腕が離れてく…お願い、もう少し……

…ううん、まだ、頼めないの…あたし…まだ、何も言っていないだもん…

優しく微笑みながら、ヴェストル、あたしの指先を取ってくれる。いつもと同じように、星夜の町へ…

ヴェストルがずっと来てくれるなら、あたし…不安にも恐怖にも耐えられるかも知れない。…ううん、耐えなくちゃいけないの。

だって…あたし、ヴェストルを悲しませたくないんだもん。

「…いつも、ありがとう」

だから、あたし…そつと囁いてた。

「はい？何か言われましたか」

「ううん！何でもないの…」

でも、でもね？《本当》に思ってるのよ…

…いつも、傍に居てくれてありがとう…つて……

夏の大三角形が、遙かな天頂を目指してる。デネブとベガからずつと視線を下げてみたら、そこにはちよつと不気味なアンタレスが蠍の心臓で輝いてた。

とっても綺麗で微かな流れ…星つて、こんなに沢山あるんだなあつて、いつもそう思うの。あの星の一つからこつちを見ても…きつ



と、太陽なんて単なる『点』でしかないのよね。地球なんて、全く見えるはずがないのよ。そんな…目にも見えないような星の上で、あたしがこうして夜空を見上げてる……とつても、気が遠くなるわ。こんなに地球だって大きくて広いのに……

…きつとね、あたしが悲しんだり、笑ったりしても…きつと、あんなに散らばってる星達にしてみたら……

…そんな事、全く意味の無い事なんだろうな、って…

「そんな事はありません」

あたしがぼおーって眺めてたら、ヴェストル、そう言って笑い掛けてくれた。

…やだ……もう、初めて逢ってから四ヶ月も経つのに……あたし、まだどきどきしちゃう。

でも…でもね。…それって、とつても素敵な事なのよね？

「美星さんが感じている《全て》は、『宇宙』に何らかの影響を必ず与えています。それは《縁》や《業》となつて、複雑な『時間』の川筋を変えていくんですよ」

そうなんだ…何だか、とつても嬉しい気がする。

でも…でも、ね。やつぱり……どんな大きな苦しみでも、とつても些細な事に思えちゃうのよ。

…例えば……『死』なんかも、ね……

「美星さん、そろそろ降りましようか」

「…うん」

いつも見せてもらうけど、星空って全く同じ姿をしてないんだもん。見る度に、名残惜しくなるのよ。

あたし、ヴェストルに手を取ってもらいながら、暫く天蓋に煌く宝石の群れを振り返ってた。

…その時ね、ふと思ったの……

……ヴェストルにしても、あたしは…

あの、星の一つと同じなのかも知れない……ううん、実際には見えてない、小さな星の小さな存在……

ただ……それだけなのかも知れない……  
寂しいけどね……

青い大気の川が、ゆったりと街中を流れてく。殆ど何の物音もしない静かな町……

あたし、その星夜の町でヴェストルと並んで歩いてた。もう、すっかりこの不思議な空間にも慣れちゃったの。『ここ』が、何処なのかは分かんない儘なただけどね。

あれ？　ここ、病院の前じゃない。

……ちよつと、やだな……

ヴェストル……そんなあたしの気持ちが分かっているはずなのに、ほとんど前庭の中に入ってくるのよ。あたし、仕方無くその後ろに続いてた。

「やあ、やつぱり来ていたんですね」

……え？

立ち止まったヴェストルの横で、あたし、その視線を追い掛けた。

……綺麗な女の人が、一人、悲しそうに俯いてベンチに腰掛けてる……

「あの人は？」

あたしより、五つくらい年上かな。……丁度、若者の姿になったヴェストルと同じくらい……

「彼女は、もう随分と長い間、この星夜の町に住んでいるんですよ」「住んでるの？」

だから、ヴェストル……あの人の事知ってるんだ。

……あれ？　……あたし……何か、変……胸の奥に、小さな針が刺さったみたい……

「さやかさん。どうかしたんですか？」

「あっ！　ヴェストルさん……」

その人、急いで立ち上がって……歩み寄ったヴェストルを迎えている。

…柔らかくて、いつも微笑んでるような優しい瞳をしてる…頭の上でね、手入れの行き届いた髪を一つに束ねてるの。とっても素敵な女性…

その人ね…座る所を作りながら…ちょっと、頬を染めてる気がする…

「あの、そちらの方は？」

「かむはた綺美星さんです。…美星さん？」

「あつ、初めまして…」

「やだ…あたし…」

…きつと、今…とつても嫌な顔して笑ってる…

…だって…だって、とつてもお似合いなんだもん…

「今日は、どうしたんですか？ とつても悲しそうでしたが…」

「はい」

ヴェストルを挟んで、あたし、黙って腰を下ろしてた。

やだ…あたし、どうしよう…

…胸が痛いよ…

「ヴェストルさん、私…今日、とても親しくしてもらっていた方を

…姉のように思っていた方を亡くしたんです…」

…え？

あたし、思わず顔を上げてた。その表情に気付いて、ヴェストル、

あたしに説明してくれたの。

「さやかさんは、心臓が悪いんですよ。今、この病院で移植を待っているんです」

「…じゃあ、その人も…」

さやかさん、小さく頷いてる。

「はい…同じように、心臓移植を待っていたんです」

二年前、私が入院した時には…秋恵さんは、もう、既に一年間臓器の提供を待っていました」

ちよつと待つて！ じゃあ、もう二年間も待ち続けているの…？

「私と秋恵さんは年齢も近くて…すぐに、色々な事を教えてもらい

ました。秋恵さんを通じて、看護婦の方々ともお話をするようになりましたし…病院の事も、そうでない事も…本当に、沢山教わったんです。

…ヴェストルさん…秋恵さんは《本当》に姉のような方でした。辛くて悩んだ時も、いつも力になってくれたんです…

私が病気の事で弱気になった時にも、いつも叱ってくれました…  
「駄目よ、あなたと同じくらい、家の人も不安になって苦しんでるんだから。あなたが元気な顔を見せないといけないのよ」って…  
…よく、そう言われました…」

さやかさん…淡々と話してる。とつても強いのに…あたしなら、きっと…悔しくて、悲しくて…泣きながら怒鳴ってると思うもん。

ヴェストル…瞳を閉じて、黙って聞いている…

「いつも…本当にいつも傍に居てくれたんです。…つい、昨日迄は…」

少し、さやかさん、震えてる…

…ううん、あたしだって…

「…急に、容体が悪化したそうです…ついさっき…息を引き取ったばかりなんです…」

医師の方々は、残念そうに「彼女は移植のタイミングを逃したんだ」って…そう言っていました。ヴェストルさん…実は先月、…脳死状態の方から心臓の提供があったんです…でも、一番長い間待っていた秋恵さんは、その心臓を一番若い人に移植してください、って…そう頼んだんです。

…その時には、私達も賛成していましたが…ですが…

「…さやかさん、変えられない事を悔やむべきではありません」

ヴェストル！ そんな事、…そんな事言わなくてもいいじゃない

！ さやかさんだって、きつと分かってるんだから…

「はい…ですが、これが《運命》なら…余りにも悲しいんです…

…怖いんです、ヴェストルさん…」

さやかさん、ヴェストルを見上げてる…ヴェストル、頷き返して…

あたし…あたし…

…苦しいよ…痛いの…体中が痛いの…

「今度は、私が死ぬかも知れない…それが怖いんです…」

「ですが…」

ヴェストルの言葉を、さやかさん…につこり微笑んで止めさせてる…

「はい…分かっています。ですが…『回帰』に依って《私》が失われるかも知れない…その事は、やはり怖いものなんです…」

「…ですが…さやかさんは、早く移植をしてくれとは決して言われませんね」

…え？…どうして…

あたし、ちよつと顔を上げてた…

「それは…ヴェストルさん。…私が移植を望む事は、それは…私が誰かの『死』を望む事にもなりますから…」

「…そんな！」

辛かったけど…でも、でもね…あたし、叫んでた…

「美星さん…」

ちよつと驚いた顔で、さやかさん、あたしを見てる…あたし、自分の気持ちを悟られそうで…

でも、顔を背ける前に…さやかさんね、優しく笑い掛けてくれたの。

「美星さんは、脳死状態の方を見た事がありますか？」

「う、ううん…」

「確かに、機械や薬を使って心臓を動かしているんですが…まだ、血は通っているんです…体が温かいんです…

医学的には、既に『死んで』いるんですが…ご家族の方々には、とても死んでいるようには見えません。まだ、皮膚も柔らかくて…

…すぐにも治りそうなんです。この人は、もう立ち上がる事は無い…ご家族の方々も、意識の上ではよく分かっています。ですが…

人は、その脳死状態の方の温もりに、『万が一』を期待するもの

なんです……」

「……」

「美星さん……そんな方々に、心臓を取り出す事を承諾してもらえないでしょうか。……まだ温かい……血の通う体から、臓器を取り出す事になるんです……それは、『若しかしたら』と思っていた『死』を……《本当》にしてしまうんです……」

……そんな……そんな……

「……臓器移植は、亡くなられた方がいて初めて成立するものです。『死』がなくては存在し得ないものなんです……」

……私は、その『死』を望んでまで、生きていくつもりはありません……」

そうかも知れない……そうかも知れないけど……

……あたし、しっかりとさやかさんを見て口を開いてた。

「あたし……あたしだったら、きつと……そうは思わないわ」

「美星さん……」

「『死んでいるようには思えない人』が《本当》に『死んだ人』になる……その悲しみは、とつても大きいと思う……でも、でもね？……それは機械や薬で動かし続けた心臓が、衰弱して……力尽きて止まったとしても同じなのよ……」

違うのは、『長さ』だけ……ううん、それだって……《本当》に患者がどつちを望んでるかなんて分かんないわ」

「……」

「若し、あたしが死んだら……」

あたし、ちよつと息を吸い込んで……

「……ただ、灰になるなんて嫌だもん。」

あたしなんて……生きてる間、きつと誰の為にもなれないから……せめて、この臓器くらい使ってもらって、役に立ちたいの……きつとね、皆は悲しむと思う。でも、でもね……あたしは、役に立てた事を喜んで欲しいのよ……

移植をして、その人が幸せになってくれたら……あたしも『幸せ』

なんだもんね……」

……あのね…あたしの友達にも…三歳の時に移植手術を受けた子がいるの。あの子くらい、楽しく真剣に生きてくれるんだったら…きつと、あたしは移植した事を嬉しく思うわ。

…その子ね、一日一日をとっても大事に楽しんでるの。毎日、朝と夕方に金色の免疫抑制剤を飲んで…その薬、一生飲み続けないと、拒絶反応が起こるかも知れないんだって。

でも…でもね、その副作用で…免疫力が低下してしまうから、ちよつとした病気にもすぐ罹っちゃって…死ぬ事だってあるそうなの…

だから…その子ね、一度だけしんみりと話してくれた事があつた。「私はね…将来の事なんて考えたりしないの。朝、気持ちよく目が覚めて…楽しく皆と遊んで…夜、ベッドに入ってから…あつ、今日も一日無事に過ごせたんだ、って…それだけ感謝して生きてるのよ」

臓器移植を受けたって、完全に健康で元気な体になるわけじゃないの。でも、でもね？ その子、毎日を嬉しそうに暮らしてるの…《本当》に『幸せ』になってるのよ…

きつと、臓器の提供者は喜んでくれてるわ。もう、自分では使えなくなつた『体』で、『幸せ』になつた人がいるんだもん…

「…海外の方の中には、そう思われる方もいます。他人の体の中とは言え、一度は『死』を迎えた方が生き続けているんですから…

ですが、私や、多くの日本人は、まだそれ程まで割り切る事が出来ません…臓器は臓器…死んで逝つた方、そのものではないんです

……」  
「海外には…」

さやかさんの静かな言葉に、あたし、尋ねようとして…

でも、でもね…すぐに止めてしまったの。

「…費用がかかり過ぎるんです。今迄の二年間の入院費だけでも、父や母の負担になつて…更に、数千万円の治療費を出すな

んで、とても無理なんです…

それに、海外へ行ったからと言って、すぐに提供者が現れるわけではありません。その提供者が見付かるまでの間、付き添いの方も必要になります…

勿論：父や母は無理をしても、…私が望めば、行かせてくれると思います。ですが：私はこの日本に残って待つ事にしました…頼んで、半ば強制的に臓器を提供してもらうのではなく…自ら提供する意思のある方の臓器を、私は待つ事にしました…」

さやかさん…

「…ですが…もう、秋恵さんも亡くなって…」

震えてる…さやかさん、急に震え出してる…

「今迄のように、待てるかどうか…不安なんです…」

……恐いんです…ヴェストルさん…」

ヴェストル…縋るようなさやかさんの視線に…そつと…温かい微笑みを向けてる…

あたし…あたしだけのものだって…ずっと…そう、思ってた…

駄目…涙が出てきそう…

……辛いよ…ヴェストル…

「さやかさん…もう、恐れるものなんてありません」

そつと…肩を抱き寄せてる…やだ、やだ…あたし…

……もう…

「ヴェストルさん…」

「もう…終わっただんですよ…」

ヴェストルの静かな口調に驚いて…あたし…思わず見上げてた。

さやかさんも目を見開いて…うっん、すぐに素敵な笑顔を見せてる…

「…はい、ヴェストルさん」

うつすらと涙を浮かべて…抱いて、る…ヴェストルに…

寄り掛かっているの…

…きつと、……やっぱり…さやかさん…



「又、思い出した時には…ここに戻ってきて下さい」

ヴェストル…さやかさんの額に…そつと…

キス…して、る…

…そんな…そんな…あたし…

…あたし、声も出さないで…泣いてた…あたし、…哭き出してた…

「はい。…有難う御座います」

さやかさん、幸せそうに微笑んで…

あたし、辛くて…目を逸らそうとして…

…？…さやか、さん…？

さやかさんが…薄れてく…ヴェストルの腕の中から、消えて…？

…あたし、濡れた瞳の儘、呆然とヴェストルを見てた。

「さやかさんの恐怖は、三年前に終わったんですよ」

重い声で…ヴェストル、背中を向けて話してる…

…あたしを見ないで話すなんて…初めてだった…

「秋恵さんと同じように…容体が急変して…それ程の苦しみも感じないまま、彼女は死を迎える事が出来たんです…」

じゃあ…さっきのさやかさんは…幽霊なの？

「はい。…亡くなられる前にも、幾度かこの町へ遊びに来ていたんですが…今では、完全な住人となっています。ですが…この、苦しみや悲しみを癒してくれる世界でも…時折、辛かった頃の記憶を思い出す事があるんです。…そんな時、必ず彼女はこの病院の前庭に来るんですよ…」

自分の病室から、いつも眺めていた…元気になって歩く事を夢見ていた前庭に…」

そんな…じゃあ、移植は…

…そんな…

…それに、さやかさんは…ヴェストルの事…

…あたし…

「で、でも…ヴェストル…さやか、さんを…」

言つの…？ …本当に…

「助け…助けられなかったの…？ …さやかさん…きつと、ヴェストルの事が… 『好き』、で…」

小さな…掠れる声で…

「……………」

ヴェストル…

…駄目…涙が…止まらない、よ…

「…定められた事でしたから」

暫くして…ヴェストル、そう呟いてた。

「それに… 『死』は恐れるものではない…彼女は、それを知っていたんですよ…

美星さん… 『死の苦しみ』は畏れても仕方無いと思います…ですが、『死』そのものを恐れる必要は無いんです。『死』は《唯一の本質》への『回歸』であり、『昇華<sup>シフト</sup>』なんですから…

…多くの人間は《個》の消失を恐れますが…《個》とは《本質》の一要素であり、極言すれば《本質》と同じものです。《個》が肉体とは異なる《光》である事を知っているのなら…死も苦しみも、その人には《無》となるはずです…

…さやかさんは、それを知っていたんですよ…」

ヴェストル、振り返ろうとしてる…

「美星さん…」

あたし、泣いてるところなんて見せたくなかったから…そつと、俯いてた…

「…確かに、さやかさんは僕を愛してくれました…」

「……………」

…やだ…もっ…

胸が痛い…痛い、よ…

…ヴェストル…あたしは…

あたしは…

「ですが、僕には応えられなかったんです…

…僕には、既に心に決めていた人がいましたから…」

(……………！)

そんな…！ ……そんな…

……もう…聞きたくない…

苦しいよ…寂しいよ…

…ヴェストル…

「美星さん…」

やだ…肩なんて抱かないで…

このまま…哭かせて……そっとしておいて…お願い…

「美星さんなんです。…僕が『好き』なのは、美星さんなんですよ

……………」

……え…？

あたし…泣きながら、ヴェストルを見上げてた…

……《本当》……に…

「美星さんが生れた時から、僕はずっと美星さんの事を知っています。いいえ…それ以前の事でさえも…

僕のような『存在』が、『人間』の美星さんを愛しては迷惑だとも思っただんですが……」

う…う…う…！ そんな事、絶対に無い…

あたし…あたし…

あたし、嬉しくって……しゃがみこんで、又…泣き出してた…  
「この楽しい一時を終わらせる事が恐くて…なかなか言い出せなかつたんです。」

……美星さん…やはり、迷惑でしょうか……若しも、そうなら…僕は、もう来ません…」

「う…うん！ 来ないなんて言わないで…あたしも、ヴェストルの事、『好き』なんだもん……ずっと…ずっと…初めて逢った時から、ずっと『好き』なんだもん…」

「美星さん…」

赤くなりながら、告白してくれたヴェストルって…『人間』と同じなの……

あたし、ヴェストルに抱き着いて…思い切り…声を上げて泣いた……

「嫌われるかと思っていました……」

「冗談じゃ…ない、わ…誰にも…ヴェストル、を…取られたくないもん……」

「有難う御座います……」

しゃくりあげてるあたしを…ヴェストル、しっかりと抱いてくれる……

あたし…深い、藍色の瞳を見上げて……

…ヴェストル…そっと……

…キス…してくれたの……

もう…きつと……どんな苦しみだって耐えられる……

……ありがとう、ヴェストル……

5 水曜の不天 おわり

涼風駆ける 緑陰の下

夕づつ愛せし『歴史』の『樹』を

わたしは見上げ 胸に呼ぶ……

## 6 木曜の齟齬

じつと…見上げてくるんじゃよ…黒い、円らな瞳で…

「良かった…今日も、気分は好いみたいね」

礼奈、部屋に入ってくるなりそう言ってくれたの。《本当》に安心した表情で、喜んでくれる。

「うん、ありがとう。あれ以来、血も吐いてないのよ」

そうなの。あたしが…その…ね？ ……ヴェストルと…

…やだ、…思い出すだけで、真っ赤になっちゃう…

あのね、あの時以来…あたし、そんなに気分が悪くなる事って無いのよ。一生懸命頑張ってくれてるお医者さんには悪いんだけど…あたしね、やっぱりヴェストルの御蔭だと思うわ。

あの日の事、勿論、礼奈にはすぐに話したの。とっても喜んでくれて…そんな礼奈を見るとね、あたしまで嬉しくなってくるのよ。ヴェストルも、あたしの事を『好き』でいてくれたんだって…その事が、改めて思い出されるんだもん。

あんな事になるまでは…ね。あたし一人でも、ヴェストルの事、『好き』でいよう、って…ヴェストルが別にあたしの事を何とも想ってくれてなくても…あたしは『好き』な儘でいるんだ、って…そう、思ってた…

でも…でもね？ ヴェストルもあたしの事を『好き』になっくれたんだ、って…そう思ったら、あたし、今迄よりもっとヴェストルの事が『好き』になっっていくのよ…《本当》に……どんどん新しく『好き』になっっていくの。

……ときどきするくらい、嬉しいのよ…

「ミホ…《本当》に幸せそうね…」

優しく、くすくす笑う礼奈の声が…え？

やだ！ あたし、一人の世界に入ってたんだ…あくん、どうしよう。胸元まで、赤くなってるう。

「ご、ごめんね」

あたし、すっかり慌てちゃって…でも、でもね？ やっぱり礼奈なのよ。

「うん、大事な気持ちだもの。…忘れないようにしないとね」

そう言っつて、そつと微笑んでくれるの。心から喜んでくれてるのが分かるのよ。

「うん…大丈夫。絶対に忘れたりしないんだから」

そうよ。こんな素敵な気持ち、あたし、どんな事があっても忘れたりしないわ！

そう、どんな事があっても…ね。

「ねえ、礼奈。ほら、懐かしいでしょ？」

あたし、そう言っつて、この前見付けた写真を礼奈に見せたの。丁度、中学一年生の頃で、夏の海辺であたしと礼奈が並んで写ってるのよ。

「これ…確か、今頃の時期に泳ぎに行ったのよね」

礼奈も、懐かしそうに写真に見入ってる。

本当は…ね。あたし…この写真を見付けた時、とつてもシヨックだったの。だつて…あたし、随分と痩せたんだな、つて…毎日のように鏡見てたら分かんないけど…あたし、こんなにも弱々しくなっちゃったんだ、つて…

砂浜で、きちんと真っ直ぐに立ってる事も…ちよつと不自然に思えてくる。あつ、あたしにもきちんと歩けてた頃があつたんだ…泳いでた頃があつたんだ、つてね…

…でも、でもね。やっぱり、ブルーになつてるのつて、らしくないみたい。そんな悲しい思いだつて、すぐに楽しい思い出に掻き消されてしまつたんだもん。

「そうなのよ。もう、九月に入ってたのにね」

ベッドの上で半身を起こして、呆れたようにあたしがそう言ったら、礼奈、くすくす笑ってるの。

「どうしたの？」

「だって…どうしても行きたいって、…ミホが言ったのよ…？」

「え？ そうだった？」

礼奈、優しく微笑んで頷いてる。

「…よし、じゃあ行こうか、って…お父さんが車を出してくれて、名前も無い小さな浜辺を見付けて泳いでいたんだもの」

あつ…！

…少し…胸の奥が苦しいの…

あのね……礼奈の両親…もう、この世に居ないのよ…

…丁度、この写真を撮って…三ヶ月くらい経った頃かな……礼奈のおばさん、病気になって…寝込んだのよ…

本当に、何でもない病気だったんだって…でも、でもね…おばさん、普段から体が弱くて…二週間して…急に……本当に、急に亡くなったの…

あたし…あたしね。最初、信じられなくて…茫然としてたの、覚えてる…

…だって…だって、ついこの間まで、温かく迎え入れてくれたおばさんが…何だか…あつと言う間に、…誰もそんな事、思いもしない内に、攫われちゃったみたいで…

……それからなの。あんなに楽しくて明るかったおじさんも…急に、無口になって……飲めないのに…ね。……お酒も、沢山飲むようになった…

礼奈…必死で耐えてたのに……おじさん、おばさんが死んだのは……自分の責任だ、って……だから…

……去年の春……自殺……した、の…

その時ね…あたし、初めておじさんを憎んでた……あんな逃げ方って、無いと思う……礼奈はどうなるの？ 礼奈だって、ずっとずっと

と……

…自分の苦しみも悲しみも…面になんか出さないように頑張つて…  
…優しい姿からは思えないくらい…とつても、強いから…

礼奈、本当に…忘れてたりしないで…必死になって頑張つてきたのよ…

…だから…ね。…あたし、いつも拘らずに…あの二人が生きてた頃と同じように話すようにしてるの……だって…気遣いするなんて…一生懸命、耐えてきた礼奈に失礼だと思っもん…

それにね…礼奈、敏感だから…逆に、あたしを気遣ってくれるのよ。

「…そうそう！ そんな所だったから、あたし、あちこちクラゲに刺されたのよ」

「でも…あそこで泳ぐ事に決めたのも、ミホだったのよ？」

「あれ？」

あたし、礼奈と顔を見合わせて笑つてた…

「久し振りに、海にも行ってみたいな…」

歩いては無理なただけだね。…今夜、ヴェストルに連れて行つてもらおうかな。

そう思つた瞬間、開けてあつた窓から声が飛び込んできたの。

「それもいいですね」

え？ …えええ〜！

ちよ、ちよつと待つてよ、ヴェストル！ まだ、あんなに太陽が輝いてるじゃない！ 早く来てくれたのは嬉しいけど…でも、でもね？ あたし、礼奈にだけはきちんかけもちと紹介したかつたのにい〜

「初めまして。あなたが景守礼奈さんですね」

「はい…宜しく御願います」

う〜ん…やっぱり、礼奈なの。小人の姿を見ても、普段と同じように挨拶してるじゃない。

あたしが突然の事で慌てると、礼奈、微笑んで椅子から立ち上がろうとしてる。



「じゃあ、わたしは…」

「あつ、待つて！」

あたし、急いでヴェストルを振り返つてた。

「ねえ、ヴェストル。今日は、礼奈も連れて行ってくれない？」

「でも…」

礼奈ね、気を遣つてくれる。でも、でもね？ あたし、どうしても連れて行きたかったの。本当は、もうちょっと考えてから、きちんと誘いたかったんだけど…いい機会だもん。

「僕は構いませんよ」

「ね？ 礼奈」

「…本当にいいの？」

「勿論よ！」

そうよ。あたし、本当に来てもらいたいんだから。いつも、礼奈には一杯助けてもらってるんだもん。…あたしに出来る事なんて、こんな事くらいだもんね。

「でも、でもね、礼奈。約束してくれる？ あたし達になんて、気を遣わなくてもいいからね？」

「こつでも言っておかないと、礼奈の事だもん。とつても気にしちゃうのよ。」

「…分かったわ。…有難う」

くすくす笑いながら、礼奈、嬉しそうに言ってくれる。

「では、行きましようか」

でも、でもね？ まだ、ちょっと明るくない？ 空を飛んでるところなんて、見付けられたらどうするの。

「僕と一緒になら、大丈夫ですよ」

不意に、格好良い若者の姿になってる。うん…あたし、まだこんなにもどきどきしちゃう…

ヴェストル、温かく微笑んで指先を取ってくれたの。でも、でもね。そのまま飛び出そうとするんだもん。あたし、慌てて引き留めたの。

「ちょっと待ってよ。礼奈は…」

「そうよ、礼奈は飛べない……え？ ……ええええ？」

「どうして？ どうして、礼奈、部屋の中に浮かんでるのよ！」

「見事な《気》の制御ですね」

「え？」

「あたしね、きつと、とつてもおかしい顔してたと思う。でも、でもね？ 仕方無いじゃない？ あたし、礼奈が飛べるなんて知らなかったんだもん。」

「ミホ……」

「少し、恥ずかしそうに礼奈が笑ってる。」

「生きている限り、誰もが《気》と呼ばれるエネルギーを持っているの……それは『大地』を始めとする、様々な存在に繋がって、わたし達を包んでいるわ……」

「うん。それは、前にヴェストルから教えてもらった事があるけど……」

「わたしは……ね。自分の中の《気》を使って飛ぶ事を……あの『樹』に教わったのよ……」

「あの『樹』って……『郷夢の森』の……」

「……そうなんだ。」

「あれ？ じゃあ、あたしも教えてもらったら空を飛べるの？」

「美星さん。《気》の制御には二つの要素が必要なんです。一つは鍛錬で、これは能力の安定と助長を目的とします。もう一つは、素質です。残念ですが、努力だけで《気》の発現を自由に行う事は出来ませんよ」

「分かったわよ、ヴェストル。あたしには、その素質が無いのね」  
「うん、ちょっと悔しいかな。」

「でも、でもね。あたしには、ヴェストルが居てくれるんだもん。」

「それは、きつと自由に空を飛べると同じくらい……うん、きつと、それ以上に素敵な事なのよ。」

「では、行きましようか」

「柔らかな藍色の瞳が微笑み掛けてくれる。ヴェストル、そつと優

しく手を握って、星夜の町へと誘ってくれるの…

あたしね…《本当》に嬉しいのよ？ 幸せなんだから、ヴェストル…

《本当》に…ね！

西方で輝いてる大好きな金星から、ずっと北に回ってケフェウスの細長い五角形を見付けるの。それからゆっくりと、頭上にある白鳥の十字架まで駆け昇って…琴と鷲の間を通ってね、くるっと南に目を向けたら…真っ赤なアンタレスがS字の中央で煌いている。

その間にも、足下に広がる真っ黒な海原からは…ずっと、波の音が聞こえてくるの。途切れ無く打ち寄せてる、永遠に続く不思議な音色…でも、でもね…何処か、静かなのよ。このまま、すうーっとな吸い込まれていきそうで…

ね？ 礼奈…あたし、いつもこんな素敵な星空を見る事が出来て…本当に幸せだな、って思うのよ…

「……………」

…あたしね、そんな想いも声にはしなかった。礼奈、少し青の入った黒い瞳で、ずっと空から目を逸らさないんだもん。素敵な気持ち、邪魔したらいけないもんね…

「ミホ…有り難う……………」

暫くしてから、礼奈、そう言っつてそつと微笑んでくれたの。でも、でもね。あたし、小さく首を横に振ってた。

「ううん…お礼なら、ヴェストルに言っつて。あたしだって、ヴェストルが連れてきてくれなかったら…絶対に、こんな星空、知らなかったはずだもん」

「いいんですよ、美星さん。僕が御誘いしたかったんですからね」  
あたし、そう言っつてくれたヴェストルの指を、そつと力を込めて握り返してた。

すぐに、温かな手が包み込んでくれる…

あたしね、真っ赤になっつてくるのが自分でも分かつたから、慌て

て南の空を見上げたの。

何気無く向けた視線の先に、ティーポットが浮かんでる。射手座の下半分を四角く結んだら出来るのよ。注ぎ口からは、ちゃんと湯気まで出てるんだから。

その白くて微かな湯気が、ずーっと夏の大三角形を通り越して、北の方まで伸びてきてる…

「こんなに沢山の星を見たのは、とても久し振りの気がするの…」

あたしの視線を追ってた礼奈が、静かに咳いてる。

「いつのまにか、見えなくなってしまつて…でも、ずっと変わらずに、こうして輝き続けていたのね…」

「…うん」

そう…あたしだつて、よく空を見上げるけど…気が付いたら、ほとんど星が見えなくなつてたもんね…

満天の、ちよつと背伸びしたら頭をぶつけそうな星達に囲まれて…傍に、大好きなヴェストルと礼奈が居てくれる。同じ場所で、同じ時間、同じ想いで…

あたし…今、とつても素敵な『時間』に抱かれてたの。ずっと、このままでいてもいいな、つて…心から、そう思える『時間』の中にいたのよ…

だから、ヴェストルが「降りましようか」つて言つた時…ちよつと、残念だつたの。

…でも、でもね？ 今夜の事は…絶対、忘れない思い出になるんだもん。

きつと…それは、《永遠》と同じ事なのよ…ね？

月の光に照らされて、砂浜がぼんやりと白く浮き上がつてる。あたし達はその波打ち際に降りようとした時、急に砂浜のすぐ上の道路から爆音が聞こえてきたの。

「やだ。星夜の町にもあんな人達が居るの？」

ライトも点けないで、一台の車が物凄いスピードで走ってる。青

い暗闇の中を通り過ぎていったと思ったら、急にブレーキを踏んで、又あたし達の方へ戻ってくるのよ。

「あれは……」

ヴェストル、静かに礼奈を見て続けたの。

「礼奈さんの《縁》で紛れたようですね」

「……はい」

……え？

礼奈、とつても真剣な表情で……暴走してる車の前に降りようとしてる！

あたし、びつくりして……恐くなって……すぐに追いかけてようとしたら、ヴェストルが止めたの。

「大丈夫です、美星さん」

ヴェストルね、優しく笑ってくれる……でも……でもね？ 平気でいられるはず、ないじゃない？ 礼奈、あたしの一番大切な友達なのよ？

あたしがそう言おうとした瞬間、下から急ブレーキの甲高い音がして……

あたし……

……目を閉じちゃったの。

「美星さん。大丈夫ですよ」

安心させてくれるヴェストルの声に誘われて、あたし、ゆっくりと目を開けてた。軽くそつと手を広げた礼奈のすぐ直前で、車が止まってる……

……良かった……何も無くて、本当に良かった……

「礼奈……もう！ 脅かさないでよ……」

あたし、道路に降りるとすぐ、そう言っただけで礼奈に抱き着いたの。

温かいのよ……《本当》に良かった……生きていてくれて……

「ごめんなさい、ミホ……でも、仕方無かったの。わたし、この人には自殺してもらいたくなかったから……」

「……え？」

自殺？

きよとんとして礼奈を見上げた時、突然、車のドアが開いてお爺さんが一人出てきたの。あたし、びっくりして…だって、もっと若くて無鉄砲な人だと思ってたのに。どう見ても、とつても人の好きさそうなお爺さんなのよ。

「やはり、嬢ちゃんか…又、聞いてもらえんじやるか…」

「……はい」

又、つて…前にも、会ったの？

…そうみたい。礼奈、優しくお爺さんの肩を抱いて、近くの堤防に座らせてる。あたしとヴェストルも、黙ってその横に腰を下ろしてた。

「…近頃、又、『夢』を見るんじやよ……あの、少女の…」

……？ お爺さん…震えてる。

「もう、何十年も前の事じやのに…なあ、嬢ちゃんや。言い訳にしか聞こえんかも知れんが…：僕は、本当に国の繁栄を望んどったんじや…：こうする事が正義じやと…：そう思ったからこそ、僕は兵として志願したんじやよ…」

……え？

「信じてもらえんかも知れん…：じやが、確かに南へ向かうまでは、僕には愛国心があったんじやよ…：国が望むんじやから、行かねばならん…：それが正義じやと…：僕は、そう信じとったんじや…」

…嬢ちゃんや…：そりゃ酷いもんじやった…：戦争はの、戦っている間よりも…：待つ間の方が人の心を蝕んでいくんじや…

人ではなく、国だけを愛した僕は…：抵抗できない島の人々を殺して…：まだ、幼い…：嬢ちゃんよりも幼い子を…：皆で…：何人も弄んだりしたんじやよ…」

あたし…：あたし、体が震えてた…

その時、そつと、ヴェストルの手が肩を抱いてくれたの…：あたし、そんなヴェストルに寄り掛かって…：顔を伏せてた…

「僕は、否定はせん…：僕は鬼になつたんじや…」

…糧食が尽きてくると…蛮行はますます酷くなって…そこへな、敵も攻めてくるんじや…儂等はばらばらになって、森の奥に逃げ込むしかなかつたんじやよ…

若い体を、木の実だけで維持する事は出来んかった…儂等は、多くの血を流しながらも…まだ、…そう、まだ生きていたかつたんじや…あれから、何度、後悔した事か…あの時、死んでいればよかつたんじやよ…」

「…いいえ。そんな事はありません」

激しく体を震わせ始めたお爺さんにね…礼奈、そつと囁いてる…「じやが…見上げてくるんじやよ…下半身を虫に喰われた仲間が…青白い顔で…！」

礼奈、興奮して叫んでるお爺さんの手を、優しく両手で包み込んでた…すぐに、お爺さん…柔らかな目を取り戻して…落ち着いてる…でも…でもね、あたしは…

「…嬢ちゃん、信じられんかも知れん…儂は、何でもいいから『肉』が欲しかつたんじや…虫に喰わせるなど…勿体無い……そう思うたんじやよ…」

何人かで切り分けて…血を抜いてな…今でも、思い出すんじや…死んだ仲間が夢で笑うんじやよ……うまかつただろつ、つてな！…あたし、あたし……もう、耐えられなくて…

ヴェストルに抱き着いて、力一杯、泣き出してた…

…でも、でもね……聞かなくちゃいけないの…

これ…『現実』だつたんだもん…

「…そうじや。その時の儂には…それは『肉』でしかなかつたんじや…」

「…人間も、獣と何ら変わりませんからね。人間は理性を持つが故に自らを高等な生物と信じ、この地球上では頂点の存在だと思ってるようですが…人間など、進化の過程の途上で生れた存在の一つでしかありません。最終目的ではないんですよ…他の生物と何が違うと言うんでしょうか」

ヴェストルの静かな声がする…ヴェストル…

…あたしも『人間』なのよ…

指先にきゅつと力を込めたら…ヴェストル、そつと耳元で囁いてくれた。

「僕にとつては、人間も神もありません。僕は『美星さん』と言う《個》が『好き』なんですよ…」

ヴェストル…

…あたし、泣きながら…精一杯の力でしがみついていた…

「そうじゃ…儂等は野獣じゃ…」

…嬢ちゃん…あの村に入った時…儂等は、もう、弾も残り少なかったのに…それでも、村の食料を奪おうととつたんじゃ…

…酷いもんじゃった…儂は、それが男であれ女であれ…構わずに銃を乱射しとつた…霞んだ目で、無駄弾を…いや、生き残らせる為の弾を撃たんように…骨ばかりになった体で、必死になって反動を抑えながら…人を殺しとつたんじゃ…自分一人の為に、何十人もの村人を血で赤く染めたんじゃよ…

嬢ちゃんや…その時にな…儂は、一人の少女を撃つたんじゃ…

…弾は、右足を引き千切つただけで…嬢ちゃん、その時、儂は無駄な弾を撃つてしまったと…そう思つて舌打ちしたんじゃよ…

その子は…な…茫然としたまま…不意に消えた右足を見つめとつた…太股から下が乱暴に裂かれとつて…どんどん、赤い血が噴き出しとるんじゃよ…

…それを…その子は、泣き叫びもせず、黙つて見とるんじゃ…見えるんじゃ…漆黒の闇の中に、あの子がずつと動かず座つとるのが…溢れ出す真っ赤な血が闇を押し退けて…その時…その時にな…」

急に大きく震え出したお爺さんの声に、あたし、驚いて振り返つてた。

「…顔を上げるんじゃよ…どうして、自分がこんな目に遭つたのか分からない…そんな目で…そんな目で見てくるんじゃよ…！」



そうじゃ！ 黒い澄んだ瞳が、じつと見つめとるんじゃよ！ 涙も無しに、光る目で！」

お爺さん、絶叫しながら立ち上がってる。あたし、びっくりしてその瞬間、お爺さん…思い切り腕を振り上げて、堤防のコンクリートに打ち付けてるじゃない！

「止めて！」

腕が折れちゃうくらい… 異様な雰囲気、何度も何度も…！

…その時ね、礼奈がお爺さんの前にさっと手を差し伸べたの。お爺さん、驚いた顔で…黙って礼奈を見つめてた。

「…落ち着かれましたか？」

お爺さん、急に力を失って…又、腰を下ろして頭を抱え込んでた

……

「…嬢ちゃん…恐ろしいんじゃ…忘れられんのじゃよ。…それくらい、清純な瞳じゃった…あの子はな、仲間の死体が話し掛けてきたような…『夢』なんかじゃない…『現実』に、儂をそんな目で見てきたんじゃよ……」

儂には…それ以上、銃を撃つ事が出来なかった…ただ恐くて…

大声で叫びながら走り続けたんじゃ…

これが…国の為に…国の繁栄の為に…と…儂が志願した事の『現実』だったんじゃ…

国家に依って戦場に向かい…儂等、下っ端の兵隊達は、逆らえん流れの中で虐殺を行った…儂等も被害者なんじゃと…儂には、とても言えん……

…逆らえん潮流の中でも…麻痺した心でも、確かに人を殺したつたのは、紛れも無い『事実』なんじゃからな…」

…あたし…あたしね。…何も言えなかつたのよ…何も…

ただ…ただ、震えてた…恐くて…苦しくて…

「…お爺さん。確かに、今のお爺さんの《生》は、その殺された少女や他の人達の上にあります…ですが、その時の行為は…『過去』の中のお爺さんが行った事なんですよ…」

礼奈、静かに瞳を閉じて話してる…

「時は戻ってくれませんか。経過や原因が何であれ…お爺さんはその過去に依って、多くの方々の《死》の上に《生》を営む事になったのです…その行為を悔やまれるのでしたら、お爺さん…これからも、一日一日を大事に暮らして下さい…お爺さんには、多くに支えられた…その生きていた証を守らなければならない義務があります。お爺さんが過去を恐れ、『今』に適応出来ずに自殺を図れば……お爺さん。その少女の生命は、全くの無駄になってしまいます…」

…多分ね、お爺さん。そんな礼奈の言葉、半分も聞いてなかったと思うの。でも、でもね…そっと腕に触れてる細い指先からは、きつと…もつと沢山の想いが伝わったと思う。

…だから、お爺さん……すっかり落ち着いて帰っていったのよ。

暫くしてね…ヴェストル、冷たく抑揚の無い声で礼奈に話し掛けたの。

「彼がした事は、見えない力に翻弄されたとは言え、正義ではありません。礼奈さんは、よくあのような事が言えますね。彼が自殺をしたとしても、それは《業》の結果としては当然だと思えますが」

そんな…！

「…強い流れの中では、正義もその姿を変える事があります…わたしは、あの人に死んでもらいたくなかったんです」

静かな礼奈の言葉に、ヴェストル、突き刺さるような声で言ったのよ…

「…自らの安寧の為の…偽善ですか」

そんな…そんな……！

「…そうかも知れませんが。わたしも又、『人間』ですから…」

あたし、もう我慢出来なくて…泣きながら叫んだ。

「酷いよ、ヴェストル！ 礼奈、絶対に自分の為だけに何かをしたりしないんだから！ どうして、どうしていけないの？ 礼奈の言った通りじゃない！」

「美星さん……」

優しく抱き寄せてくれる……あたし……

「あたし……時々、ヴェストルの事が分かんない……でも、でもね……分かりたいのよ……」

「……美星さん。彼が自らの為だけに多くの命を奪った事は、僕から見れば《悪業》です。礼奈さんは、それを打ち消そうとしていましたが……そのような試みを望む事も又、欲望であり《業》なんですよ。美星さん……《本当》に大切な事は、彼の過去や行為から何かを取り出して、生じた《業》を打ち消す事ではなく……《悪業》を生じさせない事なんです」

でも……

「でもね……？ 礼奈……『善い事』をしようとして、あんな事を言ってるんじゃないのよ……ただ、黙ってられなくて……」

「……神々にも同じような事はあります。彼等も又、更なる上位へと移る存在なのですから……」

ですが、美星さん。僕には、恐らく美星さんよりも広く、深い所までを観る事が出来ます。ですから、自ずから《業》への関わり方も異なりますし……生み出す《縁》も又、違うものを志すんですよ」

そんな事、分かっている……でも、でもね、あたしは……

『神』と『人間』の違いじゃなくて……『ヴェストル』を知りたいのよ……

「ごめんなさい、ミホ……折角、誘ってもらったのに……わたしのせい……」

礼奈のひどく沈んだ言葉に、あたし、慌てて顔を上げてた。

「うっん！ 礼奈は悪くないわ。……ごめんね……今度は、もっときちんと誘うからね」

「ありがとう……」

「……戻りましょうか」

ヴェストル、そう言って優しく指を取ってくれる。どんなに嫌いになる事を言っても……あたし、やっぱり……

…ヴェストルの事が『好き』なのよ。

礼奈とも別れて、部屋に戻った時…ヴェストルね、ベッドの上のあたしにそつと尋ねてきたの。

「美星さん…僕も、もつと美星さんの事を分かりたいと思ってます…ですから、これからも…僕がこの部屋に来て構わないですよ…」

あたし、そんなヴェストルの言葉にとつても驚いてた。

「勿論じゃない！ そんな事、言わないでよ」

「ですが…若しも僕の事を知って『嫌い』になられた時には……そう言つて下さい。ただ…それでも覚えていてくれませんか。僕が、今と同じく…美星さんを『好き』なまま、遠くから見守り続けている事を…」

「ちよつと待つてよ！ どうして？ どうしてそんな事を言うの！」

あたし…また泣きじゃくつてた…

「あたし、こんなに『好き』なのに…もつと好きになりたいから、ヴェストルの事、分かりたいんじゃない！ 嫌いになんてならないわよ！」

「美星さん…」

「もつ、絶対にそんな事言わないで！ 今度そんな事言つたら、あたし、ヴェストルを嫌いになるから！ …だから、お願い。もう言わないでよ？」

「…はい」

ヴェストルがそんなに気にしてたなんて、あたし、知らなくて…  
「…ごめんなさい。あたしがいけなかったのよね……あたし、いつも怒つてばかりで…でも、でもね？ …あたし、ヴェストルの事が《本当》に『好き』だから…だから……」

「美星さん…」

ヴェストル…そつと抱いて、止めさせてくれたのよ…

素敵な姿が窓から消えてく…

ヴェストル…あたし、絶対、ヴェストルを嫌いにならない  
んだから！

…そうよ。どんなにヴェストルの嫌な所が分かってても、絶対に…  
ね。

6 木曜の齟齬 おわり

異なる姿に 生を享け

輝き違えた 碧葉群

その一枚が 黄金に染まる…

## 7 日曜の佛壽

人を殺すなんて…簡単な事だよ

とっても綺麗な夕焼け空なの…

今年だね、大好きな金星もずっと見えてるし…これで、頭痛さえ無かったらいいんだけど…ね。

まだ紅葉の季節には少し早いけど、すぐその公園に見えてるイチヨウやケヤキの葉先は、それでもほんのりと黄色くなってる。残暑よりも涼しさの方が身に染みるようになってきたし…もうそろそろ、秋本番なのよ。礼奈、頑張ってるかな…

あのね、礼奈、公立の高校を目指してるの。だから、まだちょっと時間はあるんだけど…最近ね、とっても疲れてる気がする。だけど、あたし…何も出来なくて…

でも、でもね？ 心配だけはかけないようにって、あたし、頑張ってるのよ。礼奈、律儀に通ってきてくれるんだもん。その間くらいは楽しめるように、ね。出来ない事を悩むなんてらしくないし、だったら出来る範囲で励ましてあげたいのよ。

「ですが、無理はいけませんよ。美星さん」

小さな、丸顔のヴェストルが顔を覗かせてる。その表情はにこやかなんだけど、藍色の深い瞳はとっても真面目にあたしの事を心配してくれてた。

「うん！ ありがとう、ヴェストル。でも、でもね？ 頭痛や吐き気がどんなに辛かったって、礼奈やヴェストルの事を考えたら…あたし、我慢出来るのよ」

そう、ちっとも無理なんてしてないわ。ほら、素敵な笑顔を見たら嫌な気分なんて消えるんだもん。ときどきして…とっても『幸せ』

になれるのよ。

ヴェストル、そつと…でも、しっかりと指先を取ってくれる。

…とつても、温かいんだもん。

「…ありがとう」

「はい？」

あたし、真っ赤になって囁いてた。

「ありがとう…いつも、来てくれて。ありがとう…こんなに傍に居てくれて…」

「…はい」

当然ですよ、なんて、ヴェストル、もう言わないの。そんな事、二人共よく分かっているんだもんね。

そつと、引き寄せてくれる…

…あたし、心の中で続けてた…

ありがとう…あたしを『好き』になつてくれて…

ペガサスの四角形が昇り始めてる。いつもいつも見上げてるのに、その度に何処かが違っているの。背景の暗闇だって藍色から群青色、もつと蒼いのもで本当に沢山あるのよ。

「寒くはありませんか？」

「うん」

でも…でもね。もう降りた方がいいみたい。だって、本当に綺麗なんだもん。恐いくらい…こんなの、あたしが見ててもいいのかなつて、そう思えてくるのよ。

淡く霞んだ青闇へと沈み込んでく。この星夜の町も、楽しい事ばかりじゃないのよね…時々、あたしの《縁》で、本来居るはずの無い人が紛れ込んでるんだもんね。

きつと…あたし、この町には住めないのよ。…少し、寂しいかな。

「あつ…」

コンビニエンスストアの前で、誰かが喧嘩してる。あたしより、ちよつと幼いくらいの男の子が、一人で二人を相手に怒鳴ってるじ

やない。

あたし、止めさせるつもりで前に出たんだけど…ヴェストル、しっかりあたしの腕を掴んで放さなかったのよ。

「美星さん、あれは幻ですよ」

「え？」

あたし、確かめるようにヴェストルを振り返ってた。その時、すぐ横から急に別の声が聞こえたの。

「そうなんだ。かむはた綺さん」

「…真哉君！」

あたし、本当にびつくりしてた。だってね、あたしが中学校に通えてた頃、真哉君、女の子に一番人気があったのよ。あたしだって他の皆と一緒に憧れてたんだもん。勉強は良く出来たし、運動だって何でも出来るの。格好良いし、優しいし…ちよっと前に出たがるのが欠点なんだけど、そんなの些細な事だもんね。本当に、理想の恋人そのものって感じ。

でも…でも、ね？ あたし…前みたいに、どきどきしないのよ。

……ヴェストルみたいには…ね。

「ほら、見てごらん」

真哉君が指差す方向に目を向けたら、さっきの喧嘩に…え？ 真哉君が近付いてく？

「そうなんだ。あれは僕の『幻』なんだ…いや、『現実』だったんだよ」

え？ えええ？

混乱してるあたしに、ヴェストル、そつと言ったの。

「美星さん。あの映像を見ていれば分かりますよ」

でも…でもね。少し…やっぱり、ヴェストルの声……静かだった…

真哉君、喧嘩を止めようとしてる。落ち着いた、きっぱりした態度で。うっん、ちよっと格好良いな。

あたしね、そんな風に気楽に見てたら…

「…！」



今の…今の、何？ あの男の子が持つてるの…拳銃じゃない！  
真哉君が倒れてく…嘘、嘘よ…！

「うっん、あれが『現実』なんだ。僕は頭に銃弾を受けて即死したんだよ。後の二人も同じ。他にも、アルバイトの店員が無関係なのに重傷を負ったんだ」

淡々と話す真哉君って…じゃ、じゃあ…幽霊なの？

…もう、映像なんて消えてる。あたし、びっくりして何も言えなかった。

「ついさっきの事だったんだ。思わず仲裁に入ったんだけど…まさか、兄貴と同じように…誰かの為になろうとして、殺されるとは思わなかったよ」

…そうなの。真哉君のお兄さんね、強盗を追いかけて…逆に、ナイフで刺し殺されたのよ…

「勇敢なだけじゃ無理なんだね…」

「…この社会は、未だ不完全なものですからね」

あたし…ヴェストルの言葉に、反対出来なかった。だって…だってそうじゃない？ どうして、他人の為になろうとして…どうして、殺されなくちゃいけないの！

「真哉君…」

あたし、あたし…

…でも、でもね…何も言えなかったの…

真哉君、そんなあたしに笑い掛けてくれた。

「御免ね、こんな映像を見せてしまって。だけど、誰かに知ってもらいたかったんだ」

「…復讐、するつもりなの？」

あたし…ルミしんやくんの弟の事、思い出してた…

少し、黙ってる。ちよつと恐い時間が流れて…真哉君、静かに言ったの。

「…いや、出来ないからね」

え？

「続きは見ない方がいいですよ、美星さん」

ヴェストルの優しい言葉に、真哉君も頷いてた。

「ちよつと、酷いからね」

だから、映像が始まった時…二人共、あたしを庇ってくれたの。

「あの小学生は、このコンビニにたむろしているグループの一員だったんだ。もう一方の二人は近くに集まっている別のグループで、どうも奴等は互いに対立してたみたいだね。」

どうやったかは知らないんだけど、奴は拳銃を手に入れると、最初から使うつもりで持ってたみたいなんだ。だから、必然的にさっきの出来事は起こってしまったって…僕や店員が巻き込まれたんだよ。

あの後、奴は仲間に匿われてたんだ。だけど、僕が現状を把握して復讐を決心するよりも先に、警察が動いていてくれてね。勿論、すぐに見当はつくから、奴が所属していたグループは、どんどん追い詰められて…

結局、原因である小学生を処刑する事になったんだよ」

「え？」

処刑って…

「そう。線路の高架下で、電車が通過した時にその小学生は自分の拳銃で射殺されたんだよ。銃声も聞こえない、奴等にとっては一番妥当だと思える方法だったんだらうね」

そんな…！ まだ、小学生なのに…どうして、どうしてそんなに簡単に命を奪えるの？ 失うのは簡単でも、同じ命は二度と創れないの…！

「彼等にとつて、拳銃は頼りがいのある『友人』なのでしょう。力強く、逆らう事の無い『仲間』…そのような物に頼る事しか出来ない、自らの心の貧しさには気付いてもいないのでしょうかね」

そんな…

「そうだらうね」

真哉君、静かに呟いてる…

「綺さん…僕は、これからどうしたらいいんだらう。憎しみや腑甲

斐無さを感じていても、それを発するところはもう無いんだ…何だか、心が晴れないんだよ」

真哉君……

でも…でもね？ あたしには、遠回しになんて言えなかった…

「…この世界に残る《意味》が無くなったのなら…次の『歴史』を進んでもいいと思うの。あたし、こんな事しか言えないけど……きつとね、真哉君や真哉君のお兄さんの行為って…大事なんだと思う。ごめんね、あたし、こんな他人事でしか言えないんだけど…でも、でもね？ 次の『時間』も…その行為を促した気持ち、絶対忘れて欲しくないのよ……」

うまく話せないけど、あたし、必死に分かってもらおうとしてた。そうしたら、真哉君、明るく笑ってくれたの。

「…有り難う。僕にも、本当は分かっているんだ。ただ、誰かにそう言ってもらいたかったんだよ…」

……うん。

真哉君がしてくれたような行為が続いてくから…『人間』も成長出来るのよね…？

青闇にぼんやりと滲んで消えてく…真哉君を見送って、あたし、ヴェストルを見上げたの。

「…そうですね」

きつと…ね？ ヴェストル、こんなあたし達の世界にうんざりしていると思う。でも、でもね…そんな世界の儘で、理解しようとしてくれるのよ。

「そろそろ、公園の方に戻りましょうか」

「うん…」

あたし、その腕に寄り掛かった。

……どんだん、隙間が塞がってくね…ヴェストル……

夏の星座が、西の地平に傾いてる。もうすっかり、主役は微かな星達になってるの。ちょっと寂しいくらい、明るい星が無いんだけ

ど…

「あっ！」

まるで、蛭みたい。とつても柔らかな光が北の空を流れてく。

「ジャコビニ流星群…」

あたし、笑いながらヴェストルを見上げてた。爽やかな風の中で、とつても優しい笑顔が恥ずかしそうに揺らいでる。本当に、素敵な笑顔……

どきどきしながら…あたし、次々と流れる淡い光を見つめてた。

「やあん！ 来ないでよお！」

急に、小さな女の子の声が届いてきたんだもん。あたし、びつくりして慌てて周りを見回してた。

首の後ろで髪を結んだ可愛い子が、すぐに公園の中に駆け込んでくる。…一体、どうしたのかな？

あたしとヴェストルが立ち上がりかけた時、その八歳くらいの女の子の後ろから、大柄の男も走ってきたの。砂場の前で追いついて、女の子の腕を掴んでる。

…え？ あの子、吊り上げられてるじゃない！

「放してえ！ 珈娜枝、本当に知らないんだもおん」

「そんなに怪我をしたいのか？」

……！ あれ、拳銃…

あたしね、真哉君の事思い出して…

……でも、でもね。あたし、やっぱり黙ってなんて見てられなかった。

「放してあげなさいよ！」

あたし、駆け寄って拳銃を取り上げようとしたの。少し男の注意が逸れた隙に、その女の子、さっさと逃げ出してる。

「くそっ！」

「お姉ちゃん」

珈娜枝ちゃんは、すぐにあたしの後ろに隠れてた。だから、当然拳銃はあたしの方に向けられて…

でも…でもね。あたし、逃げたりしなかったのよ。

「近頃は、夢魔も機械を操るんですね」

急にヴェストルが横に来て、男の拳銃を押さえてくれる。…え？  
夢魔って？

「貴様…？」

ヴェストルの調った指の間で、突然拳銃が金色の粉に変わってる。  
…どどん、綺麗な星が崩れ落ちてく……

「あは。お兄ちゃん…そうなんだあ」

何がそうなのか分かんないけど…珈娜枝ちゃん、あたしの後ろで  
嬉しそうにはしゃいでた。

「あなたがこの世界で何をしようと、僕には関係ありませんが…美  
星さんを傷付ける事は許しませんよ」

「…何故、貴様のような存在がここに居る」  
「関係の無い事です」

一瞬だけ、とつても深い沈黙が横たわったの。でも、でもね…急  
に、その人、大きく笑い出してた。やだ…何か怖いよ…

「だが、邪魔をしない事だ。この世界で我等と争えば、困るのは貴  
様の方だからな」

「そうかも知れませんが…」

…え？ どういう事！

「…ですが、美星さんがあの天狐てんこを守りたいと思う限り、僕は自分  
がどうなるかとそれに従いますよ」

天狐？ え？ ちょっと、ヴェストル！ 一体、どうなるって言  
うのよ？

「大丈夫ですよ、美星さん」

混乱してるあたしに、ヴェストル、温かく微笑んでくれたの…思  
わず、あたし、安心しちゃった。

その時、突然、男の首が伸び始めたの。あたし、もうびっくりし  
て…どうなってるのか、全然分かんなくて……

「わあ。蛇さんみたあい」

…うん、とつても気持ち悪いよ。首から下が、真っ赤な鱗に覆われて…背鱗の付いた蛇みたいになつてくのよ。

「美星さん。離れないで下さい…」

ヴェストル、しっかりと抱いてくれる。珈娜枝ちゃんも、あたしの足にしがみついていた。

「どうする？ 争えば、この町は…」

怖い…不気味に笑ってるの、人間の顔のままなのよ。蛇の胴体も、あたしだけじゃ抱えられないくらい太くなって…

あたし、ヴェストルと逢つてから、沢山のものを見てきたけど…これって、本当に本当なの？ あたし、もう分かんない…

その時ね、ヴェストル、軽く右手を上げたの。刹那、今迄だつてぼんやりと霞んでた大気が、もつとあやふやに薄れてく。

「しつこいですよ、蝕陰。争いを恐れているのは、あなたの方ですよ」

ヴェストル、静かに…少しの抑揚も無く告げてる。

「凄いいねえ。こんな結界、琳瑯お姉さまだつて創れないよあ？」

…どうして、この子はこんなに明るく出来るのかな。

「黙れ！」

蛇が、蝕陰が叫んで…あたし、その咆哮で吹き飛ばされそうになつてた。うん、本当に体が浮き上がったのよ！

「…自らの『力』の増長を望む時には、妖夢界の住人でもそこまで必死になるんですね」

ヴェストルがそう呟いた瞬間、あたし達の周りだけ突風が収まったの。公園の木は大きく靡いてるのに…

「当然だ、それが我等の《本質》だからな！」

蝕陰、そう叫んで急に目を閉じてる。…え？ あたし達を包んでる闇が、どんどんその勢いを増してる…？ やだ、真っ暗になつちやうじゃない！

その時、ヴェストルを中心に、黄金色の薄い球体があたしや珈娜枝ちゃんを覆ってくれたの。周りはすっかり暗闇が…うん、

もつと深い、ただの『黒』が一面を満たしてるのに、この球の中だけにはつきり物が見えてるのよ。

「蛇さんも見えないねえ」

きよとんとした愛らしい顔で、珈娜枝ちゃんが笑い掛けてくる。

でも…でもね？ あたし、とてもそれに応える余裕なんて無かったの。分かんない事ばかり、立て続けに起こるんだもん。

…え？ ……ヴェストル？

あたし、しっかりとヴェストルの体を抱いてるのに…急に、そこには何も無いみたいに思えたの。慌てて見上げたんだけど…ちゃんと、あたしには瞳を閉じたヴェストルが見えてるのよ。でも…でもね？ …『絵』を抱き締めてるみたいで…やだ、怖いよ…ヴェストル、本当にここに居るの？

…あたし、もつと力を込めて抱き着いてた。その時ね、温かな指先が頬にそつと触れてくれたの。あたしの方には向いてくれないけど…あたしの傍には居てくれてるのよ…

あたし…安心して《全て》を任せてた。

「…この世界へ顕現する為、『肉体』に閉じ籠もるとは呆れたものだ。その体、粉々にしてくれる！」

突然、頭の上から、声が物凄い勢いでぶつかってきたの。あたし、思わず悲鳴を上げて顔を伏せてた。

キシツ…

…え？ …やだ！ 球体を、無数の雪片が貫こうとしてる？

「肉体に制限されているのは確かですが、僕を甘くみでは困りますね…」

ヴェストルが静かにそう言って…ゆっくりと目を開けてた。落ちて着いた、普段と変わらない藍色の瞳…

でも、でもね……何か、遠くに感じるのよ……ううん！ ヴェストル、絶対にあたしの傍を離れないんだから！ そうよ、あたし、信じてるんだからね…

(勿論ですよ、美星さん…)

あたしの胸に届いた声…きつと幻なんかじゃないわ。

「お姉ちゃん！」

「え？」

球体の表面が、とつても強烈な光を放って……珈娜枝ちゃんのびつくりした声と同時にね、あたし、思わず眩しくて目を閉じてたの…え？ どうしたの…ヴェストル？

ヴェストルの腕が…あたしの体から離れてく……！ やだ、どうしたのよ！ ねえ、ヴェストル！

「美星さん…暫くは御逢い出来ないかも知れません…」  
え？

あたし、目が見えない儘…ヴェストルを手探りしてた…

「…ですが、必ず又迎えに行きます。それまで…待っていて下さい」  
「ヴェストル！」

どうしたのよ？ 応えて！ ねえ、お願い！  
ヴェストル……！

「ミホ…ミホ！」

……声が…する……礼、奈…？

「良かった、無事だったのね…」  
湿った声……抱き着いて…

「…ミホ？ 大丈夫？」  
あたし……

目は…開いて、た……いつもと同じ…星夜の、町…

…でも、…でも…ね……そこに、居ないのよ…  
……ヴェストルが…

死んじゃった…ううん！ そんな事、無い！ …絶対に、そんな事無いんだから…！

…無いのよ、そんな事……アリエナイ…  
アツテホシクナイヨ……

「お兄ちゃん、凄いいねえ。あの蝕陰をやっつけるんだもん」



焦点も合わない先で…楽しそうに…

お願い…！ 言わないで…！ あたしの為に…あたしが…  
…でも、でもね…？ 見過ごすなんて、出来なかつたのよ…！

「ミホ…大丈夫よ」

ミタクナイ… キタクナイ…

…でも…でもね… 礼奈の声、あたしをそつと包み込んでくるの…

「ヴェストルさんは、ミホと逢う為に『肉体』を伴う『様相』を選んでいたの…ただ、夢魔を送り返す為には『肉体』に封じた以上の『力』が必要だったから…だから、その『肉体』を犠牲にして…」

…やっぱり、もう… 会えないんじゃない…！

「お姉ちゃん。お兄ちゃんを信じてないのお？」

不思議そうに、珈娜枝ちゃんが見上げてる… あたし、急にはつきりした意識で…

「信じてるのよ！ 信じてる…でも…」

ヴェストルが消えて…耐えられるはずじゃないじゃない…！

…体が、震えるのよ…やだ…

「よく聞いて…ミホ！」

礼奈、あたしの肩を掴んで…珍しく、強い口調になってる…とつても真剣な声…

「ヴェストルさんは、消えてなんていないの…消えたのは『様相』の一つであつて、『ヴェストルさん』は今も存在しているのよ。でもね、新しい『肉体』を持つ事は、それ程簡単な事ではないわ。だから、信じて待つ…石になつたとしても、待ち続けるのよ…」

「礼奈…」

あたし… 抱き着いて、思い切り声を上げて泣いてた…

「きつと、すぐに来てくれるよお」

…とつても、明るい言葉…

あたし…あたし…

「…そうよね…ごめんね、礼奈。でも…でもね…あたし、待てるかどうか、分かんない…」

こんなに『好き』だから…もう、すぐにも逢いたいから…

「ううん、ミホは待てるわ。でも…若しも耐えられなくなったら、わたしに電話して…ヴェストルさん程ではないけど、きつと『何か』は出来ると思うから…」

「…ありがとう」

あたし…涙で濡れてたけど……

…につこり笑えたのよ…

「あは。良かったあ。珈娜枝ね、もうお姉ちゃん、笑ってくれないのかと思った。だってえ、珈娜枝のせいなんだもんねえ」

「珈娜枝ちゃんが悪くないわ…あたしのせいなのよ」

本当に可愛い笑顔…あたし、珈娜枝ちゃんを思い切り抱き締めてた。

「ううん、蝕陰だけが悪いのよ…」

「うん、うん。穢れた夢魔が一番悪いんだもんねえ」

礼奈の言葉に、珈娜枝ちゃん、そう言って笑ってる。

その時ね、急に後ろから静かな女の子の声が聞こえてきたの。

「いいえ、珈娜枝も悪いのよ」

「琳瑩お姉さま！」

青闇の中に、あたしくらいの歳の子が浮かび上がってくる。とっでもたおやかな雰囲気…穏やかな気品が漂ってるの。

珈娜枝ちゃん、不意に大人しくなって、その子の淡い桃色の着物に隠れてた。

「人間の方々に迷惑をかけるなんて！」

「だってえ〜」

強い言葉に、珈娜枝ちゃん、心からしゅんとしてる。

そんな珈娜枝ちゃんからすぐに視線を外して、琳瑩さん、次にはあたしに向かって頭を下げてきたの。

「本当に、申し訳ありません。妹の為に、こんな事になってしまっ  
て…」

あたし…あたしね。落ち着いて微笑む事が出来たのよ……

「ううん。ヴェストルは消えたりしてないんだもん。きっと、いつか戻ってきてくれる…あたし、待てないかも知れないけど…でも、でもね。信じてるのよ…」

「…有り難う御座います」

又、深く頭を下げてくるの。あたし、びっくりして…

「やだ、そんな事しないでよ。あたしなんて、何もしてないんだから」

慌ててるあたしに、綺麗な微笑を浮かべてくれる。礼奈とは、また違う綺麗さなの。…何処か、冷たい…ううん、不思議なところがあるのよ。

珈娜枝ちゃんもそうなんだけど…金色の瞳のせいかな？

「もうそろそろ、珈娜枝ちゃんを狐狗苑ここうえんに戻した方がいいんじゃないかしら…」

「私は戻ってもらいたいんですが…」

礼奈の心配する言葉に、琳瑩さん、困った顔してる。…あれ？

礼奈、珈娜枝ちゃんや琳瑩さんを知ってるの？

「珈娜枝、絶対戻らないんだからあ！ もっとお、色んな事したいんだもん」

憤然とした口調が可愛くて…琳瑩さんも、珈娜枝ちゃんには厳しくなれないみたい。

「でも…危険過ぎるわ」

「大丈夫！ 琳瑩お姉さま、守成しゅせいなんだもん。それに、将お兄しやうちゃんも守ってくれるもんねえ」

小さな指先が遠くの人影を差して…あつ！ あの人…！！

闇の中に佇む男の子……そう…あの子……鬼絞おにじりに憑依された未夏を…

「では、これで失礼します…これ以上ここに居ると、あなた方にも危険が及びますから」

「じゃあね。ばいばあい！」

あつと気付いた時には、もう二人共、すうーっと桃色の霞みに包

まれて消えてたの。あの男の子も、何時の間にか居なくなってる。

「…ミホ、戻りましょう？」

「うん…」

あたし、ヴェストルの事や分かんない事ばかりで…とっても疲れてた。

礼奈、そんなあたしを優しく支えて連れ帰ってくれたのよ。

ヴェストル……

礼奈はね、大丈夫だって言い続けてくれる…でも、でもね。やっぱり不安なのよ…あんな事になって、本当に無事でいてくれるのかな、って……

怪我をして、苦しんでるかも知れないのに…あたし、何も出来ないの……

分かんない事で不安になるなんて、らしくないけど……でも、でもね？ 心配だもん…ヴェストルだから……心配になるのよ……

《本当》に、早く逢いに来て……

…ヴェストル……

7 日曜の怫鬱 おわり

遥かな『過去』を その身に纏い

久遠の『未来』へと 新たを過ぐす

月の煌き 秘めたる風は

静かな波間に 夢路を巡る……

## 8 天王の連理

僕の世界へと通じる道は…《本当》は何処にでも在るんです

…どうして？ どうして…

…ヴェストル…

もう…一月も経つのに…どうして来てくれないのよ…？

…やっぱり…何か、あったの？ あたし…あたし、もう…  
待てないよ…

「グッ…グフッ…」

やだ…又…

…手が…真っ赤に染まってる…

…苦しいのよ！ 頭痛はどんどん酷くなるし…誰かが、あたしの  
頭を鷲掴みにしてるみたいで…気分も悪くて…ずっと、吐き気が  
するの…

ヴェストル…逢いたいよ…助けて…

あたし…あたし…

…若し、若しもこのまま『死』んでしまったら…でも…でもね  
？ …最後にもう一度…逢いたいのよ…！ お願い…早く来て…

…ヴェストル…

…泣きたい…苦しくて…辛くて…

でも…でも…ね。あたしより…ヴェストルの方が苦しんでるの  
かも知れない…そう思ったら…泣けないのよ…痛い…胸の奥  
が…とつても痛くて…泣けないのよ…！

もう、一月も苦しみ続けてるんなら…傍に居てあげたい…何も  
出来ないと思うけど…居てあげたいの……そして…

…あたしの傍にも…居て欲しい…

ヴェストル……

「痛い！」

痛いよ……頭が……潰される！ 痛い……！ もう、やだ……

……ヴェストル……あたし……

……『死』を望んでるかも知れない……

……

今日は……ちょっと落ち着いてるかな……

吐血も朝の一度だけだったし……吐き気も胸元で止まってるもん。

……でも、でもね………苦しいのよ……ヴェストル………

うづん、きつとヴェストルも……あたし、何も……出来ない……の？

ねえ……何があったのよ……！ ねえ……お願い、応えて………やっぱり

……酷い状態になって苦しんでるの……？

……痛いよ………ヴェストルが来てくれなくなって……ずっと………

あたし……このまま、ずっと………ずっと、胸の奥が痛いまま………ず

っと待ってるの……？ ……やだ………耐えられないよ………

石になれるんなら………早くになりたい………

……あたし、ね……枕を抱いて………涙も流さずに泣き続けてた………

やつ！ ……突き上げられるみたいに………頭の中………ずきずきす、る

……痛い、痛い………よ！

……あたし、冷たい汗を全身に掻いて………頭を押さえて身悶えてた………

もう……もう………あたし………もう………耐えられない………

このまま………

……う、うづん！ 負けないんだから………頑張るの………礼奈と、ヴェ

ストルの為に………

でも……でもね………本当に………頑張れる、の………？

……あたし………分かってる………あたし………

……『死』を望んでしまいそうなの………

「……礼奈……」

あたし、午後から模擬試験だって……知ってた……でも、でもね……もう、《本当》に耐えられなかったのよ……！ このままだと、負けてしまいそうで……

「はい、景守ですが」

「穏やかな、優しい声……」

「礼、奈……あたし……」

「ミホ！ どうしたの？」

でも……でもね……それ以上は……声が出なかったの……

「ミホ、待ってて！ すぐに行くから、そのまま待っててよ……」

真剣で……礼奈には珍しい、力強い言葉……

……あたし、虚ろになった目で……微かに頷いてた……

でも、でもね……礼奈……もう……あたし、頑張れないかな……

「……ミホ……」

……え……？ とつても、はつきりした声……

あたしが目を上げる前に……しなやかな指先が額に触れたの……温かくて……『何か』が満ちてくるみたい……

「こんなにも竦れて……どうして、どうして呼んでくれなかったの……」

怒りと、心配と、不安……全部、優しい嗚咽に含まれてる……

……あたし……子供みたいに泣いてた……

「礼奈……」

ぼんやりと……青の入った黒い瞳が見えてくる……

「ミホ……！」

すっかり細くなったあたしを……礼奈、しっかり抱き寄せてくれたの……

「ごめんなさい……わたしが……」

「うっん……」

礼奈の優しい言葉を、あたし、掠れた声で止めさせてた。

「ごめんね……大事な時なのに……どうしても、耐えられなくて……」

負けちゃいそうで……」

「そんな事……」

礼奈、何も言わずに小さく首を振ってる……

「礼奈……お願い……もう少し、このまま……」

あたし……安心して、礼奈に寄り掛かってた。温かな腕の中で、本当に安心して泣き続けたのよ……

「ありがとう、礼奈……」

あたし、すっかり気分が良くなった。不思議なの、たった数分間の事なのに、もう何だつて頑張れそうな気がする。一ヶ月も続いた不安や恐れに、ついさつきまで負けそうだったなんて……全然、思えないくらいなのよ。

「ミホ……ミホがどんな事を言っても……わたし、毎週ここに来る事にするわ……」

「礼奈!」

でも、でもね……礼奈、あたしに何も言わせないのよ。

「もう、決めたの……あんな姿、もう見たくないもの……」

「……ありがとう」

だから……あたし、素直にそう言ってた。

「ねえ、ミホ……ヴェストルさん、まだ来ないの……?」

小さく尋ねる声にね……あたし、黙って頷いたの。気分の悪さが何処かに消えてしまったから……今度は、ヴェストルの事ばかり心配になるのよ。

「そう……」

礼奈、暫く考え込んでから、急にあたしの目を覗き込んだの。

「ミホ……逢いに行ってみる?」

「え?」

あたし、きよとんととして礼奈の顔を見つめてた。とっても真剣な瞳……そんな事、出来るの?

「まだ、試した事は無いの……だから、本当は勧めたくないんだけど



…」

「ううん！ お願い…ヴェストル、きつと困ってるのと思うの…  
あたしには…ね。何も…そう何も出来ない、よく分かってる…  
でも、でもね？ …せめて、傍に居てあげたいの…：ううん、…き  
つと…あたしの方が、ヴェストルに傍に居て欲しいのよ…」

真っ赤になつて、あたし、正直に話してた。

「危険かも知れないわ…」

静かな礼奈の瞳にね、あたし、頭を振って微笑んだの。

「礼奈の事だもん。考えられる危険は、全て防げると思うから…だから、あたしに教えてくれたんでしょ？」

「ミホ…」

礼奈、頷いてくれる。

「じゃあ、横になつて…」

あたし、素直に従つてた。礼奈、本当に色々な事が出来るの…それ  
もこれも、全部…：きつと、あの『樹』から…

あたしも、その『樹』に会つてみたいな…礼奈、この世界で《本  
当》に巡り逢えたらいいね…

そつと、柔らかな指先が額に触れる。低くて滑らかな呟きを聞き  
ながら…あたし、ぼんやりとしてた。

……礼奈…

…すぐに、あたし…意識を失つてたの。

…ここ、何処なのかな…？ 真っ暗じゃない。

あたし、途方に暮れて周りを見回してた。全く、何の音もしない  
のよ。息が出来なくなるくらい、空気が重くて…あたしの心音だけ  
が、不釣合いなくらい大きく響いてる。

「あつ…」

急に、目の前に藪が広がつたの。あたしよりも背の高い草の群れ  
で、すぐそこに狭い裂け目が顔を覗かせてる…道になつてみたい。  
もう、十一月なのに、とっても青々としてて…あたしね、そこから

流れてくる久しく嗅いでなかった強烈な匂いに、思わず噎せてたのよ。でも、でもね？ とつても懐かしい薫り…うつとりしちゃう。

薄く張った白雲の向こうには、夏の太陽がぼんやりと見えてる。その光に淡く縁取られて、青草が誘うように揺れてるのよ。あたしね、その誘いに導かれて、頭を低くしながら中に入ったた。

この道、どんどん狭くなってるみたい。ほら、すぐ目の前の隙間なんて、膝をつかないと通れそうにないじゃない。

正直に言つとね、あたし、とつても不安になってた。あたし、このままここを進んで行ってもいいのかな、って…礼奈が言つてた危険つて、若しかして何かに襲われるような事なんかじゃなくて、こんな所で迷う事なのかも知れないのよ…

そんな事をちらつと思いながら、それでも、あたし、黙つて這い続けてた。

暫くしたら、漸く藪を抜け出す事も出来て…次にはね、あたし、急に森の中に入って立ち尽くしてたの。

とつても大きな木々が左右に並んで…薄暗い闇の中を一本の石畳の道が続いてる。でも…でもね。湿った黒い土の中に、その道、殆ど埋まつてるのよ。凸凹してて、とつても歩き難い感じがする。

…それでもね、あたし、ちゃんと歩き出した。

本当に暗いの。左手のすぐ傍に小さな谷川があるんだけど…水は流れてないのよ。岩ばかりが見えてて、所々に大きな水溜りが出来る。光はね、その上に広がる、幾重にも重なった枝葉を通してしか射してこないし…

枯れ葉が積もってるだけで、下草も無い右手の斜面は、真っ暗。綺麗な花の一つでもあつたらいいのに…ううん、せめて鳥の声や風の音だけでもあつて欲しいのに…本当に何も無いんだもん。

時々、土の中に消えてく石畳を、あたし、転ばないように慎重に、でも必死になつて登つてた。…あつ…！ あたし、足が動いてる…！

…でも、でもね？ それ以上、何も考えられないの。ここでは、

難しい事を考えるなんて出来ないのよ。進み続ける事だけが、あたしに許されてる…そんな気がするのよ。

それにしても…うんざりするくらい、道が続いてる。何処まで行くのかな…ヴェストル、いつもこんなにまで苦労して、あたしに逢いに来てくれてるのかな…

…正直に言つてね、ちよつと不安になつてる。このまま何処にも着かないんじゃないかな…つて…

怖いよ…

「お姉ちゃん、頑張れえ！」

え？…えええ〜！

い、今の…珈娜枝ちゃんの声じゃない？…でも…でもね？

珈娜枝ちゃん…何処に居るのよ。

…やだ、あたし…幻聴まで聞こえるようになったのかな。

そのまま立ち止まつて…あたし、暫くきよるきよるしてた。その時、急に頭の上から大きな羽音が聞こえてきたの。風を切る、ブンツて低い音が圧力と一緒にぶつかってくる。あたし、思わず目を瞑つて身を縮めてた。

「美星様ですね」

「え？」

あたし、びつくりしちゃつて…だつて、そうでしょ？誰も居ないと思つてたのに…鳥さえ居ないと思つてたのに、突然、若い男の人に声を掛けられたんだもん！

目を開けてみたら…とつても背が高く、ちよつと鋭いかな、つて感じの黒い瞳の人がすぐ前に立ってるの。その人、あたしに向かつて跪いてくるんだもん、もう、あたし、慌てちゃつて…

「あ、あの…」

…え？あれ、背中に見えてるの…翼じゃない！

「この道は狐狗苑に属するとは言え、本来ならそこを歩む者に姿など現してはならないのですが…珈娜枝様たつての願いに依り、天狗

である私が遣いとなつて、贈り物を届けに参りました」

…天狗？

うん…でも、でもね？ 赤ら顔じゃないし、鼻だって低いのよ。とつても格好良くて、翼以外は人間そっくりじゃない。

「受け取つて頂けますでしょうか」

「う、うん。勿論よ」

その人、真面目な顔で小さな木の箱を渡してくれたの。中を開けてみたら、可愛いスミレと一緒に、鮮やかに澄んだイロハカエデの緑葉が入ってる。とつても爽やかな贈り物！

「ありがとう！ もう、これで寂しくなんてならないわ」

「そのお言葉に、珈娜枝様も喜んでおられることでしょう。では、私はこれで失礼させて頂きます…」

そう言つた瞬間、その人…じゃない、天狗は風みたいに消えちゃつたの。不意に、又、静かな雰囲気が満ちてくる。

でも、でもね。あたし、とつても元氣になつて歩き出した。

…早く、ヴェストルに逢いに行かなくちゃね！

温かな小箱のせいかな。もう、周りの暗闇がそんなに濃く思えなかつたの。杉の枯れた枝が積み重なる山肌から、すーって上まで視線を向けてく間にね、とつても沢山の緑色が目に入ってくる。黄色から、とつても明るい黄緑…艶のある緑色や、時々覗く白っぽい空の色まで。しかもね、その一つ一つが違う葉形をしてて、重なつた所は一つ分、色を濃くしてるのよ。とつても複雑なんだけど、重たさを感じさせない素敵な彩り…

葉の形なら、珈娜枝ちゃんの贈り物にもあつた小さなイロハカエデが一番ね。色も透き通るような黄緑色で、愛らしいの。すっかり、あたしのお気に入りになつちゃつた。

あつ、倒木が道を塞いでる。大きな幹の左隅にある小さな穴を潜つて…何だか、とつても気持ちのいい冒険をしてるみたい。あたし、子供みたいにわくわくしてる。

…でも、でもね？ 急がなくちゃいけないの。礼奈、無理してる

かも知れないし…ヴェストルだってね、とっても苦しんでるかも知れないのよ。

……胸の奥の痛みだけは…ね。この素敵な贈り物でも、癒せないのよ…

待っててね、ヴェストル。あたし、頑張るからね！

もう、どれくらいの間、歩いてるのかな。相変わらず周りに生き物の気配は無いし、時間を予想出来る存在なんて何も無いのよ。大体、この道に『時間』なんてあるのかな…？

小川の上の石橋も何度か渡ったけど、水はやっぱり流れてないの。同じ様な木に囲まれて、同じ様な凸凹の石畳の道が何処までも続いている。

「きゃっ！」

もう！ 今迄、物音一つしなかったじゃない。どうして、急にドングリが落ちてくるのよ！

バラバラって、風も無いのに、不規則な間隔で小さなドングリが落ちてくる。何だか、あたし…誰かに追い立てられてるみたい。

心持ち、足を早めたんだけど…あれ？ ちよつと明るい所が、枝葉越しに見えてるじゃない。

…やっぱり！ 森の中に、小さいけど開けた場所が見えてるのよ。あたし、あたしね…夢中になって走り出した。何だか、とっても嬉しくて…

あと、もう少し……大きな石の塊に、清らかな斜光がぶつかって…え？ …えええ！

…どうなってるのよ？ …森が…消えちゃったじゃない！

何も、無いの…在るのはね……とつても澄み切った黄金色の光だけ。…でも…でもね？ …それ、太陽の光じゃないみたいなの。

温かくて……やだ…

…あたし、胸元まで真っ赤になってる……この温もり…ヴェストルを思い出すんだもん……あたしに触れてくれる、優しい腕まで感

じてる…

「美星さん…」

……え？ ……ヴェストル？

「ヴェストル！ ヴェストルなの！」

何処？ あたし、見えないよ…！

「…はい」

「何処に居るの？ ヴェストル！」

「ここは、僕の空間ですから…美星さんには、僕を『光』としてしか知覚出来ないんですよ…これも、僕の『様相』の一つなんですけど、だから…あたし……さつきからずっと…ヴェストルに抱いてもらってる気がするのね…」

…あたし、『光』に身を任せて泣き出してた。

「ヴェストル、ずっと来ないんだもん…心配したのよ？ …大丈夫なの？」

「はい…すみません。『肉体』を失う衝撃は、殆ど無かったのですが…あの夢魔との衝突で生じた《縁》の調整に手間取ってしまったんです。調整している間は、物質界と関わってはいけませんから…長い間、御誘い出来なくて、本当にすみませんでした」

「じゃあ…ヴェストルは傷付いてないのね？」

「はい」

良かった…《本当》に良かった…

「…逢いたかったのよ……ずっと、そう思ってた…」

「僕もです…苦しんでいる美星さんを、黙って見ているのは…とても辛かったですよ……僕には、何も出来なくて…」

「うっん…それは、きつと…《本当》に何も出来なかったんだもん…」

そうよ…きつと、ヴェストル…出来る全てをしてくれたと思うもん。

「美星さん…」

黄金色の綺麗な『光』が、前や後ろ…上下左右から、優しくそっ

と抱き締めてくれる…あたし、その圧力を…あたしの《全て》で  
感じ取ってた…

「あっ…」

ヴェストル…

…体の中に…『光』が染み込んでくるみたい…温かな波に洗わ  
れて…

うっん…あたしも…広がってるの…

…どんだん…どんだん散っていく…でも、でもね…『あたし』  
が薄くなってるんじゃないの…消えていこうとしてるんじゃないの  
よ。

『あたし』が…そのままの『あたし』で…

…『虚無』になつてく…

(ヴェストル…)

あたし…あたしの《外》と《中》で…ヴェストルを感じてる…  
…とっても嬉しいのよ…

「美星さん…見えませんか？」

…え？

あたし…『目』が何処にあるのかわかんない…

…でも、でもね？…観えてくるのよ…灰色の森が…

何本も立ち並んでる…その中でね、二本の『樹』だけが…『色』  
を持つてるの…互いに寄り添って…幹を絡ませて…一つの『樹』  
になつてるのよ…

力強い脈動…銀の…流れ…？

あたし…あたし…

「…これ…」

「はい…『郷夢の森』ですよ…」

ヴェストル…あたし…

こんなに近いの…こんなに…

「美星さん…」

『あたし』の《中》から…『ヴェストル』の《中》に『あたし』

が……

……礼奈……あたし……

………《永遠》を感じてたのよ……

「……ミホ！」

……え？ ……えええ〜！

すぐ目の前に、疲れた顔の礼奈が座ってる。そして、その横には……

「ヴェストル！ ヴェストル！」

「はい……美星さん」

格好良い若者の姿で……あたし、抱きついて思い切り泣いてた。

……あれ、全部『夢』だったのかな……

「いいえ……違いますよ」

そつとあたしを離して……ヴェストル……

ねえ、それ……

……木の小箱なの………珈娜枝ちゃんからの贈り物……

「じゃあ……」

ヴェストル、優しい笑顔で頷いてくれる……

「……嬉しい……！」

「……美星さん。僕も、美星さんに来てもらえて嬉しかったんですよ。ですが、あれ以上美星さんが僕の世界に留まれば、今度は礼奈さんの方が危険でしたからね……」

「ヴェストルさん……！」

慌てて、礼奈が止めようとしてる。あたし、何も言えなくて……

……礼奈を力一杯抱き締めてた。

礼奈、ありがとう………《本当》にありがとう………

「ヴェストル、《縁》が生じたってどういふ事なの？」



落ち着いてから、あたし、すぐ傍に座ってるヴェストルに尋ねたの。

「僕は《本来》なら居るはずのない空間で、『様相』としては極めて特異な『肉体』を持って美星さんと御逢いしているんです。それだけでも、僕の影響を受けるあらゆる存在に、絶え間無い『変化』を与えているんですが…あの日は、《本来》なら物質界には存在しない《業》と、僕が居るはずのないこの世界で衝突してしまい、しかも、この『様相』では出せない程の『力』を発してしまっただけです。この時、僕と夢魔に生じた《縁》は、僕の影響を受ける《全て》に悪い変化をもたらしたんですよ」

…あのね、ヴェストル…正直に言っていていい？ あたし、ほとんど分かんないのよ。

礼奈が教えてくれたのは、このあたしの居る世界が物質界だったこと。そして、その物質界とは別に妖夢界って名前の世界があつて、その住人が夢魔って言うんだ、ってことくらいなのよ。彼等は、あたし達人間の望みや欲望が妖夢界で顕現した存在で、何らかの理由で珈娜枝ちゃん達を襲ってるんだ、ってね。

そう言えば、珈娜枝ちゃんは天狐って言う狐らしいの。全然そうは見えないんだけど…しかも、狐の中でも一番『格』が上なんだって。神様と同じくらいの存在で、人に害を与えない種族だそうよ。

…あたし、さつき狐狗苑を通つたの？」

狐狗苑が、珈娜枝ちゃん達の《本来》住んでる世界で…日本だけに『扉』があるんだって。

「そうなの…わたしには、狐狗苑が一番安全な『触媒』に思えたから…」

「触媒？」

「僕の世界に到る『道』は、《本当》は無数に在るんです。ですが、美星さんには直接『扉』を開ける事が出来ませんから、礼奈さんは別の空間を間に置いて『扉』を開けたんですよ」

よく分かんないけど…でも、でもね。とっても真剣にあたしの事

を心配してくれたんだって事だけは分かるの。

あたしね…《本当》に、礼奈と友達で良かったと思う…こんな素敵な友達、絶対、他に居ないもん。

「久し振りに、三人で星夜の町に行きましょうか」

「外はもう真つ暗。『時間』ってどんどん勝手に流れるのね。

「でも、わたしは…」

礼奈…礼奈ね、きつと…あたしに見えてるよりも、もっともつと疲れてるはずなの。

「ヴェストル…」

あたしのせいなんだもん…

「長い間、《気》を使わずにいたようですね。その制御にまで気を配れていないじゃないですか…勉強のしすぎは体に悪いですよ。礼奈さん一人の問題ではないんですから…気を付けて下さい」

「…はい」

ヴェストルがね、ちよつと頭に手を置くだけで、みるみる礼奈の顔色が良くなってくの。あたし、嬉しくて…

「ありがとう、ヴェストル」

思わず、カ一杯抱き締めてた。…本当に、ありがとう…

そんなあたしを優しく離して、そつと微笑みながら指を取ってくれる。どんなに近くなっても…あたし、ときどきしちゃうのよ。『他人』の儘なんだもんね…だから、どんどん『好き』になれるのよね…

「では、行きましょうか」

枯れ木が青闇を背に浮かび上がってる。その枝の間に、大好きな金星と夏の星座達が沈みかかって…

振り返ったら、カシオペアが輝き始めてる…もう、すっかり辺りを包む大気は秋なのよ。

「美星さん、寒くはありませんか？」

「うん…」

大好きな礼奈と…ヴェストルがこんなに傍に居てくれるんだもん。

絶対、寒くなんてならないわ！

そつよ、こんなに傍に居てくれるんだもん…ね。

8 天王の連理 おわり

《真》を抱き 春には歌い

《誠》に抱かれ 夏に戯る

星斗を包み 秋を囁き

夕に包まれ 冬に羽ばたく…

## 9 海王の譴罰

『海』が攫っていったの……きつと……そう、きつと……

うっん……胸元が……重い、重いよお……

……この頃は……ね。起きてるだけで、苦しいから……あたし、よく昼寝をするようになったの……でも、でもね？ それ……全然、健康的な眠りじゃなくて……ずっと『嫌な気分』を感じながら……ただ、瞳を閉じてるだけなのよ。ヴェストルが来てくれるのを待ちながら……ずっと、目を閉じて……眠ろうとしているの……

ヴェストルね、今は曇つても来てくれるのよ。あたしの事を心配してくれて……僕には傍に居るしか出来ませんが……って……そんな事、無いのにな……だって、あたし……ヴェストルの素敵な笑顔を見る度に、とつても気分が良くなるんだもん。

《本当》に……全て、忘れてるのよ……

こつして横になって……瞼の裏にヴェストルを思い浮かべるだけで、頭痛も吐き気も遠のいてく……漆黒の背景に、はつきりした映像じゃないんだけど……ね。……銀色の流れで……でも、でもね？ それが、ヴェストルなんだって……あたし、分かるのよ。これが、『あたし』の《中》のヴェストルなんだ……って……

……一つの心、一つの生命……

(あっ……)

すう……って頭痛が離れてく。一緒に、手足の存在もあやふやになつちやうって……あたし、寝ようとしてるんだな、って……そんな事をぼんやり考えてたら……

……え？

突然、闇に一つの『映像』が映ったの。黒い幕の中に、白く煌く

湖面が見えてきて…純白の服を着た女の人だね、その岸边を前にしやがみ込んでる。

これって…夢なのかな。……でも…でもね？ あたし、意識の隅っここで…まだ吐き気を感じてるのよ。

その時ね、真っ直ぐな黒髪を揺らして…その人、ちょっと腕を伸ばしたの。何かを洗ってるみたい。淡くて黄色い……

(…あつ！ あれ…)

あれ、あたしのお気に入りのパジャマじゃない！

あたし、慌てて口を開こうとして…その時ね、女の人が振り返ったの。

「え？」

…えええ！

だって…だって、そうでしょ？ 中島のお姉ちゃんなんだもん。

八つになるまで、いつも仲良くしてもらって…あたし、一人っ子だったから…《本当》のお姉ちゃんみたいに慕ってたの。確か、その頃…丁度、今のあたしくらいの歳で…

でも、でもね…お姉ちゃん…急に居なくなっちゃったのよ……

あたし、お姉ちゃんを『海』に独り占めされたんだ、って…

「……………」

あたし、声が出ない……お姉ちゃん…どうして…どうして、そんなに悲しそうなの？ どうして…

……あつ！

…あたし、あたし……

………忘れたかった事…全部、思い出してた……

お姉ちゃん……辛かったよね……悔しかったよね……

…お姉ちゃんの気持ち…きっと、あたしには全部は分かんないかも知れない…でも、でもね……こんなに、苦しいの…

…え？ ……違う、の？

お姉ちゃん、静かに首を振ってる。とっっても悲しそうなお顔で、手元にあるあたしのパジャマを見て……

あつ！あたしのパジャマ……真っ赤に染まってる……！  
あたし……あたし……

……痛い、痛いよ……又、頭が……痛い、よ……！

あたし、あたし……必死になって……あたし、叫んで……

（お姉……ちゃん……！）

でも……声に、なら……痛い！痛いよ……

……もう、やだ……

全て……消える……闇に……

……あたし、も……

……次の瞬間、あたし、自分の声にはっと目を覚ましてた。

「きゃっ！」

痛い、よ……頭が、割れる……中から、殴られてるみたい……痛い！

痛いよ……痛い、痛い……

「くっ……」

両手で力一杯挟み込んで……締め付ける……痛い、割れる……本当に割れる……！

……やだ……やだ、痛いよ……痛い……！

……割れて！……もう、頭を割った方が……うっん！

……でも、でもね……あたし、あたし……

「美星さん！」

……温かい腕が……思い切り、抱き締めてくれる……

……あたしね、冷たい汗でびっしょりになりながら……ヴェストルの腕の中で、意識を失いかけてた。

「美星さん……」

優しい言葉が、とっても辛そうに響いてる……あたし、それを感じて……全力で笑おうとしたのよ……

「……ありがとう」

でも……でもね。それで、精一杯だったの……

「ゆっくり休んで下さい。僕は、このままここに居ますから……」

「うん…」

…あたし、安心して……完全に意識を失ったのよ……

目を覚ましたらね……あたし、もうびっくりして……

…ずっと横になった儘だから、すっかり細くなっちゃった両腕にね……青黒い痣が出来たのよ。何度も何度もぶつけたみたいで……  
「思い切り、腕を振り上げていたんですよ……それどころか、美星さん……今度は、頭までぶつけようとしていましたから……思わず、部屋に飛び込んでしまったんです」

あたし……そんな事、してたんだ……

「もう……大丈夫ですか？」

「うん……ありがとう」

あたし、そっと抱き着いてた。

「ヴェストル……あたし、自分が恐いの……もう、負けちゃいそうで……あたし、何をするか分かんない……」

「美星さん……」

優しく、抱き返してくれる……あたしの《全て》を、そっと包み込んでくれるのよ……

「きつと……中島のお姉ちゃんも……」

そう、きつと……あたしが『死』に負けちゃう事を……知ってたの……

……ね？ ヴェストル……

「……」

ヴェストル……辛そうな顔で、何も応えてくれなかった。

あたしね、ヴェストルを苦しめたくなかったから……すぐに顔を下げたのよ。でも、でもね……？ 応えないって事は……

……ね。

でも、でもね？ それでも、あたし……恐くなんてないの……悲しんだりしないのよ……

「美星さん……」

うん、大丈夫。あたし、《本当》に落ち着いて迎えられるんだか

ら…

「…はい」

あたし、にっこり笑ってた。少し恥ずかしそうに、ヴェストルも微笑み返してくれる。そして……

…ね。あたしから…

……キスしてたのよ…

「その方は、本当に美星さんの事を親しく思っておられたんですね。あたしの『夢』の話に、ヴェストル、そう言ってくれたの。」

「うん。あたしも、本当のお姉ちゃんみたいに思ってたもん。あたしが生まれた時から、一緒に沢山遊んでくれたのよ…」

とつても懐かしい……あたし、あの事件を知ってからは…辛すぎて、全部忘れてたのよ…

「あたしより七つ年上でね…すぐ近所に住んだの。母さん同士が親しかったから、いつも遊びに来てくれて……あたしが赤ちゃんだった頃ね、何度も優しく抱いてくれたのよ」

あたし…今でも覚えてる……あれ、まだ二歳にもなってなかったと思うけど…

お姉ちゃんね、あたしを公園まで連れ出してくれたの。一緒にシーソーをしたり、砂場で暴れたりして遊んでたら…急に、雨が降ってきたのよ。お姉ちゃん、あたしが風邪をひいたらいけないからって、両腕に抱き上げてくれてね。全力で家に向かって駆け出していた。その走ってる途中にもね、そつと優しく尋ねてくれて…「怖い？」って…何度も、何度も……温かな声で尋ねてくれるの……

あたしね、恐かったんだけど…お姉ちゃんの写真を見たら、すっかり安心してたのよ…

とつても、懐かしい……胸の奥が熱くなつて…その頃の思い出が、黄金色の波に洗われて次から次へと浮かんでくる…

「…ヴェストル。あたしに綺麗な星を覚えてくれたのも、お姉ちゃんなのよ。もつと他にも、本当に沢山の事を教えてもらったの…本



当に、沢山……

お姉ちゃんが一番『好き』だったのはね…『海』だったの。あたし、歩けるようになったら、すぐに連れて行ってもらったのよ。最初はね、とつても恐くて…大きな音と一緒に、大きな『何か』があたしに近付いて来るんだもん…もう、びっくりして…お姉ちゃんにしがみついていた…」

本当は、とつても穏やかな波だったの。その時にね、お姉ちゃん、笑いながらあたしの頬をちよん！ って突っついたのよ。

「『ミホちゃん、お姉ちゃんも嫌いななの？』 って聞いてくるんだもん。あたし、びっくりして…慌てて首を振った。そしたらね、お姉ちゃん、笑みを深めてこう言ったのよ…『じゃあ、海さんも好きになつてあげなくちゃ。だって、お姉ちゃんも海さんも『一緒』なんだから』 って…」

お姉ちゃん、《本当》に『海』が『好き』だったの。毎月、必ずあたしを連れて行って…あたしを紹介してくれるのよ。寄せてくる波に足を浸しながら、お姉ちゃん、いつも『海』と親しげに話してた。あたしも恐なくなつてから…暫くの間なんだけどね、その話に加わつてたような気がして…」

…そうなの、それでね…ちゃんと『海』も答えてくれたような気がするの。

「きつと、『海』もお姉ちゃんが『好き』だったのよ…あたしね、それが分かったからかな…四歳くらいの時に『海』に怒った事があったの。『お海さあん！ お姉ちゃん、ミホのお姉ちゃんなんだからね？ 独り占めしたら、絶対に駄目なんだからね！』 って…お姉ちゃん、必死に叫んでるあたしの横で、真っ赤になるまで笑い転げてた…」

それからね、お姉ちゃん、教えてくれたのよ。『私も、ミホちゃんと同じくらいの時に、『海さん』とお約束した事があるのよ』 って。あたし、びっくりして…『何て？ 何て？』 って、お姉ちゃんを何度も揺さぶつたの。そしたら、お姉ちゃん、こう言ったのよ。

『私、』お海さん』だあい好き！ だから、お利口にしてたら毎月ここに来てあげるね？ って、約束したのよ』って……

……お姉ちゃん、ずっとその約束を守ったのよ……」

あたし……そこで、大きく深呼吸してた……

「お姉ちゃんね、ヴェストル……あたしが八つになるまで居てくれたの……毎日のように追いかけて……ダンボールで草の斜面を一緒に滑り降りて……なのに……なのにね……」

……急に、遊びに来てくれなくなったの……」

「美星さん……」

あたし……両手を握り締めて……精一杯耐えてた。

……でも……でもね……涙が出るのよ……どうしても、溢れてくるの……  
「あたし……あたしね？ ヴェストル……あたし、本気で『海』がお姉ちゃんを独り占めしたんだ、って……そう信じてた……そう信じてた方が良かったのに……！」

肩をそつと抱いてくれる……あたし、きゅって目を瞑って……言葉を押し出していた……

「ただ……ただ、お使いに行ったただけなのに……ただ、いつもと同じように歩いてただけなのに……どうして？ どうして……どうして車になんて轢かれるの？」

ヴェストル……犯人は、ね……ただお姉ちゃんを可愛いと思ったから……ただ、それだけの事で……そんな事で、あたし達の幸せを《全て》打ち砕いたのよ……！ 横に、車をつけようとして……ちよつとぶつかったんだ……って……冗談じゃないわよ！ 車にとつてはちよつとでも、お姉ちゃん、大怪我したのよ？ ……ヴェストル、だから……だからね……犯人、今度は、事故を隠す為に……苦しんでるお姉ちゃんを……もう一度……そうよ、もう一度轢いて殺したのよ……！ ……あたし、あたしね……信じたくなかった……お姉ちゃんが、そんな事されたなんて……酷すぎるよ……あたしの上を、ね……車が踏み潰していく……

耐えられなくて……信じたくなかったのよ……！

…お姉ちゃん、どんなに辛かっただろう…あたしがこんなに苦しんでるんだもん…お姉ちゃんは、もつともつと苦しんだんだ、って…

ヴェストル……だって…だってね？ お姉ちゃん、もう殺されちゃったのに…犯人、死んだお姉ちゃんの体に乱暴したのよ…！…あたし、信じられない……自分の欲望の為だけに、一つの命を奪って…沢山の人を不幸にしながら……犯人、死体まで弄んだのよ…！そんな、欲望に…満足したら……お姉ちゃんを……お姉ちゃんを…ばらばら、に…して……ビニール袋に、入れて……海に、投げ捨てて……！

あたし…あたし……ただ、ただ泣き続けてた……  
「…ヴェストル…前、ルミが言ってたでしょ…？ この国は……犯罪者にだけ有利なんだ……って……あたしにはね…それが《真実》なんだって……そう思えるのよ……ただ…あたし……復讐なんて……そんな事、出来なくて……ただ、忘れようとしたのよ…

…犯人、ね…お姉ちゃんが死んで……何年もしてから捕まったの……でも…でも…ね……殺すつもりだったんだ、って……そんな証拠何処にも無くて……車も処分されて……現場だって、何年も前の痕跡なんて消し去ってたのよ……自供はあつただけど、ね……お姉ちゃんの…遺体、は……既に見付かってた右腕しか無くて……犯人がね……他の人がしたんだ、って……法廷で……ねえ、信じられる…？…ただの轢き逃げなら……時効が成立するんだって……殺す為に轢いたとは、認められなくて……轢きはしたけど、そのまま逃げたんだ、って……そんな言葉、信じられないのに……！ 結局……法律なんて……何も、してくれなかった…

酷すぎるよ……お姉ちゃんやあたし達の…『幸せ』…全部、そうよ《全部》引き裂いて…！ そんな犯人に、誰も…何もしてくれなかったのよ…！

ヴェストル……あたし、あたし…ね……お姉ちゃんの『死』を認めたら……辛くて……生きていけそうになくて……だから……《全て》忘

れる事にしたの……

……楽しかった思い出だって……苦しみを思い出すから……全部、《全部》消しちゃったのよ……あたしには、辛すぎたから……認める事なんて、あたし……出来なかつたのよ……！」

……ヴェストル……分かつてる……これも《現実》だった、って……分かつてるのよ……！でも……でもね？お姉ちゃんの事だけは……駄目なのよ……！

「美星さん……」

「……あたし、ね……弱いから……忘れたかつたの……忘れたままでいたかつたの……」

「……ですが、美星さんは忘れていたわけではないでしょう？……記憶の奥底に、ただ眠らせていただけなんです。それは『忘却』ではありません。しっかりとした『記憶』なんですよ……」

ヴェストル……

……そう、かも知れない……お姉ちゃん……あたしの大事なお姉ちゃんを、忘れる……《本当》の意味で忘れるなんて……そんな事、出来ないのよ……

……あたしの行為……一つ一つに、ね……お姉ちゃんとの思い出が、込められてるんだもん……

「忘れてはいけない事です。ですが、耐えられずに眠らせてしまう事は……『人間』には、仕方無いのかも知れません……」

……ヴェストル……」

ありがとう……

……

「礼奈、ちょっとテレビをつけてもいい？」

「ええ……」

礼奈、きよとんとしてる。ごめんね。でも、でもね……これだけは、見なくちゃいけないのよ……

…ヴェストルに、お姉ちゃんの事を話してから…三日経ってね。  
今日が、お姉ちゃんの命日なんだ、って…あたし、そんな事まで  
忘れてた…

テレビをつけたら…あたしの重い気持ちを踏み躪るみたいに、生  
中継！ って派手な文字が目飛び込んできたの…そして、ね…  
そこに映って…マイクを突きつけられてるのは…

…お姉ちゃんを殺した犯人なのよ…

…時効の成立で…平気な顔して…レポーターと話をしてる…

「ミホ…この人が…」

あたし…力無く頷いてた。…誰も、何もしてくれなかった…レ  
ポーターだって、怪しいとは思っても…深くは問い詰めないのよ…  
…法律上は罪を問えない…問い詰めて、逆に訴えられたら困るもん  
…ね。

結局、マスコミだって、自分を不利にするような『正義』は行わ  
ないのよ…

「最初の自供では、この辺りに遺体が捨てられた事になっていまし  
たね」

どうして…どうして…

…どうして、そんな簡単に言えるのよ…！

「ええ、そう言われたんです。ですが、僕はこの辺りに車を止め  
た事はありませんし、結局遺留品すら出なかったじゃないですか」

あたし、あたし…

「…そうだったかも知れないわ！ でも、でもね、あなただって罪  
を犯したんじゃない！ お姉ちゃんの体を轢いたのは、あなたなの  
よ！ お姉ちゃんを奪っておきながら、どうしてそんなに平気でい  
られるの！」

…悔しくて…本当に悔しくて…あたし、泣きながらテレビに怒  
鳴ってた…

「ミホ…」

礼奈、そっと抱いてくれるの。あたし、きつと…とっても醜い顔

で画面を見る……

…穏やかで、春みたいに青い『海』…優しく、陽光に煌いてる…  
…一番、お姉ちゃんが『好き』だった『海』……

「この崖の下での捜査は難しいですからね。これから、降りられるんですか？」

「いえ、ここに捨てられたとは分かりませんから。ですが、僕も彼女を轢いた事は確かですし…ご遺族の方と同じ所に献花をしたいと思ってるんです」

止めて！ そんな事、しないで…

…白々しい真顔で、どうして…どうして、献花なんて出来るのよ！  
止めて………！

「何処まで…何処までお姉ちゃんを弄ぶのよ………！」  
あたし…絶叫してた……

…所詮、皆は『被害者』じゃないのよ…！ 裁判官も、弁護士も、レポーターも、世論だって…全部、『あたし』じゃないのよ！ どうして止めないの……どうして献花なんてさせるのよ！

「ミホ……」

泣きながら、思わず画面から顔を背けたあたしに…礼奈ね、とっても厳しい声で言ったの…

「あの現場に行きましょう…」

「…え？」

「しっかりと、見ていて欲しいのよ……」

礼奈がそう言って、あたしの濡れた瞳を覗き込んだ瞬間…

…寒い！ あたし…潮風に吹かれてる？

十二月の寒風に抱かれてるのに…下の『海』は、とっても落ち着いた春の様子を呈してる…何時までも続く、潮騒の音……お姉ちゃんの『海』……

…礼奈ね、吹き上げる風に攫われないように、しっかりとあたしを支えてくれたの。そして、黙って足下を見つめて…

………！ ……すぐ足下に………あの、あの犯人が………！

「声は出さないで、ミホ…見ているの…人間の《法》では出来なかつた事を、彼がしてくれるわ…」

え？

あたし、何の事が分かんなくて…

その時、その時ね…

…急に、崖下の海面が渦を巻き始めたの。同時に、雲一つ無かつた静かな空に、鈍い灰色の靄が立ち籠めて…ゆっくりと回りながら…落ちてくる！

「礼奈！」

「……」

見上げると…ね？ 礼奈、とつても厳しい顔してる…うつん、ほんの少し…哀れみも含まれてるかな…

海面からも渦が盛り上がってきて…慌てる、道路の人達に向かって伸びていくの。

『海』が、空から落ちる水の触手に触れた瞬間…

…あの犯人、渦に巻き込まれたのよ…

凄いい悲鳴がしてる…でも、でもね…正直に言うと、あたし…助けようなんて思わなかつた…

犯人、『海』に向かって引き摺り込まれてく…

…犯人が波間に消えるとすぐ…竜巻は収まったのよ…  
薄れてく灰色の雲から、海水の雨が降り注いでる。また照り始めた太陽の光で、無数の雫がとつても眩しく煌いて…

…あたしね、あまりに突然の事で…茫然としてた。その時、礼奈が黙って沖の方を指差したの。

前と変わらない…蒼い海原…あつ！

…白い雲の前で…お姉ちゃん？

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

あたしの声に、にっこり微笑んでくれる…

うつすらと…でも、《本当》に見えてるお姉ちゃんの横に…その時ね、青白く透き通つた、男の人が現れたの。黄金色の鎧を着て

…手には矛を持つてる。

その人…優しく、お姉ちゃんを引き寄せて……

…やだ！ 消えてく…雲に溶けてくよ…！

お姉ちゃん…！

「お姉ちゃん！」

そつと頷いて…綺麗な笑顔で……消えてくのよ……

「ミホ……」

動けないあたしに…礼奈、そつと耳元で囁いてくれた……

「あの男の人は…《海の老人》の息子の一人、浅瀬を司る方なの……

あの二人は、これから《永遠》を共にする事になるわ……」

「礼奈……」

…そんな……

「お姉ちゃん…それで、『幸せ』になれる…の？」

礼奈に聞いてもね、仕方無い…分かってる……でも、でもね？

知りたかったのよ……

「…《永遠》に『生きる』事は…《永遠》に『死ぬ』事と同じなの……

だから……わたしには分からないわ……」

暫くの沈黙の後、礼奈、あたしに微笑んでくれたの……

「でも…あの人は《本当》に『死ぬ』事は無いの……神に愛されて

いるから…神自身が、あの人の『生命』なのよ……一つの心、一つ

の生命……」

あたし……あたし、涙を流してた……

「第三期の存在が、生きては死んでいく…運命の女神達に依るその

弛まぬ流れが、『時間』として黄金の川に紡がれていくんだけど……

ミホ、《真》の存在には…『時間』は絶対に入り込まないの……そ

れはね…『昇華』の『様相』を帯びる事はあっても…《永遠》なの

よ……」

「礼奈……」

あたし…抱き着いてた……声も出さずに、泣き続けてた……



お姉ちゃん……

きつとね……お姉ちゃん、《全部》解つてて……選んだんだと思う……  
…《本当》の中には、『時間』が存在したりしないんだ、って……それでも、《本当》を受け入れて……きつと、きつと……

だから、お姉ちゃん……

……とっても『幸せ』になったのよ……

…お姉ちゃん、あたし……もう、忘れてたりしない……お姉ちゃんのことと触れてた《全て》……もう、忘れてたりしないよ……

だって……それが《永遠》なんだもん……ね……

9 海王の譴罰 おわり

愛しき存在は遠くとも

常にわたしの中に舞う……

聞こえんのじやろうか…あの『悲鳴』が……

公園を取り巻く木々に、綺麗な雪が降り積もってる…とっても素敵な雰囲気。あのコゲラ、こんなに寒くても大丈夫かな…

…でも…でも、ね？ …それもこれも…全部、誰かに見せてもらわないと、あたし…分かんなくなってるのよ…

…あのね、あたし…もう、上半身が起こせなくなっちゃったの。力が全然入んなくて…だからね、お医者さん…半月に一度、わざわざ家に来てくれるのよ。あたし、何だか悪くって……だって、ね？ ……何度採血や検尿しても、原因は分かんないんだもん……そんなに一生懸命してもらって…

…あたし自身は…ね？ …もう…諦めてるから…  
でも、でもね…あたしの体で、何か分かって役に立ってるんなら…それも嬉しいかなって思うのよ。こんなに痩せた身体でも、何か分かったらいいなって…

そう…あたしね、自分の窶れた姿を見たくないから…一昨日、礼奈に鏡を全部仕舞ってもらったの。まるで、骸骨みたいに痩せてるんだもん……こんなに青白く疲れた表情をしているのが、あたしなんだって……信じてはいても、やっぱり見たくないからね。まるで、何十もの歳を、一気に取ったみたいに疲れてるんだもん……

何だか、頭痛もすっかり当たり前になっちゃって……酷い時にも、顔を顰めるくらいかな……吐血も、今日はまだ一度しかしてないし……調子が良いのよ。

…でも、でもね……ちょっと、喉の奥が塞がってるみたい……最近はね、あたし、殆ど何も食べてないのに……苦しくて……胃の中

を全部出してしまいたくなるの……手足が震えて……精一杯、吐こうとするんだけど……やっぱり、何も無いんだもんね……

出るのは……赤い血ばかり……

そんな状態で頭が割れるような痛みに襲われたら……今のあたしでも、流石に辛くて……

でも、でもね……

……恐くはないのよ……

ただ……ね。あたし……疲れてる……息をするのも、面倒に思えてくるくらい……

ガッ！ ババババツ

あつ、又あの音がしてる。昨日からかな、近くで古くなったビルを壊してるのよ。古いって言ったって、まだ十年くらいしか経ってないんだけどね。最新の情報を扱うには、不便なんだって。あたし、よく分かんないけど……でも、でもね？ まだ綺麗だったのに……ちょっと嫌な気分なの。

「美星さん……」

灰色を映す西の窓から、急に優しい声が入ってくる。あたし、首だけ動かして、小人のヴェストルに笑い掛けてた。

「今日は、落ち着かれてるようですね」

部屋に入った瞬間、若者の姿になってる。あたしね、あたし……まだ、どきどきするのよ。とっっても素敵なんだもん。

「うん、ありがとう。昨日よりはずっと気分がいいわ……」

そうなの。ヴェストル、毎日来てくれるのよ。曇ってても、まだ明るい時分からこうやって逢いに来てくれるの……

ヴェストル、安心したようににっこり笑って……いつも礼奈が座る椅子に腰掛けてる。あたし、そんなヴェストルを見てね、ちよつと意地悪く澄ましてみたの。

「これで、あたしの大好きな金星でも見えたらいいんだけど……」

途端に、ヴェストル、困った顔してる。

「物質界の雲は、僕には扱えないんですよ……又、《縁》が生じるの

を覚悟で扱うなら別なんですけど……」

口籠もってるんだもん。あたし、くすくす笑ってすぐに謝ったの。「ごめんね、分かってる。又、変な《縁》でも創って、逢いに来てくれなくなったら嫌だもん。ごめんね」

「いいえ、僕にそれだけの『力』があれば、美星さんに喜んでもらえたんですが……」

「うん。ヴェストルが傍に居てくれる事が、あたしの一番の喜びなの……」

そう……そして、ヴェストルを『好き』でいる事が、あたしの一番の『幸せ』なのよ。

「……有り難う御座います」

そっと、優しく指先を取ってくれる。ちょっと恥ずかしいくらいに瘦せた指……でも、でもね……？ 不思議なの……ヴェストルがあたしを引き寄せてくれたら……あたし、昔みたいに元気な姿になってるのよ。

『嫌な気分』を捨てて、部屋の外に飛び出して……

あたしね……この頃、思うのよ……

……こうやって、星夜の町に連れていってもらう事が……あたしが生きてる目的なのかな……って……

真上にね、ぼんやりとした長楕円形の雲が見えてる。M31なんだけど、あたし、肉眼で見たのは初めてなの。淡く中心部が輝いて……とっても綺麗。……そこからずっと東に視線を下ろしたら、真っ赤なアルデバランが見えて……V字型に集まるヒアデスが、澄み切った夜空で一際映えてる。でも、でもね？ あたし、やっぱりプレアデスの方が可愛くてお気に入りなの。ヒアデスみたいに威張ってないし、広大な宇宙の中で心細げに小さく身を縮めてるんだもん。思わず、両手で包んであげたくなるような、そんな星団なのよ。

「寒くはありませんか？」

「うん、ヴェストルの御蔭でね！」

あたし、ぴつたりと身を寄せてた。人間じゃなくても、こんなに温かな体…あたしね、あの時の……黄金色の光の波を思い出してた…あれは…ね。今のヴェストルと同じだったの……それが、あたしにはとつてもよく分かるのよ…

「そろそろ、降りる？」

「はい…」

ヴェストル、そつと手を引いて、遥か下に広がる闇の中へと導いてくれる。

青く霞んだ星夜の町並み…霧の様な闇が流れては、日常の喧騒を押し隠してくの。とつても静かで…建物を壊すような、あんな騒音は全然無いのよ。

「あれ？」

ビルの谷間に、小さな農園が見えてる。そこにね、地面をふんわり覆ってる雪と同じくらい、真っ白な髪をしたお爺さんがしゃがみ込んだの。見たら、お爺さん、小さな花の手入れしてる。それがね、名前は分かんないけど、とつても可愛らしい水色の花なのよ！「お嬢ちゃん、気に入ったかの？」

じつと見てたら、急にお爺ちゃんが笑いながら話し掛けてきて…あたしね、思わず大きく頷いちゃった。

「そつかそつか。それじゃあ、一株持つて行きなされ」

「いいの？」

「勿論じゃよ」

そつ言いながら、お爺さん、袋に一株移してくれたのよ。あたし、もう嬉しくって！

「ありがとう！」

三つ四つ花が固まってる。うんつと息を吸い込んだら、素敵な薫りが胸一杯に広がるの。まるで、ここだけは春みたい…

「いやいや、僕もお嬢ちゃんの喜んどの顔を見たら、嬉しくなるからのお」

「よく手入れされた碧紗アサギですね。ここにはいつも来られるんですか

？」

ヴェストルの言葉に、お爺さん、少し真顔になってる。でも、でもね？　すぐに優しい笑みを浮かべてくれたの。

「そうじゃ。殆ど毎日来とるよ」

「あたし、よく分かんないけど…大変なんでしょ？」

「なあに、年寄りの趣味じゃからのお。僕はただ、ものを言わん生き物が好きなだけなんじゃよ。『人間』は、そうでもないようじゃが…」

「ううん！　そんな事…」

でも、でもね…あたし、最後まで言えなかった…

…お爺さん、目の前の壊れかけた建物を見てるんだもん…

「あれは…『生きて』はおらんのかな？」

厳しい声…冷たくて…真剣で…

…その時ね、震え出したあたしを、すつと温かな腕が抱き寄せてくれたの。あたし、その腕に力一杯しがみついていた…

「お嬢ちゃんに言うても仕方無いんじゃないが…『ものを言わん』存在が、全て『死んで』いるとでも言うんじゃないだろうか。虐げられて苦痛の《声》を上げる人間には同情を寄せても、無音の《声》で絶り付く存在には見向きもせん。人間とは不思議なもんじゃ…踏み躪られた草花が、《悲鳴》を上げてるのが聞こえんとはな…水の流れや風の乙女が話し掛けても、気付きもせん。光に宿る、偉大な《生命》が分からのじゃろうか…あの建物とて、愛らしい《生命》が最後までしがみついていたんじゃないが…もう…」

まさか…

「…そんな！」

あたし、大きく目を見開いてた…

「そう、『死んだ』んじゃないよ…なかなか『変化』を見せぬ存在は、猶のこと弄ばれる…無惨なもんじゃ。『生まれた』頃は、持て囃されておったのに…最早、誰も慈しむものはおらん…」

「…ううん！　そんな事、ない…少なくとも、あたしは嫌な気分が

したわ……あたし、『物』に《生命》があるかどうかなんて……分かんない……でも、でもね？……胸が痛いよ……」

「美星さん……」

あたし、ヴェストルの胸に顔を埋めてた。自分の都合だけで存在を捨てる……きつと……ね。それがペットなら……まだその行為に反論する人はいると思う……でも……でも、ね？……それが……建物になったら……水や、光になったら……

「美星さん……『人間』の中では、未だに《生命》を定義する事は出来ません。ですから、美星さんは美星さんの感覚で《生命》を見つめて、この方の言葉を考えなくてはいけません……」

「うん……」

人も物も……全部、《本質》的には同じなんだもんね……ヴェストル、あたし、分かっている……『存在』は《全て》……ね……

「お嬢ちゃんのように、《真》を知る人間も居るんじゃない？……一方では、呪いによってさえ、目覚めん輩が多過ぎる……」

「え？」

お爺さん、呪いって……！

びつくりして顔を上げたら……お爺さんの体、どんどん小さくなってる！……青い澄んだ光に纏われて……その綺麗な光がね、狐の形になつてくのよ。ふさふさとした長い尾を揺らして……青い狐、急に闇の中に駆けてくの。

「ヴェストル！」

「はい」

呪いなんて……！……どうして……どうして？

あたし、お爺さんが狐になった事より……呪い、の一言に打ちのめされてた……

こんな可愛い花を育てる人が……どうして……

あたしね、手を引かれながら……声も出さずに泣き出してた……

ここ……病院？

ヴェストル、ふつと空に舞い上がって…病室の窓を通り抜けてる。  
「美星さん…」

うん…大丈夫。もう、泣かないからね…

病室の薄暗がりの中で、青い狐が一人の女の子の胸に乗りかかっている。その子、まだ小さいのに…すっかり痩せ衰えて、ベッドの上で呻き声を漏らしてるのよ…酷い…こんなの、酷すぎるよ…

…あたし、思わず夢中になって叫んでた。

「止めて！ お爺さん、止めて！ こんな事、しちやいけないのよ。考えてる事は正しくても、そのやり方が間違ってるじゃない！」

「御老体、私もそう思います」

…え？

急に、後ろから落ち着いた声が聞こえてきたの。振り返った窓辺に、ふわつと桃色の霞が流れて…その中からね、淡い色合いの衣を纏った琳瑩さんが、少しずつ現れてくる。

「琳瑩様…では、戻る時が来たのですな…」

綺麗な青い狐が…又、あのお爺さんに戻ってる。

「はい…人間の方々に災いを為せば、狐狗苑に戻らなくてははいけませんから…」

「それが守成である琳瑩様の務め…」

お爺さん、すっかりうなだれてる…

「琳瑩さん…」

あたし、お爺さんの為に何か言いたくて…でも、でもね…琳瑩さん、辛そうに首を左右に振ってるのよ…

「御老体…何故、御老体ほどの空狐（つく）が、物質界に留まって…この様な事をされたのですか？」

琳瑩さん、黄金色の瞳を悲しそうに細めてる。そっと、お爺さんに近付いて…優しく顔を上向かせたの。

そしたら、お爺さん…泣いてるのよ…

あたし、辛くて…

「美星さん…」



…うん、分かるよ、ヴェストル…これが、狐狗苑の掟なんだ、って…でも、でもね？ 辛いのよ…

「琳瑩様…儂の様な孤独な年寄りには、物質界の方が心が休まりましたんじや…この星夜の町の農園なら、選ばれた存在しか現れませんからのお…」

「…はい」

琳瑩さん、苦しそくに瞳を閉じてる…

「もう、どれ程昔の事か…その日、一人の女性が農園を覗きに來てくださったんじや。儂は、孤独故に孤独の儘を楽しんでおったんじやが…その女性は、とても碧紗の花を気に入って下さったのお。一株分けてあげましたんじや…その女性は、それはとても喜んで下さって…にこやかに、礼を言っ下さった…」

…琳瑩様…その笑顔は、孤独な年寄りにとっては、心からの慰めでしたんじや…」

あたし、あたし…

…胸元の花を、強く握り締めてた…

「それから、何度もその女性は來て下さったんじやが…その度に、儂も花をあげたんじやが…」

お爺さん、必死に嗚咽を抑えてる…

「ある日の事…その女性は、儂に向こうで悲しそくに告げてきましたんじや…もう、ここには來れません、と…」

…勿論、儂は驚いて問い質したんじやが…その女性は、辛そうな顔をするだけで、答えてはくれんです…儂は不安なまま、それでもいつもと変わらず、花を渡そうとして…

…琳瑩様…その女性は…急に、背中を突き飛ばされたように…かくつと体を反らせたんじや…悲鳴も出せん程の勢いで…何度も何度も、のけ反つとるんです…苦しそくに…口を開け、涙を流しながら…

儂は、急いで駆け寄ったんじやが…目の前で…その女性は、細かな砂粒になつて…風に運ばれてしまいましたんじや…」

「……！」

あたし……あたし……

……ヴェストル、そっと……肩を抱いてくれてた……

「琳瑩様……儂に分かっておったのは、この慰め手が、何かの化身だったと言っただけでしたんじゃ……」

……儂はすぐに、この女性の『殻』を探しに出掛けて……のお……

……そこには……大きなデパートが崩れておりましたんじゃ……前庭の花壇に、儂の花が資材に押し潰されて……

……悲しかったですぞ……儂の気持ちまで踏み躪られて……一つの《生命》も、そこで消されたんですからのお……」

「御老体……」

琳瑩さん……閉じた瞳から、銀の流れが溢れ出してる……

……あたしも……

「琳瑩様、その時、儂は誓いましたんじゃ……《生命》の何たるやも知らず、平気で存在を破壊する人間に復讐と警告を為そうと……じやが、人間を殺すのはいかん……殺しはせんが、それに等しい呪いをかけてやろう、と……」

……この幼子も、ある建設会社の社長の孫娘なんじゃが……誰も、儂の呪いを警告として受け止めようとはせんかった……それも当然なのかも知れん……彼等には、『罪』の意識など全くありませんからのお……

……琳瑩様……儂の全てを奪った人間に……儂は、黙って耐えるべきでしたんじゃろうか……？」

琳瑩さん……何も応えないの……あたし……黙ってられなくて……

「……耐え続けるなんて、そんな事、出来るはずないじゃない！」

「綺さん……」

あたし……お爺さんの首に抱き着いてた。

「ごめん……ごめんね……」

あたしも……その『人間』なんだもんね……《同じ》……『人間』なんだもんね……

…あたし、泣きながら謝ってた……

「お嬢ちゃん……」

…謝るのは、儂の方じゃ…お嬢ちゃんが言うと思ったように…儂は方法を間違えたのやも知れん……

…お嬢ちゃんを見とると…今は、そう思えてくるんじやよ…」

そつと、離してくれる…あたし、両手で顔を覆って泣き続けてた

……

「では、琳瑩様……」

ヴェストル、あたしをそつと抱き上げてくれる。少し離れた所で、あたし、濡れた瞳をお爺さんに向けてた…

…苦しいの…お爺さんの想い、間違つてないもん…方法を間違えただけなのに…何も、あたしには出来なくて…

琳瑩さん、お爺さんの言葉に静かに頷いて、右手をそつと滑らせてる。伸ばされた人差し指と中指の先に、淡い桃色の小さな珠が……

「天狐ノ守戍メエ、覚悟オ！」

…え？ 何？

眩しいのよ！ 窓の外から、急に雷光が飛び込んできて…

「琳瑩様！」

…！ 琳瑩さんに向かつてる！

あたし、慌てて動こうとして…

「大丈夫です、美星さん。彼女は狐狗苑の守戍なんですから」

落ち着いた声でね、ヴェストル、そつとあたしを引き留めたの。

あたしが藍色の瞳を見上げる前に、琳瑩さん、滑らかな動きで右手の珠を雷光に向けて構えてる。

……？ すうーって蠟燭の炎を消すみたいに、雷光が薄れてくの。

桃色の珠も、金色の光と一緒にふわっと消えてしまつて…

「誰ですか？」

琳瑩さん、後に桃色の風を連れながら、窓から飛び出してる。

「ヴェストル！」

「はい……」

あたしが求めたから、すぐにヴェストルも追い掛けてくれたの。

「……え？」

何よ、あれ！

大きな……龍？　それが、空中を漂ってるの。……でも、でもね？

それ、鬼の頭をしてるのよ！　太くて鋭い鉤爪を振り翳して……曲がった嘴からは、変に甲高い声を飛ばしてくる。

「シヨウヨウ様八何処ダア」

「貴方には、関係の無い事です」

琳瑩さん、抑揚なんて全く消えた冷たい声……若しかして、あの化け物……？

「はい、美星さん。あれは夢魔の以津禍いづかです」

やっぱり、そうなんだ。

「龍王封印ノ鍵ヲ渡セエ！」

身を切るような寒風が、怒声と一緒にぶつかってくる。すぐに、ヴェストルが庇ってくれたんだけど……でも、でもね？　今度も、又《縁》を創ったら……又、あたし……

うつん……今度は、二度と逢えなくなるかも……

「ヴェストル殿、任せて下さいますか？　綺さんの為にも……」

「……はい、御願います」

ヴェストル、琳瑩さんに深く頭を下げて、あたしとお爺さんを退がらせたの。あたし、嬉しくて……琳瑩さん、分かってくれたんだ……そんな、何も言えないあたしにね……琳瑩さん、にっこり微笑んでくれたのよ。

「以津禍、すぐにこの場から立ち去りなさい。この方々を巻き込むのなら、私は容赦はしません」

「黙レエ！」

クワツて嘴を開いて……やだ、炎が飛び出してる！

……でも、でもね。琳瑩さん、軽いステップでかわしたの。ふわって、羽毛みたいに軽々としてる。まるで、体重なんて無いみたい。

琳瑩さん、すぐに両手に桃色の珠を創って、それを柔らかな動きで投げつけてる。二つの珠が、以津禍の周りを舞って…綺麗な桃色の淡い渦を創り出ししてるのよ。こんな場面なのに、あたし、思わず見惚れちゃった。

「グウウーツ！」

でも、でもね。以津禍にしてみたら、見惚れるどころじゃなかったみたい。身動きとれなくて、苦しそうに呻いてる。

「妖夢界に戻りなさい…」

静かな言葉と同時に、桃色の珠は以津禍を貫こうと…

「小賢シイ！」

やだ！綺麗な霞が、打ち払われてるじゃない。凄く突風が襲ってくる…

…でも、でもね。ヴェストル、ちゃんと透明な膜で守ってくれたのよ。

「ヴェストル…」

あたし、心配になって見上げてた。今ので、又…

「大丈夫です。あれくらいなら、すぐに対処出来ますから」

そうなんだ…良かった…《本当》に、良かった…

…ううん！琳瑩さんには、全然良くないのよ。あたしが目を向けたら、以津禍、琳瑩さんに向かって鉤爪を翳してる！

「逃げて！」

あたし、思わず叫んで…

…シュ…

…カッ！

え？な、何？

琳瑩さん、両手で防ごうとしてるんだけど…その目の前をね、白い軌跡が走ったの。以津禍、さつと後ろに飛び退ってる。

「<sup>たける</sup>猛！」

普段は落ち着いてる琳瑩さんの顔が、嬉しそうに眩しく輝いてる。温かな感情が溢れ出して…とっても素敵な笑顔なのよ。

「さつさと終わらせた方がいいぜ。対魔委員会の奴等も、すぐそこまで来てやがる」

そう言つて、暗闇から真つ黒な髪の子が出てきたの。あたしと同じくらい…かな。ちよつと大人びてる気がする。…あれ？ この子も、何かの『力』があるみたい。だって、何気無く、空中に浮かんでるんだもん。

「はい…」

……？ 琳瑩さん、又静かな口調に戻つてる。

「オノレエ！」

かつと嘴を開いて…え？ 今度は又、雷？

「…猛！」

琳瑩さん、まるで命令してるみたい。あの男の子も、黙つてそれに従つてる。

琳瑩さんの前で、鏢の無い短刀を構えて…あれ、ヒ首つて言うのかな。それを、男の子が突き出してる。目映い雷光が、ヒ首の前で四方に飛び散つて…その光の帯がね、とっても眩しくて…あたし、思わず目を閉じてた。

「グッ…」

え？ あつ！ 琳瑩さん、何時の間にか以津禍の背後に回つてる。桃色の珠が流れて…ぱつと弾けてるの。その一つ一つが朱色の炎になって、以津禍を包み込んでる……

……あたし…ね。…物凄い悲鳴を、聞いてられなかったの…

……炎は、全部焼ききつてしまつて…灰だつて、雪の上には降り積もつてなかったのよ……

あたしが落ち着きを取り戻した時にはね、琳瑩さん、もうお爺さんを霞で包み込んだの…あたし、どうしていいか分かんなくて…

それでも…そつと、笑おうとしてた…

「…大切にするからね…この花……」

あたしには、何時まで世話出来るか分かんないけど…ね……

……お爺さん、消えながら……優しく頷いてくれたのよ……

「では、私達もこれで失礼します……」

急にそう言つて頭を下げてゐる琳瑩さんに、あたし、慌てて叫んだ。

「待つて！ 珈娜枝ちゃんに、伝えて欲しいの。小箱、ありがとう、つて……御蔭で、とつても慰められた、つて……」

「はい……分かりました」

綺麗な微笑を浮かべて……琳瑩さん、あの猛つて言う子と一緒に、桃色の薄幕に飲み込まれてく……

風が淡い端切れを消し去つたら……そこには、もうあたしとヴェストルしか残つてなかつたの。あれだけの事があつたのに……まるで、嘘みたい。

「美星さん、僕達も戻りましょうか」

「うん……でも、でもね？ ちょっとだけ……」

あたし、ヴェストルに頼んで、そつと病室を覗き込んだの。……良かった、あの女の子、呼吸も落ち着いてる。

もう、大丈夫よね？

「……はい」

良かった……

ヴェストル、優しく抱き締めてくれる……あたし、深い『時間』を秘めた藍色の瞳を見詰めて……

その次にはね、あたし達もそこから消えてたのよ……

『時間』の全てを身に受けながら……



ありがとう 礼奈…《本当》にありがとう……

「あつ、…も、う……」

…うん、すっかり声も出なくなっちゃった。

もう、窓の外がとっても明るくなってる。ついさっきまでは、窓辺に飾った碧紗の花も見えてなかったのに…西に開いた窓の向こうで、今は綺麗に澄み切った青い空が広がってる。朝日に照らされた雲なんて、全然見えてないのよ。

…礼奈、こんなに晴れてるんだもん。きつと、大丈夫よね…

そうなの。今日は、礼奈の受験日。礼奈ってね、こんな風に晴れてる日の方が調子が良いのよ。こんな日なら、もう合格したも同然だわ。

…あたし、安心して溜め息を吐いてた。その途端にね、ふつと脳裏に夢が甦ってきたの。

そう、『夢』…あたしね、ついさっきまで懐かしい『夢』を見てたのよ。…ううん、あれ、昔あった『現実』かも知れない……

あたしが三つくらいの時かな。午前中はね、大好きな中島のお姉ちゃんも学校に行ってたから、あたし、一人でいつも、そこに見えるてる公園で遊んでいたの。

その時も、いつもみたいに砂場に入って服を汚しながら、あたし泥だらけの手で山を作ってた。その時に…ね。急に男の人の声がしたのよ…あたし、随分と頑張ってみたんだけど…その人の、声の調子が思い出せないの。…でも、でもね？ …温かさだけは覚えてる…とっても優しい黄金色の音の波……

「アーニヤさん、僕の事を覚えておられますか？」

そんな事を言ってくるんだもん。あたし、何の事が分かんなくて、きよとんと見上げてた。そう、…見上げてたはずなのに…どうしても、その顔がはつきり思い出せないのよ。シルエット全体が、揺らめく光に包まれてて…

「アーニヤってだあれ？」

真っ黒になつた手を止めて、あたし、小首を傾げてじつと見つめてた。でも、でもね？ 全然、恐くはなかったのよ。それどころか、とっても安心出来る…柔らかな光に覆われて…

「貴女の事ですよ…」

「あたし？ あたし、美星だもん！ アーニヤじゃないよ」

「…そうですか…」

その人、とっても悲しそうな声でね…あたし、『夢』の中で泣きそうになつてた。この人が、こんなに悲しくなつたらいけないの…あたし、この人にはいつも喜んでいて欲しい…小さくても、あたし、本気でそう思ってた。

だからね、あたし、にっこり笑って約束したのよ…

「でも、でもね。あたし、もうお兄ちゃんの事、覚えてたよ」

「美星さん…」

「本当なんだから。…うん、と…じゃあね、あたしが死ぬ時、お兄ちゃん、来てくれてもいいよ。あたし、その時になつても、絶対覚えてるからね！」

あたし、『死』が何かも知らずに約束してた…

「はい…分かりました」

その人、静かに微笑んで…こう言つたと思うのよ。

「もしも、その時になつても、美星さんが僕の事を覚えていて下さつたら…その時には、僕の《全て》を美星さんに託しましょう…」

「うん！ 約束だからねえ」

「はい…」

そこでね、場面全体が金色の波に洗われてくの…それ以上は、何も思い出せなくて…

でも…でも、ね？ きつと…

…そう、きつとこの人は…

「美星さん…お約束を覚えておられますか…」

丸顔の小人が…ヴェストルが、窓の外から覗き込んで…

…そう、やっぱり…

「…あれは…ヴェストルだったのよね…」

目の前で、ふっと若者の姿になって…ヴェストル、重く頷いてる。

あたしね…嬉しかったのよ…《本当》に、嬉しかったの…

「ヴェストル…今日が、『約束の日』なのね…あたし、覚えてたわ」

「…はい」

そう…『約束』…それを果たすのは…

…あたしが『死ぬ』日…

…でも、でもね？ あたし、もう恐くなんてなかったの。

ただ…

「ねえ、ヴェストル…」

ヴェストル、傍の椅子に腰掛けて……そうなの…その椅子は…

「礼奈、悲しむだろうね…」

ヴェストル、あたしの髪をそつと撫でてくれる…

でも、でもね？ 礼奈の受験を、あたし、絶対に邪魔なんてした

くなかったから……連絡はしなかったのよ。

「ヴェストル…」

「はい」

あたしね、すっかり動くようになった舌で…子供みたいに恥ずか

しがつてた。

「…今日、一日中居てくれる？」

「はい…」

「…うん」

あたし、すっかり安心して目を閉じてたのよ…

「ヴェストル…」

「何ですか？ 美星さん」

…今ね、ちよつと不安になつてる…ううん、本当はずつと前から  
気付いてる事なんだけど…

でも、でも…ね？ これだけは…恐くて…まだ、尋ねられない  
のよ…

「ううん…何でもない…」

「美星さんらしくないですね…」

ヴェストル、驚いた顔してるんだもん。あたし、仕方無く遠回し  
に話し始めてた。

「あのね、あたし…《命》を大切にしていなのかな…」

「どうしてですか？」

「《命》を大切にしてい、出来る限り『死』を先に延ばすのなら…  
あたし、入院して…機械や薬を一杯使つてでも、生きようとするべ  
きなんじゃない…？」

そうすれば…そんな風に、機械に繋がれた姿でも…

…ヴェストルとは逢えるのよ…

「ですが…美星さんは、そんな事をしたくないんでしょう？」

「…うん」

そうなの…

生き延びても…何か引つ掛かるのよ……例え、そうする事で  
ヴェストルと…もう少し……そう…もう少し長く、逢える事になっ  
ても…ね。

「それはどうしてですか？」

そつと抱き寄せながら、優しく尋ねてくれる…あたし、どきどき  
しちゃつて…

…でも、でもね…声だけは、真剣に答えようとしてたの。

「あたしね…どんなに疲れても、どんなに寝れても……いつも、『  
あたし』でいようとしてた…『あたしらしく』生きていたかつた  
の…」

「…はい」

「でも、でもね…入院して、あたし、声も出せなくなつて…それでもまだ、機械で生き続けてたら…ね。…『あたし』っていう《様相》が消えてしまうような気がして…」

あたし、自分の意志もはつきり伝えられなくなつて…そんな状態に苦しみながらね、それでも生きていたとは思わないのよ…

そんな状態になつたら…きっと、そこに生きてるのは『あたし』じゃないの…もう、生き延ばされてるのは『あたし』の《命》じゃないのよ。社会や家族、世論や政治みたいな見えない手が『あたし』に代わつて《命》を残してる…でも、でもね？ 苦しみ悶えて死んでいくのは…『あたし』っていう《個》なのよ…そんな、見えない『力』なんかじゃない…

あたし…だからね…『あたし』でいられる間に『死』を迎えたのよ」

「美星さん…」

あたしね、ヴェストルの腕の中で…目を閉じて静かに話し続けた。

「礼奈の事は心配だけど…でも、でもね…」

…もう、あたし、遺すものなんて何も無いのよ。…出来る事は、全部してみたんだもん…後は、こうしてゆっくり逝くだけ…

こうなる事は解つてただけど…」

あたし…ヴェストルを見上げて…思い切り、抱き着いてた。

「もう…お別れね…」

あたし…あたし…

…そう、それがとっても恐かつたの…もう、ヴェストルとも逢えなくなるのよ…

とっても辛いのよ…

ヴェストル…

「美星さん…」

強く抱き締めてくれる…ヴェストル、微かに震えてるあたしに、そっと囁いてくれたの。

「僕も、十二年前にお約束しました…美星さんに《全て》を託します、と……」

僕は、美星さんをずっと見てきました。僕は、いつの時代においても『美星さん』を愛し続けていたんです…第三期第一紀の『美星さん』を…第三期第二紀の『美星さん』を…そして、《今》の『美星さん』を……

美星さん、…『美星さん』は、いつでも僕の事を愛してくれました…ですが…僕は《永遠》なのですが……

…美星さんの『身体』はそうではありません…ですから、美星さんは必ず『死』を迎えられたんです…

新たな『生』を得る時、《魂》は全て洗われてしまいます。その時…以前の想いも又、忘れてしまふんです……

……辛いものでした……」

「ヴェストル……」

ヴェストル…ヴェストル……

あたし、泣きそうな顔で、力一杯抱き着いてた。とっても苦しくて…とっても悲しいの……

……辛いよ……

「…『美星さん』の『想い』は《永遠》でも…それは、所々で途切れてしまいます…美星さん、僕には耐えられなかったんですよ…ですから、何度も、何度も…『美星さん』を愛さないようにと……」

ですが…勿論、無駄な事でした……

…そこで、決めتانです。僕も、《全て》を美星さんと同じく、『死』に託そうと……」

「ヴェストル！」

あたし、思いがけない言葉に、びっくりしてた。

「…西天マイルの支持者である事を止め、『僕』も『死』を味わうつもりです。『美星さん』が『人間』である事を選べば…『僕』も『人間』となつて同じ歳月を共に歩む事が出来ます…美星さん、若しも美

星さんの僕に対する想いが《真》であれば…僕達は同じ存在として、同じ『時間』を辿れるんですよ…」

「ヴェストル…！」

きつと…きつと《真》だもん…絶対、そうなんだから！

「ありがとう…でも…」

でもね…ヴェストルの司ってきた《全て》……ヴェストルの影響を受けてきた沢山の存在…

……《本当》に…いい、の…？

「美星さん…それは、別の《様相》が引き継いでくれるでしょう…僕は、もう《全て》を捨てます……若しも、美星さんが受け取ってくれるのでしたら…」

「あたし……ありがとう…」

あたし、思い切り、何度も何度も抱き締めてた。もっとも…この気持ち、伝えられたら…

……うん。ヴェストルなら…きつと、分かってくれてるよね…

「ありがとう…ヴェストル、きつと捨てるものなんて無いのよ……もっと、大きな重荷を負うんだもん…あたし、何も出来ないけど…でも、でもね…出来る限りで助けてあげたいの…」

「美星さん…有り難う御座います。僕は後悔なんてしません……最後に、『美星さん』さえ残ってくれるのでしたら…」

「ヴェストル…」

嬉しかった…《本当》に嬉しかった…

……ヴェストル…

「あたしね…こんなにヴェストルの事が『好き』になれて……こんなにヴェストルに『好き』になってもらえて……《本当》に良かったと思うの…」

……ありがとう、ヴェストル…」

きつと…きつと、ね。……こう想える事が…

……《本当》なのよ…

……ね…？

そつと、キスしてくれる…

ずっと…ずっと、このまま…手を握ってて…

「美星さん…」

優しい声…あたしね、体中から力が抜けてく気がするの…

…とっても静かなのよ…

深い…深い静寂が温かく包み込んでくれる…

「ヴェストル…」

目が…もう開いてられないよ…

「又…『好き』になつてね…」

「勿論です…美星さん…」

「…ありがとう…」

あたし…そつと、微笑んでた…

…もう…ベッドが感じられないけど…

でも、でもね…指先だけは…とっても柔らかくて…

…温かいの…

…あたし…

…大きく…息を吸い込んで…

…？…とっても眩しい…黄金色…

…うっん…銀色が…

…ヴェストル…

「…！」



突如、矢を受けたような鋭利な痛みが、胸元を貫く…

不意に襲ってきた苦痛に対し、礼奈は思わず身を固めてしまった。呼吸が止まる程に、冷たい手が胸の奥を締め付ける。とてもではないが、これ以上試験を解き続ける事など出来そうにない。

(…ミホ?)

いつも、一番身近に感じられる彼女の気配が…消えている!

…まさか…

「どうかしましたか?」

体が、抑えようもなく微かに震えてくる。恐怖と不安に襲われる礼奈へと、試験官の一人は心配そうに声を掛けていた。

だが…今の彼女には、それに応える余裕など無かった。

今すぐ…そう、今すぐにでも、彼女の所に向かわなくては…

(駄目よ、礼奈! 最後まで頑張つて!)

(…ミホ!)

強く閉じられた瞼の裏に、柔らかな彼女の笑顔が浮かび上がってくる。

(礼奈、あたしになんて気を取られたら駄目よ。来るべきものが来ただけなんだもん…悲しくなんてないわ。

…でも、でもね? 若しもあたしのせいで、礼奈が合格しなかったら…あたし、一つ悲しみを背負って逝く事になるのよ。だから、ね? 頑張つて! 絶対に、合格して!)

(……………)

「大丈夫ですか?」

清らかな滴が、滑らかな頬に幾つもの筋を描いては伝い落ちていく。礼奈の周りには既に何人も試験官達が集まり、何度も声を掛けていたのだが…彼女は全く反応しようとはしなかった。礼奈の意識は、今や自分の心の中の映像にだけ、《全て》を傾けていたのだ。(礼奈…ごめんね。こんな形でお別れするなんて…あたし、思ってもみなかった…でも、でもね…あたし、精一杯自分の意志で生きてきたし…微笑みながら死ねたのよ…それを、誇りにしたいの…

礼奈にも、誇りに思ってもらいたいのよ……

それからね…ヴェストルは……あたしと同じ…『死』を得るんだ  
って……

……あたしの為に…ね。

礼奈……いつもいつも、《本当》にありがとう…又、新しい《様  
相》を身に着けたら……絶対に、逢おうね…三人で…星夜の町で…  
ね……）

(ミホ……)

閉じられた瞳からは、とめどなく美妙な煌きが溢れ出してくる。

だが…礼奈は、自分が涙を流している事にすら気が付いていなかった……

(だから…ね？ もう、泣かないで。あたしだって、笑えたんだから！)

礼奈……

……ごめんね……)

闇に浮かぶ美星は、少ししゃくりあげながらも微笑んでいる。優しく落ち着いたその悲しみは……そう、礼奈自身の為なのだ…

(うつん…わたしの方こそ……ごめんなさい……)

精一杯の力で、礼奈は白皙なその頬に笑みを浮かべようとしていく……

……だが、彼女とて『人間』なのだ…《真実》のみに支配されている訳では無い。悲しみを感じても、それは当然の事ではないか……

(…でも……ミホ…？ …若しも、次の《様相》で…《永遠》を得たなら……)

ヴェストルさんと、その《永遠》を生きていけるの…？)

普段はその強さで感情を抑えている礼奈も、今度だけは自分を欺く事が難しかった。相手が美星だからこそ……《本当》に不安だったのだ…

永遠の《生》は永遠の《死》……彼女は、そう信じていたのだから……

そんな礼奈の問い掛けに、だが美星は考える間も置かず、すぐに力強く頷いていた。

(どんな《様相》になっても……きっと幸福になれるわ)

(ミホ……じゃあ……わたしは、もう……何も、言わないわ……)

今は……今だけは、泣かないでおこう……

自らの頬に伝う清澄な流れこそが、今の美星の心に悲しみと痛みを充たしていくのだから……礼奈は、絶対に彼女を苦しめたくはなかった。その想いは、彼女に大きな強さを与えてくれる……

(ありがとう、礼奈……じゃあ……もう、行くな……)

暗闇を背に映像は広がり、揺らめく影を退けていく……その光に包まれながら、礼奈は胸中に多くの声にならない《言の葉》を受け取っていた。

そして……美星も又、礼奈の《全て》を受け止めて……

……やがて、黄金色の波間へと……そつと、静かに沈み込んでいった……

「おい、この子を医務室に……」

美星の意識が霧散した直後、周囲の慌ただしい声が飛び込んでくる。

礼奈はゆつくりと顔を上げると、そんな言葉に小さく……だが毅然と頭を振って答えていた。

「いえ……大丈夫です。……約束をしたんです……わたしは、それを守らなくてはいけません……」

何事か分からず、顔を見合わせている試験官達に囲まれながら、礼奈は震える指先で鉛筆を走らせ始めた。

その優しい頬に、淡い真珠の煌きは最早見られない……だが……彼女の温かな胸は硬く張り詰め、心はその思いの儘に、いつまでもいつまでも……泣き続けていた……

漸く、受験科目が全て終わる。解答用紙が集められるや否や、礼奈は人の来ない廊下の影へと走り込み……刹那、彼女の姿はその場か

ら掻き消すように見えなくなっていた。

僅かに青の混じる黒い双眸には、すぐに美星の部屋の様子が飛び込んでくる。普段と何一つ変わっていないベッドの上……だが、そこに横たわる彼女は……

……今や、優しく微笑むだけで……少しも動こうとはしないのだ……

「……ミホ……」

(……ごめんなさい……涙は……ごめんなさい……)

どうしても『死』の《本当》を知りながらも……美しい白露は、礼奈の瞳から留まる事無く溢れ出すのだ。

「礼奈さん……」

ベッドの脇で、静かな微笑を浮かべながら……ヴェストルがそつと手を伸ばしてくる。礼奈はその仕草に思わず駆け寄ると、彼の腕にしがみついていた。

ヴェストルにも、多くの犠牲が伴うのだ……どれ程の決意だった事だろう……どれ程の苦しみだった事だろう……

「……お願ひします。喜んでくれませんか……もう、僕と美星さんは『一つ』なんですから……」

そう囁く西天の支持者を、黄金色の光が緩やかに嘗め始めている……

……やがて……

……礼奈の華奢な腕に抱かれていたヴェストルの肉体は、吹いていない風にゆっくりと攫われてしまった……

その瞬間、彼女は声を上げて泣き出していた……

「……礼奈」

深い悲しみが、部屋の存在全てに満ち広がる中……不意に、温かな男の声が零れ落ちてくる。その静謐な重みある呟きには、憐憫の情が色濃く籠められている。

礼奈はその声に『時間』の力を感じ、濡れた優しい瞳をゆっくりと上げた。

「……見ているんだ」

目の前に立つ黒髪の若者は、黄金色を秘める漆黒の双眸で礼奈を見詰めたかと思うと、そっと、彼女の指先を取っていた。

「あつ……」

体中の、あらゆる『力』が融けていく……

次に気付いた時には、礼奈は『郷夢の森』を彷徨っていた。

灰色に支配された森の中で、細い足がぼんやりと立ち尽くす。その時、風が何処からか沸き起こり、待っていた礼奈の耳元へと、先程の若者の声を伝えてきた。

「天の星辰を司る神、ヴェリメよ。西天マールの存在は『死』によって『加階シフト』する……共に、再び西天を与えるべきではないか？」

深く静かな言葉に、郷夢の森を包んで更に余りある程の広さを伴う《声》が、灰色の天蓋から降り注いだ。

「……自ら《義務》を破棄したものに、再び《義務》を付与してどうなるう……」

(……あれは……！)

以前、大好きな『樹』から教わった事がある。あの《声》は、無口なヴェリメ神御自らの応えではないか……

高く、茫洋たる空にも似た静けさ溢れる声に、二十歳程にしか見えぬ若者は、全く動じる事無く続けている。

「それ程の想いだからこそ、再び二人に西天を与えるべきだろう。《全て》を見通す、鴉のラーズヴィズは何を視ている？」

礼奈は、息を潜めて神の応えを待っていた。全てが、この二者の遣り取りから決まるのだ。

「……そう……美星とヴェストルの《全て》が……  
「……あつ……」

一つの色合いに支配されるこの森の中で……不意に、礼奈の前に二本の大木が立ち並んでいた。大樹は共に鮮やかな緑葉を繁らせ、遙かな天空を貫こうとしている。

『色彩』を持つその二本の『樹』は、今迄にも幾度も枝を絡め、

太い幹を交わらせていた。それが、今、目の前で大きく動くようにしているのだ。柔らかく流れる黄金色に包まれ…二本の『樹』は、互いに寄り添って《一つ》になろうとしている……

礼奈は、その青が含まれる黒い瞳を見開いた儘、何も言わず茫然と見守っていた。知らず、胸の奥が熱くなってくる。その胸中の喜びに従い、彼女の双眸からは優しく温かな涙が幾筋も流れ出していく……

突如、二本であった『樹』の幹が、銀色の煌きを呈し始める。『時間』の停滞を示すその輝かしい光を内に秘めながら、黄金を纏う『樹』は郷夢の森の中で完全に《一つ》となり、灰色の煙る天頂目指して梢を伸ばしていく……

「ミホ…」

礼奈には分かっていた。美星は《永遠》をヴェストルと共に生きる事になったのだ。ヴェストルが更なる上位への《移行》を終えると同時に、彼女も又、上位の『様相』に加階し、共に西天の支持者としてこの世を統べるべき《義務》を負う事になったのだ。

「…残念ながら、《義務》の放棄に伴う《業》は負わなくてはならない。恐らく、ヴェストルが望む姿ではないだろうが…これ以上の状態を創る事は、難しかったんだよ。何代もの間冥府を彷徨い、様々な世界に現れては《業》の為に苦しみを負う…俺は、『水』を志す存在として、それだけは止めたかったんだ」

そつと呟かれる言葉に、礼奈はゆっくりと振り返り……

…次には、彼女は灰色の世界から美星の部屋の中へと引き戻されていた。

目の前では、若者が少し複雑な表情で彼女を見守っている。その漆黒の瞳を見上げた瞬間、礼奈は『樹』の中の…『自分』の中のもの一つの存在を思い出していた……

…だが…何処か違う気がする。それが『何』なのかも分からないのだが…

礼奈は、この若者が自分の答えを待っている事に気付いていた。

だが、どうして応える事など出来るだろう……

「…わたしには分かりません」

だから、そう呟くしかなかったのだ…

「あれしか方法が無かったのか…あれで、ミホが幸福になれるのか

……

ですが…志水さん。ミホやヴェストルさんなら…自分達を取り巻く状況がどれだけ変わったとしても…きつと……」

礼奈に自分の名前を言い当てられても、志水は全く驚かなかった。彼女には、その『力』が…そして、それ以上の《運命》が待っているのだ…

「…有り難う。俺にも、限界はある…『時間』の監視者として、これ以上は無理だったんだよ…」

「はい…」

ゆつくりと微笑む礼奈に、彼も頷きながら笑みを返している。だが、すぐに真剣な表情に戻ると、志水は告げた。

「礼奈。君は、今から更なる苦しみを受ける事になる…残念ながら、俺にはそれを助ける事は出来ないんだ…」

「え？」

「…彼女の『死』を、もう一度、よく考えてみてくれないか…君なら、『力』の選択を誤ったりはしないだろう……」

滑らかな、自然な動きで、すつと抱き寄せられる。広くて優しい…礼奈は、既にこの世界に存在しない両親を思い出して瞳を閉じていた。

額に、微かに触れるものがある。礼奈はそこから黄金色の煌きが発し、温かな奔流となって全身に満ち溢れていくのを感じていた。

「耐えられそうになかったら…美星の言葉を思い出さない……」

優しい囁きが耳元を通り過ぎた時、礼奈は独りで部屋の中に立ち尽くしていた。

「…大丈夫です。…もう、泣いたりしません……」

ベッドの中の穏やかな顔を見ながら、礼奈は『時間』が残した『

力』を感じ、静かに呟いていた……

11 冥王の諒恕 おわり

…若き緑は永久に舞う………



## 12 羅ごうの化生

鉢植にされた碧紗の向こうで、寒空の下、金星が一際眩しく輝いている。

…なんて静かなのだろう……なんて……冷たいのだろう……

礼奈は部屋の中へと忍び込む青闇に包まれ、沈黙を身に纏った儘、ベッドの上の美星を見詰めていた。

…どれだけ見ても、安らかに眠っているとしか思えない。窺れているとは言え、白皙な頬には美しく崇高な微笑みが刻み込まれており、軽く閉じられただけのその瞼は今にも開きそうに見える…

だが……もう……この愛らしい唇からは、声が紡がれる事など無いのだ。

礼奈は、ただ黙って……宵闇の中に座り続けていた。

途切れる事の無い思い出が、胸中に黄金色の光を伴って甦って行く。なんて、輝かしい夢だろう……《永遠》は彼女の心に宿り、今も息衝いているのだ……

静寂を『時間』の中に織り込みながら、彼女は座り慣れた椅子から動こうとはしなかった……

どれ程の時間が過ぎたのだろう。不意に、階下でざわめきが起きる。窓の外では、既に清らかな寶石達が天蓋に鏤められていると言うのに、一体誰が、この悲しみの家までやって来たのか……

おばさんの、慌てた声がする……

……医者……？

礼奈はそつと立ち上がると、部屋の明かりを点けて扉を開けようとした。

だが、取っ手に触れるよりも先に、大きな足音が近付いてきたかと思うと、乱暴に扉が押し開かれる。白衣を身に着けた三人の男達は、今はまだ感情を映す事が出来ずにいる礼奈を目の前にして、一瞬その歩みを止めてしまっていた。

「君は、誰だね？」

先頭に立つ男が、気を取り直して尋ねてくる。礼奈はその声に冷たい翳りを感じ取り、僅かに美しい眉を顰めながらも、深く頭を下げていた。この医者こそが、美星を最期まで助けようとしてくれていたのだ。

「彼女の友達で、景守と言います。…あの、お医者様ですか？」

「そうだ。彼女の死を知ったので、急いで駆けつけて来たのだ。悪いが、君はもう帰ってくれないか。今から、彼女を病院まで運ぶのだから」

「病院へ？」

思いもしなかった言葉に、礼奈は啞然とした顔で彼らを見ていた。一体、美星をどうするつもりなのだろう…

少なくとも、礼奈は美星から何も聞いてはいなかった。それはつまり、美星自身も知らなかった事になる。

「そうだ。彼女の肺や内臓に、どの程度の毒素が蓄積したままなのか、解剖して確かめるのだ」

「そんな…！」

強く握り締めた両手を胸元に押し付け、礼奈は微かに身を震わせた。

そんな彼女の思いなど気にも留めず、男は冷たい口調で続けている。

「既に、ご両親の了解は得ている。君には、最早関係の無い事だ」  
硬直した儘動けずにいる礼奈を後目に、他の二人が静かに横たわる美星へと近付こうとしている。だが、すぐに我に変えると、礼奈

はベッドまで引き下がり、そんな男達の前に立ち塞がっていた。

「…ちよつと、待つてください！ 毒素、つて…？ 病気の原因が分かったんですか？」

必死になって叫ぶ礼奈に向かって、薄い唇に冷笑を浮かべながら、先程の男はゆっくりと近付いていた。

「分かるも何も…選ばれた彼女に、私が毒素を注入していたのだからね。勿論、実験の為に、完成したはずの毒消しも試してみたのだが、残念ながら彼女には効かなかったようだ。今から、その原因も調べてみなくてはならないのだよ」

「…毒素を…注入…？」

それまで優しさと戸惑いに満ちていた瞳が、不意に鋭く細められる。穏やかだった言葉の連なりからも抑揚が失せ、礼奈の頬は憤怒の為に赤く上気していた。

「その通り。市販されている薬物で簡単に製造出来る、恐ろしい毒素だ。三年前にその事が知れた時には、流石に医学界に激震が走ったよ。すぐに緊急のプロジェクトが生まれ、極秘裏に実験を進める事になった。勿論、国も、政官共に関わってくれた。

彼女の、月に二度の検査で、様々な事が分かってきた。どれだけの量を摂取すれば、どのような変化が体内で生じるのか、明確に現れたのだ。彼女一人の御蔭で、将来起こり得るこの毒素を用いた戦争や犯罪では、何千人という者が命を救われる事になるだろう」

「…どうして…どうして、平気なの…」

黒い瞳の中で、青光が次第に増してくる。押し出すような低い声に従い、翠色の清澄な光の波が礼奈の全身を静かに洗い始めていた。だが、正義の《影》に酔い痴れている男達に、その不可思議な現象は見えていない…

「何故、平気で悪いのだ？ 私に言わせれば、そもそも秘密にする必要など無いのだ。原料となる薬物は簡単に手に入る。多くの企業で実際に使用されている、ごく基本的な薬品なのだから。規制などすれば、多大なダメージを日本経済に与える事になる。なら、ど

うすればいいのか。簡単な事だ。こうすれば防げるといふ事を、きちんと公表すればいい。その防御策が十分であれば、規制など不要だ。

だからこそ、この一つの命を使って、調べたのだよ。彼女など、多くの必要な者達に比べれば、全く価値の無い人間だったからな。多くの者の為になれたのだ。誰かの役に立って死ぬ事が出来れば、それは本望ではないか」

「ヒトツ…？ ヒツヨウナモノ…？」

刹那、礼奈に纏わる翠の炎が、大きく波打ち薄闇を焦がす。流石に男達もこの不可解な光景に気が付き、思わず退くと茫然と見詰めていた。

「…《生命》は、決して『数』では計れないのに…必要で無いものなんて、一つも無いのに…」

礼奈は、自らの内に暗く不快な靄を見出していた。今迄に見た事も感じた事も無い、仄かに瞬く妖しい揺らめき…今、彼女は生まれて初めて、人に対して『殺意』を抱いていたのだ…

「…ミホは…ミホは信じていたのよ…お医者様は、頑張つて病気を治そうとしてくれてる、つて…必死で、病気の原因を探してくれてる、つて…」

それなのに…薬と信じて…毒を注入されていたなんて…！  
憤激に震える体から、凄まじい光のうねりが感情の波に伴い進む。強く握り締められたその両の拳からは、今や鮮やかな赤い雫が床の上へと間断無く滴り落ちていた。

男は、そんな礼奈の反応にたじろぎながらも、尚も冷めた声で話し掛けている。

「落ち着きなさい。無駄に死んだ訳ではないのだから」

「ミホを弄んでおきながら…どうして、そんな事が言えるの…！

ミホは…ミホは、何も知らなかったのよ…？ 自分が、実験の対象にされているなんて…病気なんかではなくて…殺されているんだ、つて…」

……普段の礼奈を知る者なら、今の彼女を見て驚く事だろう。優しさと温もりに満ち、静けさと穏やかさに溢れる彼女が、今や形相も凄まじく、まるで鬼魅であるかのように振舞っていた……

「知らなくて当然だ。よく考えてみるがいい。何か別の薬でも飲まれたら、実験にならないではないか」

「……！ ……その為に、ミホは…ミホはあんなにも苦しんでいたのよ……！」

…許せない……わたし、絶対に許せない……

ミホ、いつも誰か他の人の役に立ちたい、って……でも、こんな形で…何も知らずに、殺されて……ミホの…ミホの意志なんて、何処にも無いじゃない……！」

「そんなものは無い。多くの者の為には、少数の犠牲の意志など関係無い」

「多くの為なら…ミホが殺されても構わないの…？」

「よく考えるがいい。彼女一人がいなくなっても、これからもずっと、多くの者には全く関係が無いのだ。多くの者にとって、彼女は必要な者とはなり得ない」

「……！ ……でも…でも『わたし』にとっては、必要な人だったのよ……！」

…彼女の死は何だったのか……あの苦しみは、一体何の為に……

「起こるかどうかも分からない妄想で…力づくでミホを巻き込むなんて……」

…絶対に、許せない……！」

悲痛な絶叫が部屋の中に響き渡るや否や、礼奈を包む炎から透き通った翠の槍が無数に飛び出していく。心に満ちる悲愴な殺意に従い、美しい光の軌跡は、真っ直ぐに男達を貫こうと……

(…礼奈)

不意に、『時間』の《声》が胸に過ぎる。大きな温もりに満ち溢れた…だが、厳しくて深い黄金色の『力』……

次の瞬間、全ての槍の穂先は弾け、翠の光は消えていた……

(志水さん……)

胸の呟きと共に、彼女の心を支配していた殺意や憎悪が黄金色の輝きへと飲み込まれていく。

…そこには、今や例えようも無い、深い悲しみだけが…青く、静かに横たわっていた……

ちらちらと瞬く翠を背に負いながら、震える唇で僅かに息を吸い込む……

…やがて、礼奈はうろたえている男達を見据えると、静かに声を押し出していた。

「…わたし…今でも、本当は殺してしまいたいのかも知れない……どんな言葉で飾っても…わたしには、絶対に赦せないから……

でも……そんな事をすれば……きつと、ミホは悲しむもの……きつと…どんな理由であっても…人殺しにはなつて欲しくない……

…きつと、そう思っているもの……  
「…わたし…これ以上……ミホに悲しんでもらいたくない……」

優しい頬に、清楚な煌きが宿る。微かに震える声で、礼奈は瞳を閉じると語り続けていた。

「…ミホが…どうして……どうして、殺されなくてはならなかったのか……わたしには…分からない……

…でも、ミホは精一杯、自分の儘で生きていたわ……  
その『死』には…他のどんな意志も、入り込む事なんて出来ない

のよ……」  
美星の死…その絶対的な《真実》の前には、「弄ばれ、殺された」という《事実》など無にも等しい。

美星は、その経過や原因はどうであれ、《真》を知り、《唯一の本質》への『回帰』を行つたのだ……

…礼奈の独白が続く。

「…自らの目的と利己的な思考の為に…《影》にも気付かず…他の『個』なんて顧みない……

そんな酷いあなた達を…でも…わたし、このままにしておきたくもない……

ミホの様に苦しむのは…もう、一人で充分なもの……  
…だから……」

不意に顔を上げると、毅然とした態度で礼奈は告げた。

「わたしは、あなた達を妖夢界に送ります。物質界に居ながら、夢魔と成った人には…そこ以外に、行くべき所はありません…」

愛らしい唇の間から、緩やかな音色に乗って言の葉が滑り出す。

…次には、三人の姿は美星の部屋から消え去っていた。

「…ミホ……」

張り詰めていた気が一気に緩み、礼奈はその場で膝を折り、頹れ  
てしまう……

……やがて……声も無く……彼女は心の儘に哭き出していた……

「ミホ…わたしね、高校に合格したの……」

礼奈は暮れていく西天マールを見詰め、そつと小さく呟いていた。

地上は遥かな下に霞んでいる。だが、どれだけ高く昇ろうとも、

美星やヴェストルの居る世界には届かないのだ…未だ、彼女自身には、ヴェストルの世界へと向かうことは許されていなかった。

茜色が残る間から、既に金星の輝きは大地に沈み込もうとしている。もうすぐ、この美しい宝石クニルは東の空へと移って行くのだろう。

「…ありがとう……」

柔らかな囁きが、銀色に煌く寒風に抱かれ、流れていく。

無論、応えなど望んでいない。今や、美星は更なる上位へと移行しているのだ。その『加階』の際に、記憶は洗われ…最早、礼奈一人にその視線を向ける事も無いだろう…

胸の奥が、深い悲しみに締め付けられる。

だが、礼奈には分かっていたのだ。この胸の奥に宿る黄金の存在

も又、《今》を生きる『美星』そのものだという事を……

白銀の乙女達に慰められながら、礼奈は軽く両腕を広げていた。細く、透き通るように白い腕が、天の残照を受けて輝き出している。明るい栗色の髪は淡い金色に煌き、風の愛撫に依ってその上には無数の宝石が鑲められていた。

青の入る黒い瞳が、高い天空を仰ぎ見る。その視野の中へと、クリーム色をしたカペラの眩しい光輝が飛び込んできた。そのまま目を東へ下げていくと、赤い黄金に輝くポルックスと白いカストルが仲良く並んで見えている。双子座とはよく言ったものだ。愛らしいこの星達の如く、美星とヴェストルも《永遠》に西の空を駆け巡る事になるのだろう。

…礼奈は、美星が好きだった星々を、丹念に一つ一つ追っていた。南では、オリオンの三ツ星が天を貫き、それを挟んで赤く燃えるベテルギウスと白いリゲルが華やかに青闇を飾っている。その傍で鋭く瞳を射してくるのが、白く冷たいシリウスだ。再び東へと向かうと、青白いプロキオンが輝いており、地平近くではレグルスが大気に揺れながら礼奈を見上げている……

それぞれの星達に、それぞれの思い出が宿っている。胸中に広がるその温かな波に想いを馳せながら、彼女は天頂へともう一度視線を戻した。

…深く、息を吸い込む……

やがて、その双眸を静かに閉じると…調った愛らしい唇からは、優しい言葉達がそっと溢れ出していた。

朧に霞む 天穹の許

灰色の大地に育まれ

一つの大樹が 腕かいなを伸ばす…



静寂漂う その樹幹には

『時間』にも褪せぬ《銀》が流れ

光に躍る その枝葉には

《真》を示す《黄金》が宿る…

曾て 二つにありしもの

今は 共に唇齒と為る…

さ緑の葉は 互いを重ね

揺らめく軌跡を 晶に描く

楚々たる枝柯は 優美に絡み

一途の旅路を 虚空に辿る…

清澄な大気へと、柔らかな言葉が溶けていく。全ての存在がそれを受け取り、礼奈の想いにじつと耳を傾けていた。

(…?)

不意に、自分の詩に和してきた《声》がある。微かで…捉えどころの無い遠い歌声…

(あれは…)

珈娜枝や、琳瑯だろつか…いや、それだけではない。何処か懐かしく、心がざざめいてくる…優しく温かな言葉達…

礼奈は、いつしか黄金色の輝きに身を抱かれながら、知らず涙を流していた。

…そう、あの《声》こそ…

『樹』の中の…もう一つの存在…《源》であり、『自分自身』である存在…

…その存在の《声》なのだ…

涼風駆ける 緑陰の下  
夕づつ愛せし『歴史』の『樹』を  
わたしは見上げ 胸に呼ぶ…

異なる姿に 生を享け

輝き違えた 碧葉群

その一枚が 黄金に染まる…

遥かな『過去』を その身に纏い

久遠の『未来』へと 新たを過ごす

月の煌き 秘めたる風は

静かな波間に 夢路を巡る…

今や、礼奈ははつきりと《声》の主を確信していた。『もう一つ  
のわたし』は、この世界…この時代に『生きている』のだ…

素直な気持ちで、彼女はその《真実》を受け止めていた。

…いつか、出逢えるかも知れない……例え、それが『人間』では  
ないとしても……

突然湧き上がってくる喜びに、全身が打ち震える。興奮に掠れた  
声で、礼奈は更に高らかと歌い上げていた。

《真》を抱き 春には歌い

《誠》に抱かれ 夏に戯る

星斗を包み 秋を囁き

夕に包まれ 冬に羽ばたく…

愛しき存在は遠くとも

常にわたしの中に舞う……

『時間』の全てを身に受けながら……

…若き緑は永久とわに舞う……

「…ありがとう……」

礼奈は、自分の想いに触れてくれた《全て》の存在に、美しい、豊かな微笑みを投げ掛けていた。

……やがて、濡れた瞳からは薄明も消える……

穏やかな星辰が散る西天に向かい、礼奈は静かな喜びと共に告げていた。

「…ミホ……もう、わたし…悲しんだりしないわ……」

……これが、《本当》なんだもの……きっと、そうなの……」

澄んだ翠の光が、闇の中へと掻き消されていく。

…後には、白銀の乙女達だけが、天の宝珠を瞬かせていた……

12 羅らごうの化生 おわり

『星斗幻想紀』 おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3709c/>

---

星斗幻想紀

2010年10月17日02時16分発行